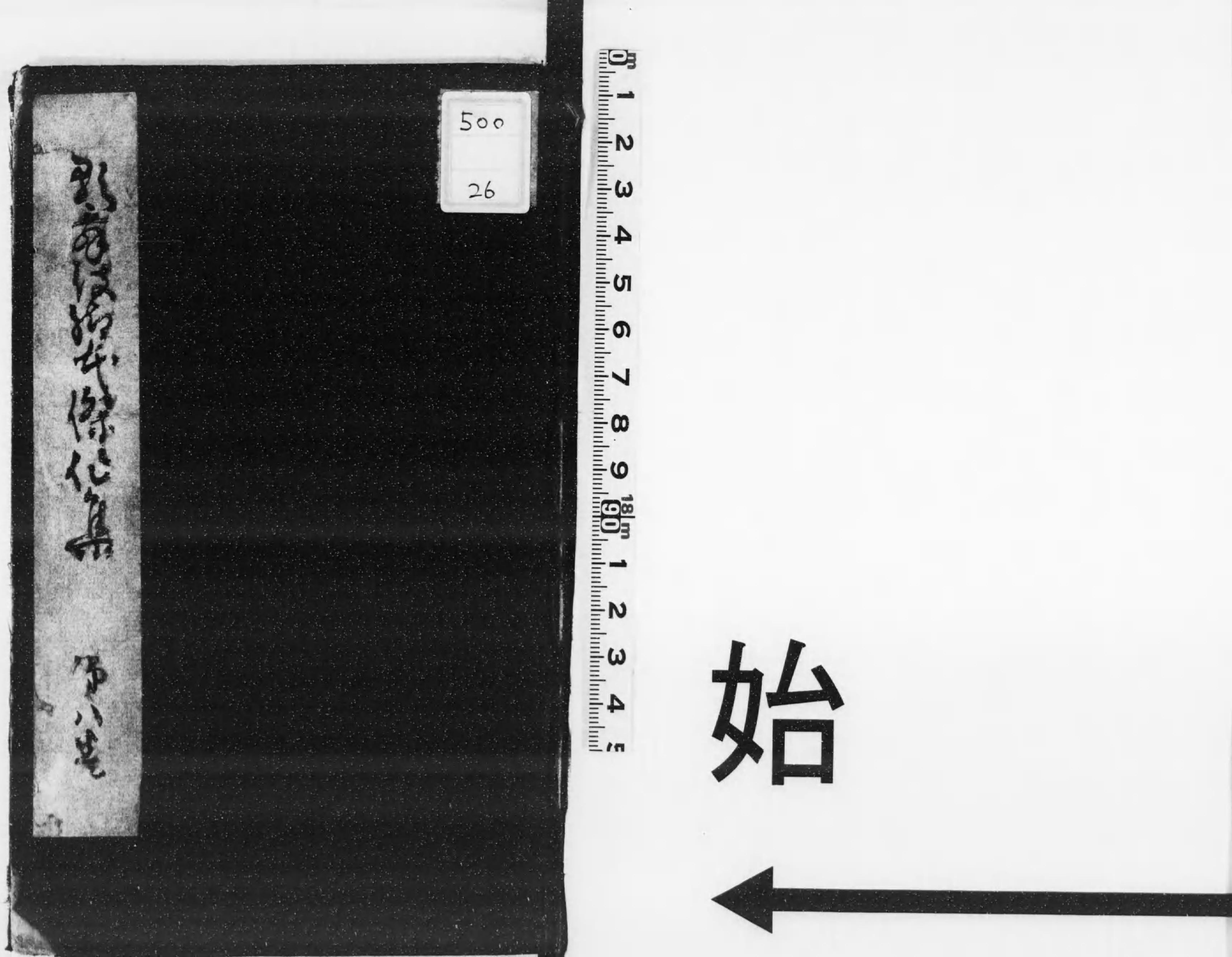

500
26
始

800-26

坪内逍遙
渥美清太郎 共編

歌舞伎脚本傑作集 第八卷

久助
短夜仇散書
句兄弟菖蒲惟孚
褄重噂菊月

11. 11. 3
購求

おとあ
尾上菊五郎
豊国画

おとめ
尾上菊五郎
寺蔵
坂東三洋五郎
豊国画

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

歌舞伎脚本傑作集

第八卷

東京 春陽堂發行

目次

福森久助小傳……
『短夜仇散書』解題……
同　本　文……一頁—一一九頁
『句兄弟菖蒲帷子』解題……
同　本　文……一二一頁—三〇八頁
『棲重疊菊月』解題……
同　本　文……三〇九頁—四八九頁

挿繪目次

『褄重噂菊月』錦繪（色摺り木版　五渡亭國貞畫）……卷頭
『短夜仇散書』辻番附……一頁の前
『短夜仇散書』道行き場の錦繪（コロタイプ。初代歌川豐國畫）……一〇九頁の前
『短夜仇散書』鯉つかみの錦繪（コロタイプ。五渡亭國貞畫）……一一七頁の前
『句兄弟菖蒲帷子』大川端の錦繪（コロタイプ。五渡亭國貞畫）……二五三頁の前
『褄重噂菊月』辻番附……三〇九頁の前
『褄重噂菊月』花屋敷の場錦繪（コロタイプ。初代歌川豐國畫）……三五三頁の前

『短夜仇散書』は、文化十年七月の、中村座の二番目狂言で、福森久助が四十四歳の時の作である。此時は、一番目が「太平記菊水酒卷」で、二番目は三日替り。初日は尾上松助中心の、此「短夜仇散書」で、二日目は市川市藏中心の、「お妻八郎兵衛」、三日目は坂東三津五郎中心の「お千代兵衛」であつたが、「短夜仇散書」が最も好評を得たので、八月二十三日から、一番目を「白石噺」に變へ、二番目を「短夜仇散書」ばかりにして、ずつと顔見世まで打ち續けたほどの大當りを得た。松助の俠ひ肌を見て、大工六三をあてはめたのは久助の働きで、此狂言が當つて以來、六三といへば音羽屋を聯想させるやうになつた。三世から五世まで、狂言は違ふが、大工六三の役は數多く勤めてゐる。

三幕目、福島屋寮の場に、狂言に准へた追善やうの、口上があるが、あれは前年の十一月廿九日に死んだ四世瀨川路考と、すぐ翌十二月八日に死んだ四世澤村宗十郎の事を當てこんだのである。舞臺の諸優が、死んだ二人と親戚關係になつてゐるところから、狂言中に口上を述べたのである。

大詰めは、所謂「鯉摑み」の場である。舞臺へ本水を湛えて、其中で俳優が大鯉と搏鬪を演じる。水船に近い觀客は、劇場から與へられた蓙で、水の餘沫を防ぎながら見物する。江戸の夏狂言には毎年のやうに演じられる、いはゞ吉例ともいふべき趣向を取り込んだのである。此狂言は再演されなかつた。役割りは左の如くであつた。

もしおばアお松、大工六三郎の二役を二世尾上松助　後三世尾上菊五郎）。福島屋娘お園を二世澤村田之助。若林七郎助を中村東藏。福島屋の後家お梶を芳澤いろは。梶川長兵衛を市川市藏。田舍娘おわたを瀨川多門（後五世瀨川菊之助）。髪ゆひ源吉に市山七藏。大工平助に坂東大吉。中村少長に中村七三郎。市川露鶴に市川傳藏。頭取團車に市川辨藏。船越十右衛門に三世坂東三津五郎。福島屋清兵衛に助高屋高助。

底本としたのは、渥美所藏の四册の寫本で、帝國圖書館所藏の三册物の寫本を參考とした。

『句兄弟菖蒲帷子』は、文化十二年五月の中村座に上場した二番目狂言で、久助が得意の書替へ物である。五瓶の『隅田春妓女容性』から趣向を借りてゐる事は否めないが、此狂言は、梅の由兵衛が主人公のやうで實は長吉に最も力を入れたもので、歌右衛門に前髪の惡黨をやらせたいために梅由の狂言を思ひ附いたのである。そして、歌右衛門の長吉は、三津五郎の由兵衛よりもずつと好評を得た。それが爲、此江戸狂言が大阪にも上場された事がある。此長吉でも、「短夜仇散書」のかしくでも、「褄重噂菊月」のお駒でも、當時としては、非常に變つた型の役であつた。他人の作からヒントを得て書きながら、しかも其作中へ、在來に無い人物を創り出すのが、久助の作に見られる最も著しい特色である。

此狂言は、大阪でも演じられた事があるのだが、其年代が判然しない、今、書きおろしの時と、明治になつてから上場された時の役割りを對照して左に掲げる。

名題	句兄弟菖蒲帷子	花菖蒲葛飾草紙
年月	文化十二年五月	明治十年六月
座名	中村座	春木座
梅の由兵衛	三世坂東三津五郎	市川權十郎
丁稚長吉	三世中村歌右衛門	九世片岡我當

堀の源兵衛	市川市藏
金神長五郎	尾上梅幸（後に三世尾上菊五郎）
辻卜者新柳	市川七藏
番頭伴七	中村東藏
女房お花	市川友藏
養子甚太郎	坂東熊平
若黨和源次	中村七三郎
曾根段五郎	尾上傳三郎
藪醫者久庵	市川鶴三郎
主佐次兵衛	市川辨藏
研屋佐助	尾上小の藏
奥女中妻木	市川おの江
藝者お辰	市川傳藏
娘お君	中村松江（後二世中村富十郎）
お先の三次	中村傳九郎
	四世關三十郎
	市川新十郎
	中村鶴助
	中村翫尺
	中村相藏
	坂東秀藏
	中村鶴次
	市川幡左右
	市川幡右衛門
	市川幡右衛門
	市川泉十郎
	姉川源之助
	河原崎扇之
	市川女寅
	片岡我當（現仁左衛門）

女房お梅	中村大吉
	四世市川門之助

本卷に收錄した臺帳の底本としては、早稲田大學附屬圖書館所藏の三册本の寫本を使つた。此外に、參考にすべき他の同脚本を何處にも見出せなかつた。

文化十三年六月三十日の拂曉、江戸京橋靈岸島東淡町に人殺しがあつた。同町一丁目の家主、武兵衛といふ男が、妻のおひめに殺されたのである。おひめは、上總の國藏波村の者で、其月の二十八日に嫁入りしたばかりであつたが、夫が所持の短刀で夫の咽喉を抉つて殺し、十二兩二分入つてゐる胴卷きを奪ひ、しかも此殺人罪を、故郷で遺恨のあつた長八といふ男に塗り附けようとしたのであつた。淺はかな企みは忽ち顯はれて、召捕られ、品川で磔刑に處せられる事となつた。亭主殺しといふので、これが江戸中の大評判になつて、今日はお仕置きだ、いや、明日だ、と傳馬町牢屋の裏門附近は、毎日見物が押しかける騷ぎであつたが、いよ〳〵七月二十五日、おひめは裸馬に乘せて引出され、日本橋京橋芝を引き廻された上、品川で磔刑に處せられた。當時の市中はどこへ行つても此評判ばかりで、瓦版の讀賣りだけでも、どの位る發行されたか解らぬほどであつた。

同じ年の春、お玉ヶ池に福島屋清右衛門といふ魚屋があつた。貧しい上に病氣勝ちで、始終困つてゐたが、ある日、飼ひ猫のきじが、何か咬へて飛び込んで來たので、見ると、口にあるのは一枚の小判である。飼ひ主の貧困を助けてくれるのだらうと理屈を附けて、清右衛門は其一兩を燈して、二朱はすぐに遣つてしまつた。猫は、隣り町の伊勢屋といふ兩替屋から、小判を咬へ出したのであつた。翌日も其店先へ行つて、又小判を一枚咬へたが、今度は店員に發見され、すぐに其

場で殺されてしまつた。其事が清右衛門に解つたので、根が正直な彼れは驚いて、遣ひ殘りの二分二朱を持つて伊勢屋へ詫びに行つたが、伊勢屋でも清右衛門の飼ひ猫を殺した事を氣の毒がり、其三分二朱の外に、猫が目がけた一兩の小判まで病氣見舞ひとして清右衛門に贈つた。清右衛門は三分二朱で、回向院の中へきじの墓をたてた。「猫に小判」の巷談は、瓦版で市中に宣傳され、これ又到る所の話題になつてゐた。

三面記事を捕へて脚色するのに、特殊な才を持つてゐた福森久助は、「亭主殺し」と「猫に小判」の二件を打混じて、『褄重噂菊月』を作り、同じ文化十三年九月の中村座に上演した。そして、豫期以上の大入り大當りをゞめた。

亭主殺しといふので、白木屋お駒の世界を借りて來たのは、久助の巧者なところである。長八に似た、丈八といふ役名が使はれる上に、お駒といへば、すぐに猫を聯想させる。猫の名はこまにして、小判を咬へるのではあらは過ぎるといふので、小判形の寶物にした。お玉ヶ池の魚屋、鈴ヶ森の磔刑なぞ、大體の骨を事實に近く脚色したから、見物は喜んだのである。其上、當時流行り出した柴又の帝釋天を、月も會式に近いので道具に使ひ、題經寺から大經師を思ひ附いて、おさん茂兵衛を配したのである。おさん茂兵衛の道行きに使つた。「由緣の暦歌」の清元は、曲が巧みに出來てゐるので、現今まで傳はつて、流行つてゐる。また、三幕目あたりに、誓願寺前と

いふ事に頻りに役者に言はせてゐるが、これは亭主殺しの兇行の場所が靈岸島なので、場所の音をもぢつたのである。こんな所にも久助の機智が見える。

當時の評判記『役者名物合』は左の如く評してゐる。

お駒、二十五六の中年增、美しい事、香箱を取返さんと才三との濡れ事。喜藏の聟入りに、繼親庄兵衛の慾張り、わが身のつまり才三が香箱を取らんと、刺し殺したと思ひの外、亭主の喜藏を殺した惡名に繩目の磔刑、正の物を正で見せる磔刑のお駒には見物も膽を潰し驚き入つて無言なり、少し柱下ると胴抜けの早業、屏風と變じ、掛け物と變り、香花、茶湯の仕掛け古今の評判。(中畧)此節故人松綠一周忌追善狂言の大當り、土間の眞中より出る恐ろしさ、せり上げの幽靈物凄く、脊の高さ一丈あまり、黑髪の長さ五尺ばかり、舞臺へかゝり、物語りの姿を見ては、女中子供は、怖い〳〵と見る事能はず。櫺子窓を破りて入る仕掛け、する〳〵と内へ入る。井戸より出て、本土へ歸ると虛空へのぼりたまふ仕掛けの大出來、古今の大入り。奇妙々々。

これほどの大評判であつた此狂言も、際物のためか、再演はされなかつた。尤も、明治二年の秋、中村座で、お駒を五世尾上菊五郎、才三を市川九藏、丈八を坂東龜藏、お玉を五世坂東三津五郎にあてゝ、默阿彌が書き直す筈であつたが、何の都合でか、實行はされなかつた。

役割りは左の如くである。

佃屋喜藏、魚賣り腕の喜三郎の二役を三世坂東三津五郎、大經師茂兵衛、城木屋娘お駒、尾花六郎右衛門の三役を三世尾上菊五郎。髪ゆひ才三郎を五世松本幸四郎。茂兵衛女房お玉を中村松江。藝者額のおさんを澤村田之助。番頭丈八を七世市川團十郎。按摩赤松梅柳を坂東熊平。城木屋庄兵衛を市川友藏。日雇取り善助を松本小次郎。秋月角太郎を中村傳九郎。家主杢右衛門を坂東大吉。船宿のお藤を吾妻藤藏。勇藏を小佐川七藏。下女おりくを瀨川路之助、妹お常を松本よね三、丁稚次郎吉を尾上松助。船頭佐吉を坂東簑助。

本書の底本としては、早稲田大學附屬圖書館所藏の四册物の寫本に依り、帝國圖書館所藏十册物の寫本を參考とした。

渥美清太郎識

福森久助小傳

福森久助は、明和四年、本所四つ目の河内屋といふ薪問屋の家に生れた。彼れが作者になつたのは、道樂の爲に家を勘當された後らしい。玉卷惠助といふ作者の門に入つて、玉卷丘次と稱して芝居へ出たが、寛政二年頃の番附には、もう福森久助といふ二枚目作者として可なり太い字で名が戴つてゐる。師匠の惠助が、生涯二枚目以上に上れなかつたに比べては、非常に出世が早かつたらしい。寛政十年頃には、立作者にこそ進まなかつたが、初代櫻田治助、村岡幸次、松井由輔、並木五瓶などと並んで、一日の狂言の中でも可なり重要な部分を受け持つやうになつてゐた。四世鶴屋南北も、此時代の作者であつたが、年齢からいつても、作者生活の期間からいつても、南北に比べては、遙かに後輩の久助の方が、どし〳〵先きへ位置を進めて行つたのである。立作者になつたのも、文化四年、彼れが三十八歳の時であつた。南北が文化五年、五十四歳で、やう〳〵其位置を得たのとは大きな違ひだ。南北ばかりでなく、當時のどの作者を比較して見ても、久助の出世は異常な早さであつたらしい。

これには實力の外に二つの原因がある。一つは、久助は二枚目時代に、芝居の中で可なりに金を

遣つたらしい事である。實家を勘當されてから十五年目に、詫びが叶つて歸り、父が死去してからも實家の業は繼がず、遺産の二百兩を貰つて、それを資本に、作者のかたはら、金貸しをやつてゐたのである。そして、此内職で儲けた金を、相應な派手さ加減で芝居の中に蒔いたのである。さういふ事が、其人の位置に好影響を及ぼす事は、今も昔も變りはない。もう一つは、三世坂東三津五郎が彼れを贔屓にして、非常に引き立てた事である。彼れが立作者になれたのも、全く三津五郎の聲がゝりがあつたからであつた。從つて彼れの作は、多くは三津五郎を中心とするものか、又は三津五郎の出る狂言である。其恩返しとして、三津五郎の一子簑助には、彼れも全力を注いでいゝ役を與へて、引き立てるやうに努めた。丁度、其の關係が小團次と獸阿彌のそれに似てゐる。

文化十二年、久助改め喜宇助となつたのは、當時の將軍の子の名を憚つたのだといふ。元の久助に返ると間もなく、文政元年九月八日に死んだ。五十二歳であつた。寺は小松川の源法寺である。久助は通稱を「安久」と呼ばれた。深川の安宅町に住んでゐたので、安宅の久助卽ち「安久」と呼ばれたのである。また蔭では「燒き直しの久助」ともいはれた。狂言の筋を、院本や昔の狂言から多く燒き直すからだといふのである。作者の傳記を書いたどの本も、斯ういふ意味で久助を攻擊をしてゐるが、併し事實はそれほどで無いばかりか、さういふ疑ひを受けやすい書替へ物に

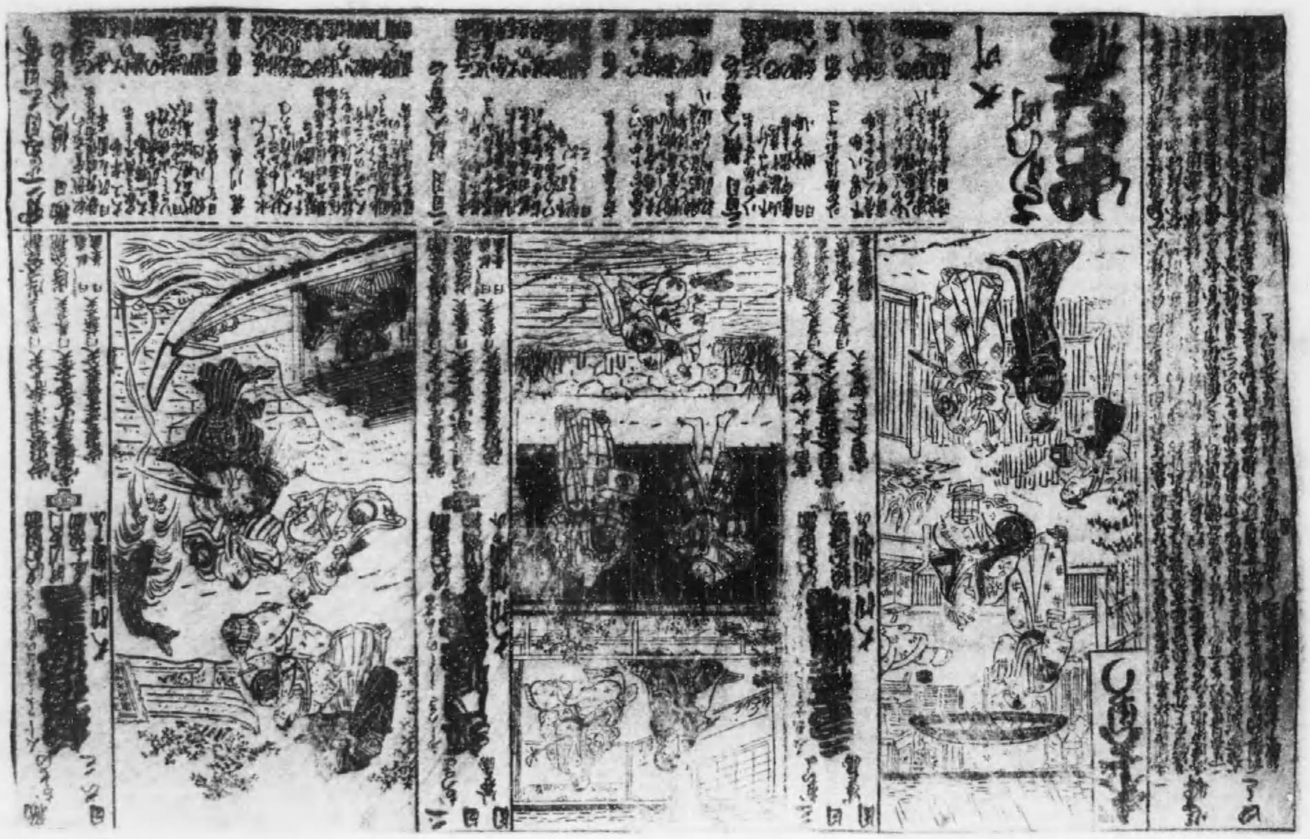
こそ、久助の味が深く出てゐることは、本卷に收錄した三篇をお讀みになればおわかりになる。久助が立作者になつてからの、確定し得られる限りの彼れの作を、年代順に排列して見ると左の通りである。

雪　八島凱陣（文化四年十一月市村座。三津五郎の辨慶）
月梅和曾我（文化五年一月同座。小鍛冶の對面）
春商戀山崎（同年同月同座。幸四郎の引き窓與兵衞）
花麗見雪楠（同年十一月森田座。三津五郎の楠正行）
倭假名色七文字（同年同月同座。三津五郎の七變化所作事）
御贔屓新玉曾我（同六年一月同座。三津五郎の祐經）
花暦開紀行（同年同月同座。三津五郎の隱れ家茂兵衞）
江戸櫻惠潤高德（同九年十一月中村座。三津五郎の兒島高德）
春駒勢曾我（同十年一月同座。三津五郎の祐經と滿江）
初便廓玉章（同年同月同座。梅忠の書替へ）
其面影伊達寫繪（同年三月同座。三津五郎の政岡、田之助の賴兼）

短夜仇散書（同年七月同座。本卷收錄）
惣一座色の世界（同十一年九月同座。三津五郎の稻の谷半兵衛）
伊達彩曾我雛形（同十二年一月同座。歌右衛門の男政岡）
五大力艶湊（同年三月同座。歌右衛門三津五郎の黑船獄門）
旬兄弟菖蒲帷子（同年七月同座。本卷收錄）
男作女吉原（同年七月同座。三津五郎の團七茂兵衛）
壽靱猿（同年同月同座。狂言の靱猿）
四天王御江戸鏑（同年十一同座。三津五郎の渡邊綱）
歲市膽安賣（同年同月同座。三津五郎の遠山甚四郎）
比翼蝶春曾我菊（同十三年一月同座。髮梳きの權八。現存）
梅櫻松雙紙（同年三月同座。菅原の書替へ。現存）
時鳥貞婦噺（同年五月同座。朝貌日記と未刻太鼓）
褄重噂菊月（同十三年九月同座。本卷收錄）
不破名古屋雪棹（同年十一月同座。伊達と稻妻草紙）
頃櫻曾我湊（同十四年三月同座。淸玄と黑船忠右衛門）

追善累扇子（同年八月同座。天德の補作）
旨首尾鳴戸白浪（同年九月同座。三津五郎の阿波十郎兵衛）
花雪和合太平記（同年十一月同座。三津五郎の大塔の宮）
年曾我曲輪日記（文政元年一月同座。三津五郎の山崎屋與四兵衛）
東山殿劇場段幕（同年三月同座。三十石書替へ）
敵討揃達者（同年七月同座。毛谷村の增補）

水鏡夜叉の千代菊物語



短夜仇散書

序幕

兩國橋袂の場
同大のしの場

登場人物

大工六三、實は小柴六三郎。福島屋娘、お園。同母、お梶。同召仕ひ、お勝。同番頭、太次兵衛。梶川長兵衛。金貸し、若林七郎助。遊び人、般若の彌五。同、山姥の權家主、茂九郎兵衛。日なし貸し、市兵衛。藝者、お豐。大のしのお常。大工、平助。同、猪之助。下部、八内。髪結ひ、源吉。おしおばアお松。船越十右衛門。

本舞臺、三間のあひだ、正面に揚弓場のうしろ、葭簀張りの見世物、芝居の横手。よき所に「八重霞」といふ行燈を掛けし水茶屋。長床几に仕出し大勢腰を掛け、おせん、茶屋女のこしらへよろしく、茶を運びゐる。上の方に髪結ひ床、茂九郎兵衛、家主のなりにて踏ごみを穿き、山姥の權、般若の彌五、いさみのこしらへにて風呂敷包みを抱へ、日なし貸し市兵衛、五十日かづら、古疵附きしこしらへ、かしくが赦免を迎ひに來りし體。源吉、髪結ひにて、若い者の髪を結つてゐる。すべて兩國橋詰めの景色。辻打ち、揚弓の音、さんげ〳〵の聲にて幕明く。

トいろ〳〵の仕出し大勢行き違ひ、捨ぜりふにて左右へ入る。此うち平助、大工のこしらへにて出て來り、床几に腰をかける。

せん　平助さん、今日も仕事かえ。

平助　オイ、大のしへ毎日造作にくるから、煙草休みにやァ廣小路をひやかすのだ。

せん　お茶上げうかえ。

平助　一杯いきたいの。

茂九　コレ〳〵、姐え、おれにもぬるくして一杯下さい。

せん　アイ〳〵。（ト茶を汲んで皆々へ出す）。

權　モシ、大屋さん、待つてゐるうちに、貧乏酒屋で鰌汁は氣なしかね。

茂九　イヤ、まんざらでもあるまいの。

彌五　併し其うちに又伯母御は來はせまいかの。

市兵　成る程、ひよつとおいらがゐない所へ、赦免者が來て、叱られるとわるい。わしも早く埒を明けて、月代を剃りたい。

權　氣遣ひさつしやるな、今日はどの道、埒は明くのよ。

平助　ハヽァ、ぬし達は、ぢしおばァを迎ひに來た、いさみ手合ひか。

權　誰れだ。貴樣は大工の平助ぢやァねえか。

彌五　どこへ仕事に來たのだ。

平助　鞠橋の大のしへ、仕事があつて來たのよ。コレ、そんなら何か、今日はおいらが友達の、六三が姉、ぢしのおばァが、おでいきちを出るのか。

權　さうさ。

平助　そいつは社合せだの。

ト此うち床の内の若い者、髪を結ひしまひ

源吉　ハイ、ようござりやす。（ト思ひ入れ）。

若者　これはお世話、髪結ひ錢はそこへ置きました。（ト下座へ入る）。

源吉　ハイ〳〵、ようお出でなされました。

彌五　コレ〳〵、髪結ひさん、赦免者はもうくる時分かえ。

源吉　アイ、もう今に參りやせう。……モシ、お前方は、あのぢしおばァが迎ひの衆かえ。してありやァ何の出入りだえ。

彌五　髪結ひさん、聞きねえ。何も御大層な出入りでもないのだが、こゝにゐる日なし貸しの市兵衛殿の頭をぶツこはした出入りさ。

權　根は伯母御もわるいのだ。借りた物を返さないで、催促した日なし貸しの頭をぶちこはすとは、とんだ話しだ。

茂九　今日は濟み口だから、相手方の市兵衛殿も連れて來たが、コレ、こなさんも腹は立つであらうが、其代りには、おばアも小三十日牢へ入つたを……此上何にも言はぬがいゝぞよ。

市兵　イヤモウ、これに懲りねえ事はござりませぬ。貸した物を取らうといつたばかりで、頭を一つ棒に振りました。イヤモウ、おッかない女でござるよ。

平助　アヽ、お前が相手方の市兵衛さんとやらいふお方か。とんだ目にあはしやつたのう。わしも今日はべらぼうに仕事が急がしいから、六三を呼びにやつたが、姉御が赦免なら、くればいゝが。

權　時に、大屋さん、間があらば一杯きめて來やせう。

茂九　イカサマ、やッつけおばアと洒落れよう。

源吉　沙汰があつたら、誰れぞ知らせにやりやせう、行つて來なさい。

茂九　そんなら賴みますよ。

平助　ドリヤ、わしらも仕事にかゝらうか。

權　サア、大屋さん、參りやせう。

ト辻打ちになり、皆々下座へ入る。源吉おせん殘り、捨ぜりふある。向うより梶川長兵衛、羽織着流し、大小、深き笠にて、五十日かつらの拵へ、八内、中間にて、すぐに舞臺へ來り、床凡にかゝる。

八内　コレ〳〵、お茶を上げて下さい。

せん　アイ〳〵。（ト茶を持ち行く）。

長兵　コリヤ、八内、福島屋の家内の者、未だ參らぬ樣子ぢやな。

八内　ヘイ〳〵、左樣に見えます。

ト此うち源吉、長兵衛の聲を聞き、合點の行かぬ思ひ入れ。

長兵　然らば先き程渡し置いた文箱、懷中致してをらうな。

八内　左樣でござりまする。しつかりと懷中仕つてをります。

ト懷より春慶塗りの狀箱を出す。

長兵　コリヤ〳〵、其方は横網町の浪人、若林七郎助方へ持參致し、口上にて申さうは、手前共こと、今日は用事ござつて大のし方へ參りをる事、しかと申してくれい。又内々の用向きは、手紙にて詳しく申し遣はすほどに、急いで參れ。コリヤ、金子を入れあるほどに、人ごみぢや、大切に致せ。

八内　畏りました。左樣ならあなたは、大のしにお出でゞござりませうね。

長兵　左樣々々。早う行て參れ。

八内　ドリヤ、一走り行て參りませう。

ト辻打ちになり、狀箱を持ち、スタと〳〵向うへ入る。あと揚弓の合ひ方。長兵衛煙草をのまんとして思ひ入れ。

長兵　コリヤ、娘、火入れの火が消えてあるぞよ。（ト差出す）。

せん　アイ〳〵、いけて上げませう。

ト煙草盆を取つて釜の下の火を入れる。長兵衛笠を取る。源吉、長兵衛の顔を見て

源吉　ヤヽ、あなたは、梶川長兵衛様ぢやござりせぬか。

長兵　左様申すは、小柴掃部殿に奉公致し罷りあつた

源吉　ヘイ、袖介めでござりまする。

長兵　まことに、左様々々。袖介、久しぶりで出合うたわえ。

源吉　あなた様にもお變りなき體、お喜び申し上げまする。

長兵　イヤ〳〵、近年は殊の外多病に罷りなり、見やる通りの長髪。それゆゑにお上へもお願ひ申し、御用向きは同役の衆中を相頼み、保養の間はお役所を退いで罷りをるが、氣の毒なは六三郎が先達ての越度。して、今以て尋ぬる品も

源吉　左様でござりまする。里見家の重寶、印子の鯉魚、お旦那小柴掃部様の預りなりしに、御寶藏に盜人忍び入りしにや、右の御寶紛失なし、申しわけなう、掃部様には御切腹。御子息六三郎様、詮議の爲に町家の交はり。私しめも何卒手がゝりも知れんかと、人立ち多き場所に入り込み、髪結ひ商賣。梶川様、御朋友のよしみ、手がゝりとてもお聞きなされましたならば

長兵　そりや手前と申し、如才とは存ぜぬ。ハテ、六三郎は格別、鯉魚はお家の御寶と申し、紛失させ

丁は身が立たぬ。イヤ、わけて聞がうは、お出入りの白銀町福島屋清左衛門こと、病死して後、

お屋敷奥女中のお園ことはお暇を申し請け、福島屋の跡目相續と承つたが、此程世間の噂を聞け

ば、お暇出でし六三郎とお園は、内々密通致し、殊に懐姙

源吉　エ。（ト思ひ入れ）。

長兵　イヤ、左様な噂もあるが、そちや存ぜぬか。

源吉　イヤモウ、一向承りませぬ事。六三郎ことは、殿様の御勘當より、乳母が娘、お松と申す者の世話に罷りなり、只今にては大工の世渡り。

長兵　ムウ。其お松と申すは、深川邊に罷りある、どしと申す女の事か。

源吉　左様でござりまする。女ながらも、一筋縄ではゆかぬ生れ附き。あなた様には、よく御存じでござりまするな。

長兵　イヤ、承つたやうにもあるて。（ト思ひ入れあり）イヤ、袖介、幸ひぢや。身が髭ばかりを剃つてくれぬか。

源吉　ハイ〳〵。ドリヤ、剃つて上げませうか。

ト長兵衛床几に腰かける。源吉後へ廻り、長兵衛の髭を剃る。おせんは盥へ釜の湯を汲み、持ち來る。

よろしく、出の唄になり、向うよりお梶、後家のこしらへ、日傘をさし、お園は屋敷奉公人宿下りの
こしらへ、振り袖にて、お勝はお屋敷の召仕ひのこしらへ、日傘をさしかけ、太次兵衛、通ひ番頭の
老けたるこしらへ、下女一人、供男一人、帛紗包みを持ち出て來り、花道にて

太次　モシ〳〵、お園樣、今日は天氣もようてお仕合せでござります。これからは大のしへお出でなさ
れて、あの河岸からお船に召すがようございます。殊に今夜は、花火が揚がると申す事でござり
まする。

かつ　それは〳〵マア、お園樣に附いて參つた私し共まで、よい仕合せでござりますわいな。

下女　モシ〳〵、お屋敷と違うてわたしらは、毎晩々々大屋根へ上つて、兩國の方を見て、イヨ、玉屋。
アレ、あの通りほめまするわいな。

下男　何をいはつしやる。

かぢ　これはしたり、阿呆らしい。道中でどうしたものぢや。コレ、お園殿、見やしやんせ。町家の下
女といふものは、はたしたないものぢやござんせぬかいな。

その　イエモウ、お屋敷ぢやと申しまして、部屋方では、それは〳〵氣さくな衆もござりますわいな。

太次　成る程、左樣な者もござりませうが、此やうな又わる騷々しいどぶつが、（ト言はうとして）ハヽ、
ハヽヽ。サア、大のしまで參りませうか。

ト唄の切れにて、皆々本舞臺へ來り、床几にかゝる。

せん　どなたもようお出でなされました。

トめい〳〵へ茶を運ぶ。源吉見て

源吉　ヤ、あなたはお園樣ぢやござりませぬか。

その　ヤ。（ト思ひ入れ）。

長兵　ナニ、お園とは（ト此時髭を剃りしまひ）

源吉　ハイ〳〵、よろしうござりまする。

長兵　大儀々々、世話であつた。

源吉　ヘイ〳〵、只今は商買でござりまする、いつ何時でも御用があらば、

長兵　又頼むぞよ。

源吉　畏りました。ハイ、あなた方、これにお出でなされませ。（ト お園思ひ入れ）ほんに、五十嵐へ行
つて、鬢附けが切れてゐた。此間にちよつと。（ト思ひ入れ）。ドリヤ、取つて來ようか。

ト唄になり、下座へ入る。

かぢ　これはしたり、あなた樣は梶川長兵衛樣ぢやござりませぬか。

長兵　さうお言やるは、福島屋の後家お梶殿か。よい折柄に逢ひました。お連れと申すは、（ト思入れあ

り）お屋敷へ御奉公に上りめされた、お園殿か。お宿下りと承つたが、エヽ、こりや今日は、船遊山と申すやうな事かな。存じをつたら、お連れ立ち申さうに。併し、よい折柄お目にかゝつた。ちと向島邊へ御同道仕らうかな。ハテサテ、よい折柄お目にかゝりました。

その　ハイ〳〵、これははや梶川様のお嬉しいお詞。あなた様には此間より御病氣との事。存じよりませぬ所でお目にかゝりました。私しも五日のお暇、明日はお屋敷へ参りますれば、最早今日ばかりの、ハイ、樂しみでございますわいな。

長兵　アヽ、最早明日はお屋敷へ上らつしやるかの。定めて二三日は、物見遊山を致されたであらうの。

太次　ハイ〳〵。イヤモウ、わづか五日のお宿下りでございますれば、家内は混雑仕つて、やう〳〵昨日、芝居も見物に参りました。

かつ　堺町も見物致しました。面白い事でございましたわいな。

長兵　芝居見物の折は、後家御も御同道でござらう。シテ、役者は誰れが最贔ぢやな。さぞかし御馳走をなされたでござらうの。

かぢ　左様でござりまする。何を申しまするにも、私しとは生さぬ仲、申さば義理あるお園殿。御存じの通り、近頃参つて程もなう、連合ひ清左衛門は死去。此子の爲には實の伯父、福島屋清兵衛は向島の寮へ引込んでの若隱居。

長兵　オヽ、あの福清といふのは、其御仁の事かな。

かぢ　左様でござりまする。承れば、連合ひ存生の間に、これなるお園殿を、あなた様へ嫁入らせます る對談に致しおきましたとの事ながら、只今にてはお暇を申し願ひましてなりとも、福島屋の家を立てまするは、此子ばかりでござりまする。

長兵　アヽ、コレ〳〵、お梶殿、福島屋の家は、お園殿の兄御がござると聞きましたが、なぜ又其兄御に家相續の儀を

かぢ　これはしたり、まだ御存じござりませぬか。此子の兄御は去年の冬、病死致しましたわいな。

長兵　成る程、たしか極月……ほんに、さうでござつた。併しながら、清左衛門殿存生のうち、契約致した緣組み、是非身共が申しうけて

その　左様ではござりませうが、何を申すも御奉公の只今の身の上。殊に、父さんの位牌所を立てさせにやならぬとの事。わたしや外へ嫁入りは

長兵　出來ぬとあらば、身共今より武士をやめ、小糠三合持たぬとも、お園殿なら聟入りを。

かぢ　アノ、お前様が。

長兵　町家へ聟入り仕るて。

その　ぢやと申して、武家方を、どうして私しが

長兵　武家では町家が立たぬとおいやるか。以前は武士のしくじりの、大工の六三を入り聟にか。

その　エ。（ト思ひ入れ）。

長兵　なんと違ひはあるまいがな。

ト此時向う揚げ幕にて

六三　エヽ、見つともない。離しやれな〳〵。

ト誂への流行り唄になり、向うより猪之助、職人のこしらへにて、六三の胸ぐらを取つたる手を、大工の六三キッとつかみ、右の肩へ道具箱をのせて出てくる。後より若林七郎助、僞醫者の金貸しにて、羽織大小、帷子にて、お豐、町藝者にて、箱持ち一人、長棹の三味線箱を肩にのせ出てくる。花道にてよろしくあつて

猪之　コレエヽ、六三、金を借りてやつた猪之助を、締めるのかえ〳〵。

六三　コレサ、猫之助。名立ちのおぬしを、なんで締めるの、どうするのと、そんな嫌味はいはぬものだ、併し晝中、人ごみで、野郎呼ばりしやるから

猪之　それでおぬしが

六三　マアそんなものよ。

とよ　申し、お前は大工町の六三さん、此頃はきついお見限り、ちつと遊びに來なさんせいな。

六三　ヤア、裏河岸のお豐坊か、今日はどこの雇ひだ。見さつし、斯う道具箱を擔いだところは、どうだ。箱持ちと見えるかえ。併し、氣の付かねえ箱持ちがあつたら、年中藝者に氣を揉ませるであらうおえねえ氣紛れだぞ。

七郎　左樣々々、其やうな箱持ちが、藝者に付いて歩かれては、客は一倍氣ばかり揉んで、氣を揉み死に死なねばならぬ。

とよ　エヽ、又、無駄ばつかり。

六三　お豐、客人は大のしかえ。

七郎　左樣。おぬしもちやつと付合つて行きやれな。

六三　そいつは有り難い。サア、めえりやせう。

ト右の唄の切れにて、本舞臺床几にかゝる。お園見て

その　ヤア、六三さん。

六三　お園殿か。

長兵　さう言やるは、（ト見て）たしかに小柴の

七郎　梶川殿かな。

長兵　貴公の方へ只今使ひを

七郎　エ、、さては印子の

長兵　ア、コレ……うか〳〵それを、ナ……御合點か。

七郎　（呑みこみ）成る程、これは不調法これなるお豐をめしつれまして、屋根船で向島と心がけ、柳橋へ參つたところ。こりや貴公にも船遊山と見えましたが、左樣か〳〵。

とよ　申し、梶川樣、よいお連れでござります。すぐにあなたもお出でなされませぬか。

長兵　イヤモウ、身共病中ぢやて。

七郎　ア、、まだ御全快ござらぬかな。

長兵　イヤモウ、御存じの通り、保養の間ぶら〳〵と出かけまして、今日は大のし方にて、一獻下さりませうと存じ付き、參つたところ、屋敷へ出入りの福島屋の家内、宿下りの娘を同道仕り、引き合ひましたを幸ひに

七郎　こゝもとにお出でなさるが、成る程、福島屋の後家御娘御のお園殿。まことに、花を飾りし其お姿、イヤ、あでやか〳〵。末々は梶川樣の御新造樣。ナ、、お羨ましい儀でござるて。

ト三れにて皆を思ひ入れ。

六三　成る程、お前樣の言ひなさる通り、お屋敷のお暇が出たら、早く御婚禮。今日こゝへでざつたもいはば見合ひも同前な。日柄もようて、おめでたうござります。

その　ア、、コレ〳〵。どうしてわたしが、なんで

長兵　ア、イヤ〳〵、お園殿、そりや只今あの職人が申す通り。アイヤ、職人ぢやと存じたら、貴樣は小柴掃部殿の子息

六三　ハイ、六三郎めでござりまする。以前の身分でござつたら、御朋友の梶川殿、只今にては武家と町人、殊には輕い職人の、お目にかゝるも何とやら。これと申すも、親共が預りおいたる印子の鯉魚、紛失なしたるお咎めにて、遂には切腹、家を立てるは御寶詮議し出して、小柴の家名、相續致す願ひにて、詮議のうちは町人ども。又此上にどのやうな、輕い身分になりまして、人の譏りをうけましても、寶詮議の其うちは、梶川樣、恥かしいとも存じませぬて。

長兵　成る程、こりや尤もな一言。さほど辛抱おしやらずば、失せたる鯉魚の在所も知れまい。……イヤ、それは格別、お梶殿、此手跡覺えてござらう。

ト合ひ方になり、紙入れより、福島屋清左衛門より長兵衛へ遣はしたる手紙を出し、お梶へ渡す。お梶よく見て

かぢ　こりやこれ、過ぎ行かれたる連合ひの手跡、お園をあなたへ差上げませうといふ手紙の文言。

その　すりや、とゝさんが存生に、言はゞ約束の其手紙。今は形見の此御手跡。

長兵　なんと違ひはござりますまい。僞りならぬ此手紙。（ト又繰返し）お園は身共が女房ぢやぞ。外の

男は間男ぢや。並べておいて、（ト思ひ入れ）相手の男は侍ひでも、今は身輕な町人でも、用捨致さぬ、眞二つ。六三郎殿、アイヤ、職人の六三とやら。なんと、左樣なものぢやないか。

ト當てゝいふ。

六三　成る程、左樣。お屋敷でも、町人でも、間男ならばこりや同罪。首の飛ぶのも合點で、どうで色戀ひする氣ぢやァ、命が惜しいの、死ぬ死なうとの約束も、色から起る無分別。血の氣の多い其時は、死んで見たいも、一盛り、男と生れたこれも名聞、年增もござれ、生娘、藝者、女郎とありやァ中三から、見世女に至るまで、二回目からは身上りだ。人の女房に圍ひ者、色にするのも男の腕。取られる男はうつそりめら、薄鈍いから起つた事。梶川樣、そんなものぢやァござりませぬか。

長兵　すりや、鈍いゆゑ、思ふ女を

六三　盜まれる馬の性は鼻毛さ。

長兵　アノ、武士たる身共を

六三　イヽエ、取られたか知らぬが、こりやァ話しさ。

長兵　アヽ、浮き世話しか。

六三　さやうさ。

長兵　イヤ、さうなけりや

六三　エ。

長兵　叶ふまいて。（ト屹度思ひ入れ）。

猪之　コレエヽ、六三、わりやァ姉のほしおばァが、喧嘩出入りで牢へ入つて、濟み方を付けるは、金がいると頼むゆゑ、親方を頼んで、向うの知れねえ作料を、五兩といふもの借りてやつたわ。それになぜなまけるのだ。なんでも今日は帳場へ連れて行く。サア、來やな。（ト引ッ立てる）。

六三　ハテ、今日は平助が方へ行かにやァならぬ。さう思つてくりやれ。

猪之　イヤ〳〵、なんでも今から連れて行く。エヽ、來やといふのに、

ト引ッ立て行くとて、六三が腕を捲り、お圍命と彫つてあるを見附け

ヤ、何だ。「お圍命」と六三が腕に。

ト言ふ。六三よろしく隱す。長兵衛、さてはト思ひ入れ。七郎助こなし。

七郎　コレ、六三。今これにて承れば、あの者が世話で、五兩の金子借用したも、入牢致したほしが濟み方に遣ふの事。身もあのほしには、あの者が、深川に勤め致して罷りある時分から、心あつて通つたに、つひに一度の……アイヤ、それは格別、牢舍致す所の方から、度々の無心。其請合ひは六三郎、てまへぢやぞよ、忘れはしまい。あのわけは、てまへが附けるのぢやぞよ。

六三　ハテ、お案じなされまするな。姉御を牢から出したいばかりに借りた金、殊に今日赦免があれば、姉御とも相談して、きつとお返し申しまするよ。必ずお氣遣ひなされまするな。

七郎　そりやさうありさうなものぢや。

ト辻打ちになり、平助、バタ〳〵と出て來り、六三を見て

平助　コレ〳〵、六三、てまへどうしたものだ。急な仕事だから早く呼びにやつたに、悠長らしい、サア、來やれな。（ト六三を引ッ張る）。

六三　ほんに、さう思ひましたが、ちよつと爰に用があつて

平助　ハテ、來て下さいな。

六三　參りやすよ。

猪之　エヽ、平助、退いてゐろ〳〵。コレ〳〵、六三、親方の帳場へ來やな。

平助　ハテ、今日は此方の仕事をさせるわ。

ト兩方より六三を引ッ張り、辻打ちになり、六三は道具箱を持ち、二人に引ッ張られ、捨ぜりふにて下座へ入る。引達へてお常、大のしの女房のこしらへにて、下座より出て來り

つね　これは福島屋の後家御樣、お屋敷のお園樣、今日はようお出でなされました。殊に今晩は、よい花火がござりまする。ゆるりとお涼みにお出でなされませ。

かぢ　これはお常さん、こゝまで迎ひに來て下さんしたかえ。お取込みであらうのに。そんなら又今日は、お世話になりませうわいなア。

つね　いつとても取込みまして、おかまひ申し上げませぬ。お園樣、お宿下りも、せめて十日づゝもあればようござります。ホヽヽヽヽヽ。梶川樣、若林樣も、御一しよがよろしうござりませう。

とよ　アイ、皆今日は船へ行きなさんしたわいな。

かつ　なんとお園樣、大のしへお出でなされませいな。

太次　御酒はならぬが、肴あらしと出ませうかえ。ハヽヽヽヽヽ。

つね　お前樣、お齒は丈夫でござりますかえ。

太次　イヤモウ、齒も達者、目も達者でござるて。

長兵　然らば若林氏も同道致し、何かの話しは大のしにて

七郎　左樣ならば、梶川樣

長兵　お園殿、身共と一しよに。（ト手を取らうとする）。

その　イエ、私しは、（ト振切るを無理に引留るとて、腹帶を探り見て）

長兵　たしかに腹帶

かぢ　エ。（ト立ち廻つて、お園を圍ひ、思ひ入れ）。

長兵　後家御

かぢ　梶川樣、お連れ立ち申しませう。

つれ　サア、お出でなされませ。

ト唄になり、皆々思ひ入れあつて、下座へ入る。すぐに辻打ちになり、下座より權、彌五、茂九郎兵衛、市兵衛、捨ぜりにて出て出て來り

茂九　コレ〳〵、若い衆、もうお拂ひ者は來さうなものぢやぞよ。

權　さうさ、もうくる時分でごんす。

市兵　大方八ッでなくば、お拂ひはあるまいて。

茂九　マア〳〵、こゝで、待合せるがよい〳〵。

ト時の太鼓になり、向うより中間二人、六尺棒を擔ぎ、先きに立ち、次にトしのお松、惡婆のこしらへ白齒、眉毛はへし年增女の體にて、繩にかゝり、人足、繩をひかへ、あとより羽織股引きの役人、供二人附いて出て、舞臺よき所へ引据ゑ

中間　下にゐる。

役人　深川町まつが家主、參りをるか。

茂丸　へイ〳〵、茂九郎兵衛、相手方市兵衛、召連れましてござりまする。

役人　相手方市兵衛。深川町まつ。それへ出ませい。

皆々　ハイ〳〵〳〵。（ト皆々蹲る）。

役人　コリヤヤイ、其方共こと、相對の借用錢延引に及びしを論じ合ひ、口論致し、女にあるまじき市兵衛を打擲致し、疵附けの段、重々不屆き至極に附き、入牢申し附けたるところ、市兵衛の手疵平癒の上、扱ひの趣き、連れ立つての願ひに附き、お聞濟みあつて、松が不屆き御赦免あつて、れ所をお構ひなさるゝ。有り難くお請け申せ。

まつ　アヽ、有り難うござりやす。

役人　相手方市兵衛。それへ出ませい。

市兵　へイ〳〵。（ト蹲る）。

役人　其方疵人と申せども、松と口論の相手になり。町役人へ預けおけど、双方とも異議なく相濟む上は、其方も只今よりお免しなさるゝぞ。こりや、家主、左樣心得てよからう。

茂市　エヽ、有り難うござりまする。

役人　家來ども、松が縛めを解け。

中間　ハッ。

ト お松の縄を解き、突き放す。お松、まぢ〳〵してゐる。下座より仕出し大勢出かゝり、噂をしてゐる。

役人　身共もこれより盗人の詮議。此程、浅草今戸橋にて、掛屋の手代嘉七、金子五十兩持參致し、夜分通りかゝりしところ、侍ひ體の者一兩人、口論致しかけ。懐中の金子奪ひ取り、其場を逐電。尤も金子に一兩々々、三つ星の極印あるよし。慥かの訴へ、三つ星の極印ある金子遣ふ者は、即ち其夜の盗人。其方共も左樣心得、手がゝりあらば訴へ參れ。きつと申し渡したぞ。

皆々　畏りました。

役人　然らば此旨、外々を吟味致さん。家來、參れ。

皆々　ハッ。

ト 辻打ちになり、中間供の者に市兵衛も跡に附き、向うへ入る。四人殘って

茂九　ヤレ〳〵、お松殿、暑い時分にとんだ目にあつたのう。

權彌　姉御、おめでたうござりやす。

まつ　オイ、てめえ達はよく來てくれたの。

權　モシ、浴衣を持つて來やした。早く着替へさつしやいな。

まつ　そいつは氣がきいてゐた。何も不自由はねえが、此モウ汗臭いにはあやまる。

ト 帶を解いて、權が持つて來た包みの中より、白縮緬の下帶と、浴衣を出して着かへる。此うち、揚弓場の音、矢張り仕出し段々に殖えて、兩方に立つて見てゐる。

コレ聞いてくりや。女の牢入りはおればかりかと思へば、御大層にあるものよ。したが、強勢多いの。イヤモウ、地獄にも佛だ。青茶婆アだの、金時のお留だのと、まだ〳〵上があるものだ。あの手合ひがほんの惡黨さ。

三人　首は細つてゐるか。

まつ　毛筋ほどかゝつてゐるよ。

ト 此せりふのうちに着物を着かへる。仕出し騒ぐを見附け

なんだ、こいつらは。面白さうに、見やアがる事はねえ。高が女の牢入りだ。面白いものぢやねえわ。おれが面を祭りが渡るか。まじ〳〵と、暇の出た居候ふが川留めにあつたやうに、何をぎよろつきやアがる。おれに氣があるのか。色になつてやろう。サア、抱いて寢てやる。間抜けめら、爰へ來やアがれ。

ト つか〳〵と行く。仕出し皆々兩方へ逃げて入る。此時辻打ちになり、源吉油を買つて戻りくる。

三人　姉御、もう、ようごんす〳〵。

まつ　牢から來た御祝儀に、二三人も引つとらまへて、ぶッ挫いてやらうもの。惜しい事をした。

源吉　ヤア、姉御、おめでたうござりやす。

まつ　源吉さん、見ねえな。今度はもう法螺の目だと思つたら、又歸りなすつたよ。

源吉　ナニお前、歸らねえでわな。

まつ　エヽ、世辭をいふ者だの。コレ、剃刀を貸しな。

源吉　アイ〳〵、なんにするのだ。（ト出して渡す）。

まつ　なんといつて、眉毛を見ねえな。どうか又地獄にでも出るやうだわな。髪をとかねえと、一倍うつたらしいよ。（ト剃刀を手合せして）内へ歸ると、すぐに鐵漿だ。ほんに、昔し大阪でお仕置になつたらしは、きうせん筋があつたといふが、わつちにもきうせん筋があるよ。

三人　そいつはきざだよ。

源吉　コレ、姉御、床へ行つて髪をとかしねえ。

まつ　さうして行かうよ。「髪もおどろにとき亂れ鐵漿も附けねば白齒となる」。

ト義太夫を一口語りながら、眉毛を剃る。

三人　イヤ、義太夫はよつほどうまいものだ。

茂九　時に、お松殿や、なんと一しよに歸らねえか。

まつ　併しわつちは身臭いから、錢湯へ入つて行かう。大屋さんも、若い者も、先きに行かつし。

權　さうしやせう。此單衣物は持つて行くかえ。

まつ　エヽ、きざな。其襤褸は、大川へさらひ込んで行きやな。

彌五　呑み込みやした。

源吉　ほんに、湯といへば、おれも柳湯へ入つて來ようか。

茂九　そんなら歸るによ。

まつ　さうしな。大屋さん、今日は御苦勞よ。

茂九　お茶でも上がれか。

彌五　エヽ、古いやつさ。

ト辻打ちになり、四人連立つて向うへ入る。お松殘る。揚弓の音。

まつ　アヽコレ、久しぶりで娑婆へ出は出たが、あの船越十右衛門さんを、附けつ廻しつ口說いたが、解つた返事をしてくれねえ。あんまり初心な、（ト思ひ入れ）さういつても、コレ、何ぞ小錢のまはる話しがありさうなものだな。

ト此うち長兵衛、うしろへ出かゝりゐて

長兵　よい仕事をいひ附けてやらう。（ト合ひ方）。

まつ　ヤヽ、お前は梶川さん。

長兵　はし、そちや牢舎と聞いたが、無事の赦免で先づはめでたい。それに附き、身が心をかけ罷りある奥勤めのあのお園、お暇の出た六三めと乳繰り合つて、慥かに懐姙。ことさら六三は、今の身分では其方が弟と申すが、左様か。

まつ　アイ。成る程。わつちが死んだお袋は、六三殿の乳母でござります。いはゞわつちは乳兄弟。お屋敷をしくじつて、行き所が無いかして、今ぢやアわつちを便つての居候ふ。世間の手前があるゆゑに、弟にはしておくものゝ、食ひ潰しにしておいては、今日が行かねえわな。

長兵　尤もぢや。左様思はゞ、よい金儲けがあるが、かゝつて見る氣か。

まつ　アイ、そりやアどんな話しだえ。

長兵　其話しといふは。（ト囁く。お松呑み込む）。

まつ　エヽ、そんなら福島屋のお園を、お前さんが

長兵　コリヤ、靜かにいやれ。

まつ　モシ、其位ゐな事は、ほんの口元さ。聞けば里見の屋敷に、印子の鯉魚といふ寶があるげな。それをお前が引揚げて。

長兵　（思ひ入れあつて）コリヤ、他聞のきこえ。……コレ、まんざらの事でもないが、何を申すも其品は、七郎助と申すを頼み

まつ　エヽ、七郎助とは表向き、俗醫が立たねば金貸しのあの浪人。あの人の手へ渡つちやア、滅多に知れる氣遣ひはないが、そりやア格別、お園がことは、わつちが請け込んだ。骨にならぬやう、金のくるまで、これといふ品でも、わつちに預けておきな。

長兵　こりや尤も、コレ、預ける品は、（ト懐中より、赤地に雛鶴織りたる錦の帛紗を出し、裏を返すと、白地にて、文字書きある）。町家の女に申したとても、解らぬ價値とは思へども、とくと聞きやれ。（ト帛紗の裏を返し）「多年數度の軍功として、鯉魚の置き物遣はすべく候ふ間、今より里見家の重寶とすべきものなり。月日。里見義氏へ、源義詮判」。即ち赤地の古金襴、模樣は雛鶴。これは印子の置き物たる、鯉魚を包むの此帛紗。此品其方に遣はしておかう。

まつ　（取つて）すりや、アノ、これが、印子の置き物たる、鯉魚を包む帛紗といひなさるかえ。

長兵　他家にあつては益なけれど、里見の屋敷へ持ち行けば、鯉魚を詮議の手蔓の帛紗。滅多に出されぬ品ゆゑに

まつ　はしが屹度預りやした。（ト懐中する）。

長兵　殊にお園は正しく懐姙。屋敷へ行くとも、懐姙では

まつ　どうで始終は駈落ちの、六三と逃げぬ其うちに、あなたの手へ

長兵　入れる前方、はらめる餓鬼を、コリヤ。（と囁く）。

まつ　おろし薬を用ふる工面は

長兵　便りはあとから。

まつ　梶川様

長兵　ほし

まつ　お待ち申しやす。

ト唄になり、向うへ走り入る。長兵衛残る。後より七郎助出て

七郎　梶川殿、先達てより預けめされた、印子の鯉魚。二百兩用立ちおけど、此度厳しき屋敷の詮議、金主方にも氣遣ひに存じ賣り渡さんと申せども、賣り拂うてはお互ひに。言ひくるめても中々以て

長兵　サア、左樣存じて家來に持たせ、手紙に添へて五十兩。あの金にて當分を

七郎　エヽ、すりや、先達て五十兩

長兵　遣はしたれど、今に家來が。ハテ、不調法な。

ト向うへ心遣ひ。辻打ちになり。八内、文箱を持ち、スタ〳〵と出て來り、鮮蓙を見て

八内　これはしたり、七郎助樣、お旦那もこれにお出でなされましたか、あなたのお宅へ參りしところ

長兵　コリヤ、口數いはずと、其文箱、急いであなたへ。

八内　ネイ。（ト七郎助へ渡す）。

七郎　すりや、此内に貴公の御狀。殊には添へて五十兩。（ト封を切らうとする）。

長兵　ア、コレ、人目ござれば

七郎　大のし方にて

長兵　とくと對談。

七郎　然らば御狀は

長兵　其節しかと

七郎　拜見致さう。

八内　ア、モシ、お旦那、誰れか

兩人　エヽ。

ト七郎助は文箱を懷中する。八内思ひ入れあつて

八内　アヽ、犬めぢやさうな。

長兵　たはけ面め。

ト思ひ入れ。三人此見得にて、辻打ちになり、道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う塗り骨障子、大のし座敷の體。上の方に九尺の障子屋體。「大のし」といふ行燈かけある。下の方、黒塀の板めくれ、新規の板打ち附けある道具立て。ここに六三、道具箱を引寄せ、書

板削りしてゐる。平助猪之助も板などを削りゐる見得。踊りの鳴り物にて道具とする。

猪之　今日はべら棒に暑いぢやァねえか。

平助　ソレ〳〵、名代の盆のうしろ前だ。

六三　此位ゐな事はあらうよ。

ト三人仕事してゐる。矢張り右の鳴り物にて、奥よりお常、茶を汲んでくる。

つれ　サア〳〵、煮花が出來たほどに、ちつと休んでから始めなさんせいな。

平助　そいつは有り難い。猪之助、茶にさつし。

猪之　なんだかべら棒に暑いぞ。

平助　此男は暑いにまで、べら棒〳〵と、べら棒にべら棒仕込んだべら棒だ。

つれ　何をマア、阿呆らしい。（ト奥へ入る）。

平助　サア、六、茶を飲まつし。

六三　オイ〳〵。マア、こいつを仕上げてしまはう。

ト矢張り板削りしてゐる。二人は茶を飲んで、捨ぜりふ。此うち矢張りかすめたる踊りの鳴り物。奥よりお豐、銚子盃を持ち、お勝、丼を持ち、出て來り

とよ　六三さん、氣が盡きやうに、一つ飲んでからおかゝりな。

かつ　酢の物はお嫌ひかは知らぬが、持つて參りました。今にお吸ひ物をあげませうわいな。

とよ　サア、わたしが酌ぢやわいな、飲みなさんせ。

かつ　イヽエ、わたしがお酌しようわいな。（ト兩方爭ふ）。

六三　コレ〳〵、待ちなさい〳〵。今日は急がしいに、晝から助けに來た六三、酒を飲んでゐては仕事が出來ねえ。馳走なら晩の事に、しなさい〳〵。

かつ　さうではあらうが、お園さんのお差圖でござりますわいな。

とよ　仕事は捨てゝおいてようござんすわいな。

平助　イヤ、とんだ事をいふ手合ひだ。

かつ　左樣ならお前、只今は上りませぬかえ。

六三　晩まで預けやせう。

きよ　そんなら氣任せにしなさんせいな。（ト持つて行かうとする）。

平助　アヽコレ、六坊が飲まずば、わしが飲みませう。

猪之　姉さん、おいて行きねえ〳〵。

かつ　イエ〳〵、お前方に上げるのぢやござんせぬ。

とよ　ハテ、來なさんせいなァ。（ト道具を持つて奥へ入る）。

猪之　エヽ、あの女めらは、しはい奴等だ。

ト振返り見てゐる。奥よりお常出て來り

つれ　モシ〳〵、あの座敷の上に、雨のまはる所がございます。併しありや屋根へ上らずば見えまい。お前方、ちよつと來て下さんせ。

平助　此暑いのに屋根へ上るのか。

猪之　エヽ、酒も飲ませないで、アレ、あの六三を頼みなさい。

つれ　これはしたり。此暑いのに、霍亂してはわるうございます。お前來て下さんせ。

平助　コレ〳〵、あの六三は、霍亂してはわるいが、おいらはしても大事ないか。

つれ　サアさうではなけれど、お前方に出來さうな仕事ぢやによつて、マア〳〵、來て下さんせいな。

平助　エヽ、おいらは否だよ。

つれ　ハテ、來なさんせいな。

ト捨ぜりふにて、お常は二人を引ッ張つて連れて入る。あと合ひ方。六三殘り

六三　エヽ、なんのこつた。こゝの内の下つ歯も、餘ッ程な代物だ。

ト誘への彈き流しの唄になり、奥よりお園出て來り、思ひ入れあつて

その　コレ、勝はるやらぬか。どこへマア行きやつたやら。（ト思ひ入れあつて）六三さん、逢ひたかつた

わいなア。

ト駈け寄る。六三は此方へ飛び退き

六三　オット、こゝへお出でなさるな。大事のお嬢様が埃だらけになりやす。其方へ退いてお出でなされませ。

その　コレイナア、六三さん、そりやお前聞えませぬ。定めしお前の腹立ちは、先刻にも聞きなさんした、あの梶川と、過ぎ行かれた父さんが、わたしにも知らさいで、武家方へ嫁入らすといふ、約束はあるではあらうけれど、わたしや、ふつ〳〵嫁入りする心はござんせぬわいなア。

六三　モシ〳〵、嫁入りなさらうが、なさるまいが、それを職人の私しが何を存じませう。お前様は、梶川様の奥様さ。

ト ばた〳〵と何なりと仕事してゐる。

その　何のマア、どのやうな事があつても、わたしや梶川へ嫁入りする心はござんせぬ。その行かれぬといふわけはな。

ト六三が側へさしよる。此時奥より

太次　お園様〳〵。

ト驚するゆゑ、二人は飛び退き、六三は仕事してゐる。お園は裾帯をあちこちしてゐる。太次兵衛出て

太次　お園樣〳〵。……オヽ、こゝにお出でなされたか。只今子供の踊りが始まります。ちやつとお出でなされまし。（ト手を取る）。

その　アヽコレ、わたしやちつとこゝに、

太次　エヽ、大工殿に何の御用がござりまして。

その　サア、大工さんに

六三　何が用がありやしたねえ。

その　サア、其用といふはな。

六三　其用は、土藏を建てる話しだつけね。

その　慥か其やうな

太次　アヽ、お園樣は土藏の普請なぞは詳しいかな。ハヽヽヽヽ。

その　何をマア、阿呆らしい。わたしや大工さんに用のあるといふは、これ〳〵、これぢやわいな。

ト鉋屑を取つて見せる。

太次　そりやア、鉋屑でござります。それが何になりますな。

その　わたしやこれでな、アノ、何ぢややら。

太次　それが何になりまするな。

その　アノこれが。……オヽ、それ〳〵、わたしや鶴を折つて見ようと、それをぬしに習うて。

太次　これはしたり、鉋屑で鶴がどう折れませう。サア、後家御樣がお呼びなされます。ちよつとお出でなされませ。

その　でも、わたしやちつと

太次　ハテ、お出でなされませ。

ト矢張り踊りの鳴り物にて、無理に連れて奥へ入る。六三殘り

六三　エヽ、あの親仁め、氣のきかぬ奴ではないか。それにしても、宿下りも、もう明日ぎりだと聞いたが、アヽコレ、どうぞ

ト鐵鎚を持つて叩き立てゝゐる。お園、ソツと差し足にて奥の方より心遣ひあつて出て來り、六三が側へ寄る。奥より平助、醉うたるこなしにて出て

平助　エヽ、剛的に削りがとつたわえ。コレ、六坊々々、内の下つ齒が、一銚子、内所で氣を附けさせたから、餘ッ程おつりきな氣持ちになつたが、コレ〳〵、あの天井の雨の漏る所を、マア來て見て下ッし。あいつはどういふ鹽梅式か、一ぇんと氣が知れねぇ。サア、ちよつと來て下ッし。

ト六三を引ッ張り、連れて行かうとする。

六三　待たッし。こゝを方附けてから見てやらう。

平助　ハテ、ちよつと見て下さいよ。

ト引ッ張る。お園心遣ひしてゐる。此うち踊りの鳴り物。三人捨ぜりふ。奥より太夫兵衛出て來り

太夫　モシ〳〵、お園樣、今踊りの面白い最中でござります。ちやつとお出でなされませ。

そのハテ、今いふ通り、ちつとわたしや

太夫　ハテ、お出でなされませ。

平助　コレ、六坊、來て下さいな。

まつ　今行くわな。

平助　ハテ、來て下さい。

ト兩方より六三とお園を、無理に手を取つて引ッ張る。六三お園振切つて拔ける。平助太夫兵衛うろたへて、さしよるとて互ひに鉢合せして

平太　アイタ、、、、、。

ト顔をかゝへ、捨ぜりふにて兩方より手を引き合ふ。

太夫　マア、お出でなされま　。

平助　ハテ、來てもらはうよ。

ト引ッ張り合ふ。二人とも捨ぜりふにて奥へ入る。あと見送り、兩人思ひ入れ。奥より

かぢ　お園殿〳〵。

ト幕。

オ、、娘、こゝにゐるやつたか。そこにござるは、六三さんぢやござりませぬか。

ト これにて六三思ひ入れ

只今では、町家にお住ひなさるゝ樣子。それと申すも、親御樣には御切腹。元の起りは印子の鯉魚。武將の御判の据りし帛紗。其品ともに紛失ゆゑ、それを詮議の其姿。殊には同じお屋敷の、奥を勤めるお園殿、もしやわけが、（ト思ひ入れ）誰れしも若い時には、まゝある習ひ。殊に今では御勘當、何かに附けて御不自由、御用もあらば必ずともに、私しへ心置きなう。アヽ、世は樣々な、（ト思ひ入れ）。ハテ、御苦勞なされますなア。

ト お園を上の方へ連れて來り、六三に向ひ、ちよつと思ひ入れ、六三は下の方にて、一腰を道具箱より出し、ちよつと思ひ入れ。踊りの合ひ方聞える。七郎助と猪之助出て來り

七郎　ヤア六三、こゝにをつたか。コレ、先刻にも言うた通り、姉のもとへ度々の貢ぎ。用立つたも、魚心あれども、無いのはもとし。サア、姉が受合ひ。弟の六三、今こゝへ返してもらはうわい。

六三　モシ〳〵、七郎助樣。そんなら何と言はつしやる。姉のもとに騙されて、貸しかけた十五兩、催

短夜仇散書

促なさるが氣の毒と、わしが口出したのを幸ひに、こりや、あなた樣、わしが方から

七郎　勘定してもらはにやならぬぞ。

六三　そりやア、お前樣、今更御無理を

七郎　コリャ〳〵、何が無理ぢや〳〵。

六三　サア、無理ではござりませぬか。御存じの通り、よう〳〵牢から今しがた、出ると早々人樣の、介抱者と思ふから、古着の浴衣を引ッ張らせるは、弟の

七郎　コレ、其働きが出來る位ゐなら、なぜおれを賴んで、前金五兩、時借りをして寄越さねえよ。

六三　サア、そりやア姉御の科を、輕くしようと思つたから。

猪之　姉の事は思つて、友達の猪之助が方は、不義理にしても大事ないかえ。

六三　アヽコレ、どうしてこなたを

猪之　義理がわるいと思ふならば、おれが口入れの金を返してもらはうわえ。

ト お園これを聞いて、いろ〳〵思ひ入れ。

六三　コレサ、外聞のわるい。こゝはどこだ。仕事に來てゐる普請場だよ。おれもまんざら宿無しでもねえ。内へ取りに來やれな。

猪之　イヽヤ、内へ行つてもいつでも留守だわ。そこでこゝへ仕懸けたわ。

七郎　身共も、逢ふ時は笠脱がせるのぢや。六三殿、イヤ、六三郎、サア、其金を今こゝへ。

六三　イエ、只今はござりませぬよ。

七郎　無うては濟まぬ。寄越せ。

六三　そりや無理でござります。

七郎　何が無理ぢや。金借りた上、何が無理ぢや。

猪之　おれも世話した五兩の金を、サア、今寄越せ。モシ、あなた、お聞きなされませ。こんな太い奴が、此頃噂のある、三つ星の極印の金を、盗んだかも知れませぬて。

七郎　イカサマ、三つ星の極印の金、盗みかねない奴だわえ。

ト六三無念の思ひ入れ。此時、長兵衛出かゝりぬて

長兵　成る程、人の金を借用して、斯樣なる場所に於て、催促にあふは、さぞかし辛いものであらう。それを又側に見てゐる其女も。……アイヤ、あの者といひかはしてゐる者なぞは、さぞかし面目なくも思ふであらうが、どうで又其やうな無分別な者は、どうして末が續くものか。お園殿、どうで一度は男を持つ身、其やうな無分別な者にはかゝはらぬがよい。こりや六三殿の儀ではござらんが、こりやお園殿へ身がよい教訓を申し聞けるのでござる。ハテサテ、六三殿は、浪人すれば心までが、ア、氣の毒千萬でござる。

トよき所へ座る。

六三　梶川様の其お詞は、此六三めが、どのやうな盗み聞りもしたやうな、味に塊んだねまり事。こな
さん、お聞さんの事から起つて、

ト腕巻りして立ちかゝる。

その　アヽコレ、六三さん、其事とはそれはマア、何を仰しやりまするぞいな。わたしやもう明日は、
お屋敷へ上りまする身分でござりまするぞえ。必ずともに、滅多な事を仰しやりまして、かへつ
てお前様の、ナ、もし御勘當の妨げとも、なるまいものでもござりませぬ。ほんに〳〵、うか〳〵と
物を仰しやりませぬがようござりますわいな。

ト思ひ入れにていふ。六三こなしあつて

六三　それぢやというて、あんまりな

ト腕巻りして立ちかゝる。此時七郎助、腕の彫り物を見て

七郎　ヤ、「お聞命」。（ト読む）。

六三　エ。（ト驚すこと。長兵衛思ひ入れ）。

七郎　アヽ、こりやおつりきな彫り物が、六三が腕に筆太に

長兵　「お聞命」はちつと氣障だな。

七郎　氣障とござらば、梶川様、彫つてあるのをよく改め、いよ〳〵貴公の思惑の

長兵　成る程、貴公よろしく。

七郎　呑み込みました。……ドレ、腕をま一度。（トかゝる）。

六三　エヽ、何をさつしやる。

ト立ち廻りあつて、七郎助思はずこける。

七郎　ヤアヽ、わりやアおれを投げたのか。

六三　どうしてお前を

七郎　イヤ、投げた、手向ひした。

猪之　手向ひしたら、此野郎は

トかゝる。六三とつて投げる。

七郎　ヤ、うぬは手向ひか。おのれは身共が

ト懐中してある以前の紙箱を出し、思はず「斯うして〳〵」と散々に打つ。六三此手をきつと取つて

六三　こりや、七郎助殿、いかに借用あればとて、こなたはわしが生面を

七郎　オヽ、打つたがどうした。叩いても大事ない。おのれがやうな野太い奴は、此上女の惚れぬやう

面に極印

ト打つてかゝる。六三これを留めるとて、兩人狀箱を爭ひ、思はず投げる。此時、上の屋體の障子の骨、紙ともに打ち拔けし思ひ入れにて、バツタリ音して、よき程に仕掛けにて飛ぶ。七郎助思ひ入れあつて、尋れるこなし。

ヤ、六三を打つた狀箱は、どうした〳〵。

猪之　たしか障子のあの中へ

七郎　取つて來やれ。

猪之　心得ました。

ト猪之助走り行き、上の障子の中へ駈け込む。內より見事に投げ出す。

七郎　こりやどうだ。障子の內より、バツサリ、ドツサリ

長兵　お手前ござれ。

七郎　心得ました。

ト駈け行き、障子蹴はなす。內に船越十右衞門、着流し、派手なる衣裳、一本差しにて、目尻に少し疵の附いたる體。文箱を明け、手紙を廣げ、五十兩の金改めゐる見得。七郎助見て

七郎　ヤ、障子の內には見馴れぬ男

六三　あなたは船越

かち　折よくこゝに

七郎　そのまゝ狀を。

ト寄るを、ヂロリと見やる。七郎助氣味のわるき思ひ入れ。

十右　お前が御所持の文箱なら、ドレそこへ出て、渡しませう。

ト合ひ方になり、一腰提げて出てくる。七郎助思ひ入れ。

梶川樣とは、あなたの事でござりまするか。

長兵　成る程、身共は梶川長兵衞と申す者。町人、シテ、お手前は

十右　ハイ、私しは船越十右衞門と申しまする、深川邊の積み問屋、聞き及んだる梶川樣

長兵　すりや、其方が船越の

十右　十右衞門とは、私しが事でござりまする。旦那樣、こりやよい折柄に、お互ひに知る人に

兩人　なりましたわい。

長兵　コレ〳〵、其見てござる狀をば

ト手を掛ける。屹度思ひ入れあつて

十右　イヤ、此狀ばかりではござりませぬ。狀箱の內には金、しかも其かさ

長兵　五十兩。

十右　（貰へる事あつて）よく御存じ。成る程、數も五十兩、手紙の中の文言に、印子の置き物人知れず二百兩に預けおく、今賣られては、各々の難儀になる事あれば、暫く其品外へ渡さぬやうにとの、頼みの文言。少しなれども五十兩、内金に渡すと書いたる手紙。

ト長兵衛ギョッと思ひ入れ。六三、さてはト思ひ入れあり。

六三　其品とくとは書かねども、印子の置き物預けおく、其文言の狀といひ

その　割り符の合うたる上からは、もしやお前の葦ねてるさんす

かぢ　親御の切腹なされたも、鯉魚を失ふ其越度。

六三　疑ひもなき

ト寄るを、長兵衛立廻つて、十右衛門が持つたる手紙へかゝるを、留めて

十右　こりや梶川樣、此船越が持つたる手紙、斷はりなしに、こりや何で

長兵　サア、證議の手蔓にも

十右　イヤ、手蔓にならぬは此狀。

六三　そりや又、なぜな。

十右　文言怪しき事あれど、宛て名なければそれぞと申し、コレ。……こりや手がゝりにはなるまいで。

長兵　成る程。手紙に先きの宛て名が、（ト七郎助と顔見合せ、思ひ入れあつて）併し、無ければ、それにて安堵。

七郎　でも入れ置きし五十兩、みす〳〵外へ渡つては

十右　サア、金に覺えがござるか。

七郎　いかにも、金は身が方へ

十右　金はあなたの御承知なら、見らるゝ通り船越が、目尻に思はぬ此極印。男の面へ少しでも、疵が附いては其分に

長兵　こりや尤もな十右衛門。目尻の疵の養生は、卽ち其五十兩。男の面體、疵養生、五十兩なら濟ました上、證文がはりに此手紙

十右　返してくれろと仰しやるのか。

長兵　いかにも。

十右　成る程、男の生面へ、疵が附いては十右衛門が、立たぬ所へ大枚の、扱ひ金の五十兩、これで濟ませと押し附けて、此船越を盜人に、仕立てる爲の工面とは、睨んだ眼は違ふまい。梶川樣、それに違ひはござるまい。

長兵　默れ、船越十右衛門、僅かな疵でも男の面體、極印附いたと思ふから、二言といはず五十兩

十右　渡した金は一兩々々、皆三つ星の極印が

長兵　ヤ、そんならそれを

十右　遣つてよくば梶川殿、こなたの方で存分に。

　　ト打ち附ける。目當ては違はず、長兵衛が目尻へ疵附ける。

七郎　ヤ、目尻へ疵が……うぬを。

　　トかゝるを、取つて投げ、煙草盆にて七郎助をしたゝかに打つ。長兵衛かゝるを、きつとなつて

十右　目尻の疵はこれで五分々々、六三を手籠めの二人の奴等。此船越が挨拶ながら、極印怪しき三つ

　　星の、卽ち金は元々へ。（ト差出す。長兵衛取つて懷中する）。

長兵　ア、流石は船越

十右　ヤ。

長兵　驚き入つた。

十右　其代りにはこなさんへ、福島屋の旦那殿、これなるお園の親御の手跡、嫁入らせうと自筆の手紙

　　を、素直に梶川樣、わしに下さい。船越が不肖ながら、貰ひたうござります。

長兵　すりや、最前の此手紙。アノ、船越が

十右　貰ひたうござりまする。

長兵　品によつたら、やりもしようが、此方も無心は、文箱の狀。それを渡さば、替へぐに

十右　すりや、此印子の文言の、手蔓にならうといふ此狀

長兵　いかにも、それが

六三　アゝコレ、それを渡さば肝心の、詮議の綱を失ふ道理、そればつかりは

十右　ハテ、有つたというて宛て名が無ければ、證據にもならぬ手紙。文言はわしも、こなたも、とつ

　　くりと腹に浸み込めば、あへて手紙が無いとても、空で覺えた胸と胸。親御の手紙と、替へぐ

　　なら。

六三　何分よろしく、こなたの計らひ。

十右　わしに任せて、ナ。……サア、梶川樣、手紙と手紙を

　　ト差出す。長兵衛も所持の手紙を差出し、兩人取替へて

長兵　これが返れば、身共も安堵。

十右　此方も安堵させる娘子。後々兎やかう無いやうに、こりやお園さん、お前の方へ。

　　ト投げてやる。お園取つて

その　嬉しうござんす。

六三　そんならそれで、兩方ともに

十右　安堵でごんせう。

ト目を附けて思ひ入れ。奥よりお勝、文箱を持つて、走り出て來り

かつ　只今急にお屋敷より、參りしお文と、お内から

ト差出す。お梶手早く取つて開き見て

かち　こりやこれ、明朝間違ひなう、園を未明にお屋敷へ上げよと、お使ひを下されし、お年寄樣から

の此お文。

そのすりや、アノ、わたしを

かち　明朝は未明に

十右　屋敷の迎ひ

六三　今日別れては又いつか

その　殊に此身も

六三　只ならぬ

長兵　さてこそ妊娠

七郎　今の返報。

トかゝる。十右衛門引附ける。猪之助は六三へかゝるを、キツと押へる。長兵衛立ちかゝるを、十右

衛門留める。立ち寄るお園を、お梶隔てる仕組み。

長兵　船越、何かを

十右　梶川樣

長兵　ムウ。

ト寄るを、キツと留める。

十右　其うちお目にかゝりませう。

トよろしく、ひやうし

二幕目

慕

しもし内の場

中木場の場

登場人物　大工、六三、實は小柴六三郎。しもしおばアお松。福島屋娘、お園。船越十若衛門。若林七郎助。子分、山姥の權。同、般若の彌五。同、長太。家主、茂九郎兵衛。下部、八内。番頭、太夫兵衛。髮ゆひ、源吉。

二幕目上濟むと、時の鐘になり。揚げ幕と幕の引附けより、若い者三人、六尺棒を突き、福島屋と書いたる弓張りを灯し、鉦太鼓を打ち

○　迷子のお園やアい。

△　迷子やアい。

ト呼びながら出て來り、幕の前通りにて行き合ひ

□　どうだ、三助、お園樣の行くへは知れたか。

○　イヤ〳〵、まだ知れぬ。おいらは柳原から、湯島本郷の方を尋ねて見よう。

△　さうしよう〳〵。おいらは本所深川を尋ねて見ようわえ。

皆々　迷子のお園やアい〳〵。

ト呼びながら、東西へ別れて入る。鳴り物變つて、幕明く。

本舞臺、三間の間、上の方に障子たて切つたる二階家。正面二重舞臺。下手に竈を取りつけ、銅の茶釜、ちり〳〵の蔓附けたるをかけ、鼠壁に臺所道具をかけ、荒神棚、よき所に水瓶、手桶、あけ流し、鼠入らずなど取附け、門口引き戸にて、よき所に戸袋を取附け、戸一枚に、ちょと大文字に油障子へ書きあり、上の二階へ丸太階子かけ、まいら戸の戸棚、眞鍮の錠おろし、欄間に銑への螢籠を吊しあり。門口に井戸。幕の内より權、彌五、長太立ちかゝつてゐる。茂九郎兵衞、煙草のみ、古本見ながら義太夫を語つてゐる。大山參り三人、白き行衣にて、一人は御神酒の兩掛けを擔ぎ、納め太刀を大分に持ち、門口に立つて「南無奇妙頂禮、さんげ〳〵、大山大聖不動明王」と、さんげ〳〵の鳴り物にて、深川網打ち場のあたり、賑やかに幕明く。

權　時に今年は早かつたの。

彌五　今日はどこから來た。

大山　ナニ、新町泊りよ。

長太　そりやア早い筈だ。

彌五　早くお神酒を頂けて、錢湯へ行きやな。

皆々　さうすべい〳〵。

長太　晩にはあけすりに行かうぞえ。

大山　待つてゐや〳〵。

權　時に長や、五合當つて來やな。

長太　おれが行くが、最期之助、五合や一升は當ての權助だ。

彌五　行つて來や〳〵。

長太　行つて來べい〳〵。

大山　なんまいだぶつ。

ト掛け念佛。長太此中へ交り、さんげ〳〵の鳴り物にて向うへ入る。

權　大屋さんはべら棒に本が好きだの。

茂九　ナニ、こりやア義太夫本だが、忘れた所を口の中で浚つたのよ。

彌五　淨瑠璃を浚はずと、溝でも浚ひねえな。

權　べら棒に蚊が殖えたな。

茂九　蚊のゐるを、ナニ、大屋が知るものか。

彌五　店賃ばかり欲しがつて、溝のざまを見たがいゝ。

茂九　つかへたら浚はつしやいな。大屋へ遠慮はない。

權　エ、、誰れが又遠慮をするものか。

ト四つ竹になり、向うより源吉、スタ〳〵と出て來り、内へ入る。

茂九　そりや、誰れか來たぞ。

權　誰れだ〳〵

源吉　氣遣ひな者ぢやアない。髮結ひの源吉だよ。

彌五　アヽ、兩國の羊か。

茂九　とんだ見世物だの。

源吉　コレ〳〵、お前方は昨夜からお世話でございます。モシ、二人の手合ひは、此方にゐられますか

え。

權　オイ、今日は二階ずまひよ。

源吉　ちよつと逢はせてくんなさい。

茂九　よし〳〵、大屋さんが呑み込んでゐる。逢つても大事ない。コレ〳〵。

ト丸太階子を明け、六三、顔を出して

六三　誰れだ。源吉ぢやアねえか。

源吉　アイ、わたしさ。お前にちつと

六三　ドレ、そこへ行つて逢はうか。

ト合ひ方になり、源吉は門口をシャンと締める。六三おりてくる。

源吉　こりやアどなたもお世話でございます。

茂九　ナニサ、わしらも店子のドしおばアが弟の六三殿。

權　おいらも姉御の子分、子方。

彌五　へこましても外聞がわるいわな。

源吉　そりやア忝うございます。モシ、六三樣、氣の毒なは後家御樣、お屋敷からは迎ひの人、いひわけのない福島屋のしだら。ありやア、マア、どうなさる思し召しだえ。

六三　ハテ、どうといつて、せう事がない。以前は槍も突かせたる、武士の倅も世につれて、今は大工

煙草　飯　蚊帳　書

の六三郎。相手の女は箱入りの、當時分限の福島屋、殊に屋敷の宿下り、連れて逃げたは、提灯に、釣鐘よりも釣合はぬ事と思へど、只ならぬお園が懐姙、一日々々目に立てば、連れて退いてといはれちやァ、そこが氣性の江戸ッ子だ。命づくでも、腕づくでも、五分でも引かぬ職人かたぎ。お先きまつくら、向う見ず、どうするもんだ。せう事がねえ。

源吉　すりや、モウ、女、子供を連れて逃げるは、若い者の常り前。併し、向うがまことに人のいゝ上なしだから、中へ人を入れるといふ、そんな話しも聞きませぬが、こりやァいつそ此方から、十右衛門樣を、なんと渡り引きにやつたらば

六三　サァ、それもさうと思つてゐる。そんなら、誰れ彼れといはうより、船越を頼んで、福島屋へ行つてもらはうか。

源吉　それがようござります。

ト此うちお園、二階の障子を明け、窺ひゐる。

茂九　成る程、後手にならぬうち、此方から誰れぞ入るがようごんす。

彌五　いつそ、おいらが行つてやらうか。

六三　イヽヤ、てめえ達ちやァ、却つて向うが、びく〳〵者だ。こりやァどうでも

ト二階を見る。お園と顔見合せ

その　何ぢややら、わたしが事から、あなたがたに御苦勞かけまする。お氣の毒でござりまする。殊には、お恥かしい事ながら、お屋敷へは歸られぬ體たゞ、心にかゝりまするは、義理ある親子の後家御樣、あなたのお案じないやうに。

六三　そりやァおれも合點だ。殊に、姉御のおし殿。女でこそあれ、滅多に後へ寄るものぢやァない。姉御の顔づくでも、うつかりした者が渡り引きにくる者か。そこで今から、おれが十右衛門殿の所へ行つて、あの男を向うの方へやるつもりよ。

その　エ、そんならあの船越さんを……こりやようござんせう。して、お前、すぐに行きなさんすかえ。

六三　ツイ一走り行つてくる。姉御は奥に晝寢の時分。起して話すに及ばぬ事。目が覺めたら、ちよつと話して下さい。そのマァ脇差しをこゝへ

その　アイ。これかえ。

ト階子に半分よりかゝつて、二階より脇差しを差出す。六三取らうとする。ちよつと思ひ入れあつて、

六三　アヽ、イヽエ、こりやおよしなされませ。

その　ハテ、男の魂る。ちよつと差して。

六三　イエ〳〵。そりやわるうござんす。以前は小柴の御子息でも、今は大工の六三さん。頼むお方も

船越さん。町人同士の相談に、此一腰は目に立つて、殊にはわたしも案じられる。刃物はどうぞわたしへ預けて

ト思ひ入れ。六三もこなし。

六三　成る程、女の小さい心から、案じられるは、こりやァ尤も、いゝワ、そんならてまへが落ちつくやう、大工の六三、丸腰で行かう。

その　嬉しうござんす。それでわたしも安堵致しましたわいなァ。（ト脇差しを抱へる）。

源吉　イカサマ、こりやァそれがようござりまする。お園様、お案じなされまするな、私しも附いて參りませう。

彌五　おいらは行かずとよからうの。

六三　何さ、賣つた女を揚げた渡り引きぢやァなし、ぬし達は行くに及ばぬ。それに附けても兩國で、見かゝつた梶川が、七郎助への手紙の文言、正しく鯉魚を盜み取り、質入れしたはあの梶川、七郎助からせかしたら、正しく在所も

源吉　エ。（ト思ひ入れ）。

六三　アイヤ、大儀ながら

その　六三きん

六三　ドリヤ、行つて來ようか。

ト旅行り唄になり、六三先きに源吉附いて向うへ入る。お園は二階へ上り、障子をさす。

茂九　コレ〳〵、若い衆や、六三があゝいつて行きは行つたが、其うちに待ちかねて、彼方から玉を揚けに來まいものでもない。どの道、始末方は家主が呑み込んでゐるから、必ずへこむまいぞ。

二人　合點だ〳〵。

彌五　大屋さんが振りに出りやァ、店子の手合ひも、其算段で挨拶するわな。

樣　時に姉御を起して、始末方を掛合はうぢやァねえか。

茂九　ハテ、そりやァマアア、其時の事さ。

ト向うより、バタ〳〵にて長太、一升徳利を持つて來り、内へ駈け込む。

長太　來たぞ〳〵〳〵。（ト騒ぐ）。

三人　何が來た〳〵。

長太　向うの方から、渡りに來たぞ〳〵。

三人　來たか〳〵。

長太　來た段ではない。今、酒を取りに行つたところが、あすこの話しには、此町内にもしおばァといふ婦御の内はどこだと聞きに來たと、酒屋の内で聞いて來た。油斷をするな〳〵。

彌五　コレ、エヽ、向うからどんな立派な男が來ようが、怖くはないぞ。併し用心はしてゐるがいゝ。

長太　さうだ〳〵。角が八本生えてゐようが、おッかない事はない。マア、何にしろ、玉は出しておかぬがいゝぞよ。

權　よしさ。用心にしくはない。彌五や、長鳶はあらうの。

彌五　ある段か。長鳶でも、薪ざつばでも、みんな浚ひ出すがいゝ。

茂九　足らずは自身番から、鐵砲でも、割り竹でも、取つて來や〳〵。

三人　合點だ〳〵。

ト三人思ひ入れあつて、薪ざつばや長鳶を持つて

權　うしやアがつたら、ぶッくらはせろ〳〵。

彌五　め、べいぞ〳〵。

ト思ひ入れ。さんげ〳〵の合ひ方になり、向うより酒屋の御用、角樽樽を提げ、跡より太次兵衛、羽織袴の形、供の男、白木の臺に取り肴を並べ、これを持つて出て來り、花道にて

御用　モシ〳〵、おばさんの内は、向うの、螢籠の吊した内さ。

太次　ア、、あの内か。

御用　左樣さ。（ト本舞臺へくる）。

太次　ハイ、ちとお頼み申しませう。

三人　そりや、來たぞ。

茂九　油斷するな。

三人　ぶッくぢけ〳〵。

ト家内立ち屬ぐ、太次兵衛肝を潰し、慄へ聲にて

太次　ハイ、お頼み申しませう。

皆々　何だ〳〵。

太次　イヤ、別の事でもございませぬ。あなたは、もしおばアさまのお宅でございまするか。

權　もしおばアとは何の事だ。しら几帳面の名を

三人　いやれな〳〵。

茂九　モシ〳〵、こなさん、どこからござつた猿唐人かは知らねえが、そんなすかまたな名で、人前が通るものかな。途方もない間抜けぢやアないか。

太次　ハイ〳〵、御免なされませ。たしかお名は、お松樣とやら申しました。

茂九　お松かえ、お松ならこゝの内だ。入らつしやいな。（ト引摺り込む）。

太次　ハイ〳〵〳〵。（ト入る）。

御用　モシ、櫛はこゝへ置いて行きますよ。（ト櫛を内へ入れて、駈けて向うへ入る）。

彌五　コレ、こなさんは大分慄へるが、何か、今日は瘧り日か。

長太　氣のきかぬ間抜けぢやアないか。

權　用があれば、きり〳〵言はつしやい。おへねえ朴念仁だ。

太次　ハイ〳〵〳〵、御免なされませ。私しは本白銀町、福島屋の通ひ番頭、太次兵衛と申しまする者でござりまする。承りますれば、（ト言はうとする）。

茂九　アヽ、モシ〳〵、お前、何かえ、福島屋から來なすつた番頭さんかえ。

太次　左樣でござりまする。

茂九　そんなら、宿六を起して逢はせやせう。コレ、若い衆や、姉御を起して下さい。

三人　オイ。……モシ、姉御、起きなさい〳〵。（ト暖簾口にて呼び立てる）。

まつ　オイ〳〵。なんだ、やかましい。

ト合ひ方になり。奥より、しのお松。浴衣のなりにて、鏡臺を抱へ、出てくる。皆々見て

三人　姉御、福島屋から人が來たよ。

まつ　アヽ、何か、お園さんの渡り引きか。ドレ、どこに來てゐる。エヽ、お前か、アノ、わつちの内へ渡りに來なすつたのは……コレ、てめえ達も見や。かりにも網打ち場の土地で、しお

ばアとうるさがられるせうかにやア、どんな無駄出入りでも、面つくばかりでも濟み濟ましをするお松が内へ、モシ、お前、何しに來なすつた。イヤサ、お前を渡りに寄越すとは、ほんに福島屋の内も、めでたい手合ひばかりゐると見えるのう。

皆々　さうさ〳〵。おいらは、わい〳〵天王が面を忘れたと思つた。ハヽヽヽヽヽヽ。

太次　ハイ〳〵。これはどなたもおやかましうござりまする。モシ、あなたが伺ひ及びましたるほしおばア樣でござりまするか。おばア樣と承りましたが、ハテ、お若い事でござりまする。ハヽヽヽヽヽ。モシ、私しは外の事でも參りませぬ。お園殿の儀に附きまして、參上仕りました。通ひ番頭の太次兵衛と申す者でござりまする。あなたの弟御、大工の六三殿が、連れて逃げられたお園殿は、お屋敷へ上げねば、どうも相濟まぬ儀がござりまするゆゑ、どうぞ娘御を私しへ、お返し下されまるやう、へヽヽヽヽヽ。コリヤ〳〵、持つて參つた品を、これへ持て〳〵。（ト白木の臺に酒樽をお松の前に差出し）ひとへに、私しへお渡し下さりまするやう、ハイ〳〵、これは又輕少ながら、お目にかけまするものは、へヽヽヽヽヽ、心ないものでござりまする。

ト追從して思ひ入れ。お松ギロリと見て

まつ　エヽ、こりや何かえ、弟の六三が連れて來たお園さんを、お前が迎ひに來なすつたのかえ。

太次　左樣でござります。へヽヽヽヽヽ。

まつ　モシ、そりやァお前、折角のお出でだがね、アイお連れなさいと、今すぐにお渡し申しても上げられない始末さ。それにお前、酒肴を持つて來なすつたが、お忝なうございます。ト直ぐに貰つてもおかれねえ羽目さ、折角持つて來なすつたが、こりやァ持つて歸つてくんなさいよ。

太次　左樣ではござりませうが、此品は、マア〳〵お納めなされて

茂九　コレ〳〵、モシ、そりやお前がいくら言つたというて、無駄な話しだ。ぬしがあゝ言ひ出しては、挺でもいかねえよ。

權　さうだ〳〵。コレ、番頭さん、折角持つてござつたが、酒も、肴もそれなりに

彌五　持つて歸つて下さいよ。

太次　左樣なら、どうでもアノ、お園殿は

權　言ふは無駄だよ、早く歸らつしやい。

皆々　歸つてもらはう〳〵。

太次　ハイ〳〵、左樣ならもうお暇申しませう。コレ〳〵、久八、其品を又持つて歸るのぢやぞ。

下男　それは迷惑な。（ト樽と肴を取集める）。

まつ　コレ〳〵、長太や、てめえあの油を買つておいて來やよ。

長太　アイ〳〵。わしらは今夜はあけごり（曉垢離）に行きやすから、油屋へ屆けて行きやせう。

まつ　さうしてくりや。

茂九　コレ、伯母御。福島屋の渡り引きも、ぬし達を寄越す位ゐなら、大概知れた話しだ。家主がゐるにも及ぶまいてな。

まつ　さうさ、大屋さん、お急がしいにおかたじけ。マア、歸つてくんなさいよ。

茂九　さうしませう。用が出來たらすぐに呼びに寄越さつしやい。コレ〳〵。こなた衆も又來さつしやいよ。

權　あけごりをしまつて、すぐに來やすよ。

彌五　其うちお前一人でいゝかえ。

まつ　よくなくつて。女一人だといつて、てめえ達百人ゐるより丈夫だ。

三人　又、から口を言はしやるよ。

茂九　イヤ、性はそんなものさ。

太次　ハイ、左樣なら、お暇申します。どなたもおやかましうござりました。

まつ　オヤ、伯父さんお歸りかえ。又來年來たら寄んなさい。今年は土用の入り口が寒くつて大違ひだの。エ、、とんだ縮屋だ。ホ、、、、、。

權　成る程、縮屋の掛け取りか、女出入りの渡り引きか。

鶴五　解らねえ代物だ。ハヽヽヽヽ。

茂九　伯母御、氣を附けさつしやいよ。

まつ　晩に來なさい。

太次　ハイお暇申しませう。

三人　ドリヤ、あけごりに行つて來ようか。

ト四つ竹節になり、太次兵衛と下男は酒肴を持つて先きに立ち、長太は油差しを持ち、茂九郎兵衛は拾ぜりふにて門口の路次へ入る。襦を鶴吾は向うへ入る。お松餞見送り

まつ　ホンニマア、いかに人のいゝ内だといつて、おれが内へ寄越す者に事を缺いて、あんな堅木の棒を寄越すとは、變痴奇な内だぞ。

ト此うちお園、二階よりおりかゝりぬて

その　モシ〳〵、お姉えさん、わたしを迎ひに來た者は歸りましたかいな。（ト合ひ方）。

まつ　お園さん、氣遣ひしなさんな。たとへどんなおッかない男がかゝつて來ようが、六三の前から預つたこなさんを、敷居の外へ五分五厘、出すやうな姉ぢやアねえ。氣にするは無駄だよ。

その　サア、さういふお前のたのもしい、男も及ばぬ氣前を聞き、わたしや安堵致してをりますわいな。

まつ　ナニお前、女の氣の强いも、あんまり出來た話しぢやアねえのよ。そりやマアさうと、お園さん

お前大分髪がばら附いて來たの。髮へかゝつてうるさからう。わつちがちよつと撫で附けてあげうか。

その　お取込みの中、お世話になる其上に、どうしてマア

まつ　ハテ、大事ないわな。ちよつと撫で附けてあげう。鏡臺もこゝにあるよ。

その　そりやお嬉しうござりまする。

ト鏡臺を直し、鏡に向ふ。お松、櫛道具を取つてくる。跳への合ひ方。

まつ　此暑いのに髪のばら附くが、いつちわるいものだよ。どうでお前、錢湯へはやられず、行水をおつかひ。湯を沸かしておいたよ。

その　そりや有り難うござります。

まつ　（髪を撫でつけながら）　エヽ、お前のおぐしは强的たんとあるの。わつちらもお前方の時分には、したゝか髪もあつたが、斯うだりむくつちやア、意氣地はねえさ。

その　ナンノマアお前さんが、今から其やうな事いうて

まつ　そりやアさうと、お園さん、お前アノわつちが弟の六三を、天にも地にも無いやうに思つて、死ね、死なうと、逃け走りもしなさつたが、わつちやア眞のところをいふがね、そりやアわるいよお前の身の爲にはわるい。切れてしまひな。

その　エ。（ト悔りする）。

まつ　イヽエ、わつちやァお前の事を可哀さうにと思ふから、こんな事もいふものよ。どうであの職人の六三にくッついてゐるものゝ、行く〳〵はぐるのはだか、とゞのどんづまりが、もし辨天へでも出にやァならねえ羽目になるよ。わつちやァそれが氣の毒だ。其上お前は身が重いさうだ。まことにこいつが手こずりものだ。初産ではあらうし、身二つになるといつても、譬へにもいふ軒下三がい、モウ〳〵、甘口な話しぢやァない。しつけねえ苦勞をしようよりは、あのやうにお前を思つてゐる梶川さんの

その　エ。（ト悔りする）。

まつ　サ、弟の連れて來たお前を、姉のわつちが、こんな横をいふ事もねえが、こりやァ、性（正）はお前を思ふからわつちやァ言ふのよ。所詮あの六三と、梶川さんと、一口に言へるものか。此方は身性もきまらねえ居候ふの身、向うは立派なお侍ひ。ぬしのところへ行つた日にやァ、そりやァ言ふ目が出るよ。おらが野郎にくッついてゐると、道行きがつまらねえがちだ。上の口へは心元ねえのさ。

その　（いろ〳〵思ひ入れあつて）其やうに眞實に言うて下さんす、まことに親身も同前のお詞、お嬉しうござりまする。どうした事やら、六三さんの事、わたしや片時忘れませぬ。添はれぬ義理にて二

人が、たとへ命に及ぶとも、それをわたしは、悲しいとも思はぬ。只悲しいのは、お腹のやゝ、世が世であらば、誰れあらう、小柴掃部殿の初孫とも、六三郎の惣領とも敬まはれうに、情けない、親が死ぬれば胎内の此子も可哀や日の目も見ず。（ト鏡にうつるお松とちよつと見合ひ、愁ひのこなしあつて）どうも思ひ切られませぬわいなァ。（ト思ひ入れ）。

まつ　エヽ、そりやァお前無分別な、と言つたところが始まらねえ話しだ。氣の毒な事にやァ、强的苦勞を

ト此うちお園、鏡臺の引出しに隱しある、古金襴の帛紗を見附け、ッッと出し、よく〳〵見て

その　模樣は羅鶴、色は赤地の古金襴、裏にもわたしが見覺えの、文字のあるのは、いつぞや御殿の蟲干しに拜みし、これが印子の鯉魚を包みし、帛紗がどうしてこゝに

まつ　エ。（ト思ひ入れ。手早く取つて、懷中して）アイ、それでちつと、うつたうしくもありやすまいよ。

ト撫で附けしまひ、手を拭いてゐる。お園、懷中の帛紗へ目を附け

その　見覺えのあるあの帛紗、思ひもよらぬ、こゝにあつたは、どうも合點が

まつ　ゆく、ゆかねえはおめえの身の上。どうで弟にくッついてゐちやァ、末のつまらぬ事だらけ、顏にしかけのあるうちに、梶川さんの

その　エ。

まつ　思案しなんし。

ト思ひ入れ。唄になり、お園心遣ひあつて、そろ〳〵丸太階子を上る。お松跡見送り

目角の強いあのお園、印子の鯉魚を包んだる、帛紗といふ事、お屋敷から見覺えてゐるからは、うか〳〵鏡臺針箱へ入れてもおかれず。ハテ氣がゝりな。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、お松あたりを、窺ひ〳〵、ありあふ物の中へ隱さんとする事二三度あり、ト〻軒に吊りある螢籠を見附ける。此うち向うより七郎助、以前のなりにて出て來り、門口より窺ひゐる。此うちお松、以前の帛紗を赤地の方を上へ出し、丸めて、螢籠の中へ入れる。七郎助何心なく

七郎　ほし坊〳〵、ほし〳〵。

ト大きな聲で呼ぶ。お松惚りして

まつ　エヽ、誰れだな。……七郎助さん、わつちやァ惚りしたよ。モシ、お前、何ぞ用があつて來なすつたのか。

七郎　用があつて來たかとは、ほし、つれないぞよ〳〵、おぬしがまだ仲町に藝者の時分、通ひつめたる七郎助、一度の情けもある事か、つれなう當つた其上に、あつかましくも此間、牢屋へ入つた物いりを、ようマァぬつくり十五兩。それも返さず、コレ、せめて身共が堪能するほど

ト抱き附かうとする。お松突き退け

まつ　エヽ、おめえも、いつも〳〵御息災な、いゝ機嫌らしい。コレ、おめえアノわつちを口説きに來なすつたか。但しは外の用で來なすつたのか。

七郎　ハテ、知れた事、そもじを口説きに……アヽ、イヤ〳〵、身共大事の用があつて參つた。

まつ　ソレ、見なさい。そりやァ大方、梶川さんから

七郎　左樣々々。六三がこゝへ預けておく、あのお園の儀に附き

まつ　アヽコレ。

ト思ひ入れ。七つの鐘鳴る。お松心遣ひあつて、兩人、そろ〳〵と表へ出て、花道へ行き

おめえもマァ氣の利かねえ。二階にゐるのは福島屋のお園。慥かにおめえは梶川樣から、墮胎藥を賴まれて持つて來なさる約束だが、あのお園に飲ませる墮胎藥は

七郎　左樣々々。それでばつかり身は參つた。コレ〳〵、（ト懷中より藥の包みを出し）これが彼の月よどみの墮胎藥。何卒ほしが働きで、お園に飲ませて、六三が胤を墮さす手段。

まつ　ソレ見たか、さうあらうと思つたに、あんまりお前は、うんのろ作左衛門だ。

七郎　イヤ、まだ作左衛門と改名致さぬ。

まつ　エヽ、おへねえ間抜けだ。コレ、おめえ斯うしねえ。此裏に茂九郎兵衛といふ家主がある、そこの内へ行つて、こゝから來たといつて待つてゐな。

七郎　成る程、お手前には話しもあれど、お園が二階にゐるうちは

まつ　まだ其上に、今にも六三が歸つて來ちやァ面倒だ。コレ。

ト囁く。七郎助呑み込む。

七郎　然らば其うち、家主方で

まつ　路次を入つて突き當り、井戸端から二軒目だ。

七郎　それが家主

まつ　ハテ、行きなさい。

七郎　オヤ、久し振りで叱られた。

ト唄になり。とつかはと路次の中へ入る。お松藥の包みと、書附けを見て

まつ　そんならこれが、お園に飲ませる墮胎藥。六三が歸らぬ其うちに

ト思ひ入れ、入相の鐘鳴る。あたりを窺ひ、藥鑵を取出し、今の藥を仕掛け、七輪の上へかけ、思ひ入れあつて、行燈取出し、油をつがうとして、油差しなきゆゑ

エヽ、まだあの野郎は油を買つて來やァがらねえ。エヽ、日の暮れるに氣のきかねえ。ほんにまだ行水もつかはなんだ。ドレ、今のうちつかつてしまはうか。

ト獨吟になり。大盥を舞臺よき所へ置き、門口を締め、浴衣細帶にて、戸を一枚取つて來り、正面へ

横に置く。此時戸に角大師、豆大師、横になる。お松、手拭ひをくはへ、手桶を提げて行き、張り子の釜の蓋を明ける。仕掛けにて湯氣パツと立ちのぼる。お松、右の湯を汲んで來り、戸の蔭にて盥へ湯を明けて、ちよつと入れて見て、水を埋めることよろしくあつて、細帶を戸へ掛け、白縮緬の湯卷きを取つて戸へ掛ける。角大師の札の上へ行くゆゑ、ちよつと取つて脇へかけ、手拭ひをくはへ、浴衣を取つて戸へかけ、行水をつかふ思ひ入れ。此うち獨吟。よき時分、向うより船越十右衞門、序幕の派手なるなり、一本差しにて出て、花道へくる。唄、一くさり切れる。

十右　福島屋を家出した、お園殿の隱れ家は、慥かに六三が姉といふもしおばァが一人棲み、此網打ち場の裏通り。

まつ　このマア長太の氣紛れめ、どこまで油を買ひに行つた。日の暮れるに、エヽ氣の揉めた。コレ〳〵強的な藪ッ蚊だぞ。

ト又獨吟になり、十右衞門花道より、窺ひ〳〵門口に立つて、内を見る。お松體を拭きゐる。此唄のうち兩方の窓をおろし、舞臺はほのぐらき體。こゝにて軒に吊せし籠の螢、自然と、ほつかり〳〵と仕掛けにて光り、此あかりにて、籠の中に隱せし古金襴の錦、螢火と共にうつる仕掛け。唄一ばいに切れる。十右衞門思ひ入れ。

十右　頼みませう〳〵。もし殿の内はこゝかえ。

まつ　アイ〳〵、誰れだえ。どつから來なすつたえ。
十右　アイ、ちよつと話しがあつて、船越の十右衛門が來ました。
まつ　エ、十右衛門さんか。
十右　内にか。許さつしやい。
ト戸を明けてズツと入る。お松うろたへ
まつ　ア、、待ちなさんせ。
十右　大分暗いの。なぜあかりを
まつ　アイ、わつちは今行水をつかつてゐやすから、ちよつとお待ちよ。（ト思ひ入れ）。
十右　そいつは不躾けな。ゆるりとつかはつしやいよ。
ト松此うち身仕舞ひして、浴衣を着る。十右衛門螢籠へ目を附ける。誘への合ひ方。門口にて蟲の音する。
ア、、あの光りは何だ。
まつ　アイ、ありやァ螢籠さ。
十右　ハテ、螢の光りとよく見れば、螢火ならぬまだ外に、金色奪ふ籠の内、其色妙なる螢の光り。殊に何やら赤色の、外にもそれと

トつか〳〵と寄る。お松うろたへ、戸板を取つて、十右衛門が道に横たへ、留める。十右衛門立ち廻りあつて、戸板を取りのけ、螢籠へかゝるを、お松有あふ蟲を取つて打ち返す。十右衛門悔りする。蟲の音一時にやむ。十右衛門思ひ入れあつて、螢籠へかゝる。お松手早く螢籠を取つて、鏡臺の引出しへ籠と共に打ち込み、思ひ入れ。
こりやアどうだ。そこらあたりが行水の
まつ　捨て所なき蟲の聲。其蟲の音も一時に
十右　鳴きやんだのも行水の
まつ　其場と共に
十右　軒の螢も
まつ　エ。（ト思ひ入れあつて）一服あがれな。（ト煙草盆差出す）。
十右　アイ。……こりやァなぜ行燈を
まつ　聞きなさい。油を買ひに行つた野郎が
十右　歸らないか。
まつ　左樣さ。
十右　ハテ、日の暮れるのに

ト暮れ六つの鐘。向うより長太、油差しを持ち走り出で

長太　姉御々々。油を買つて來やした。（ト出す）。

まつ　此間抜け野郎め、いけ埒の明かない、何をしてうしやァがつた。

ト油差しを取つて、行燈へさし、すぐに附け木にて煙草盆の火をとつて、行燈へうつすこと。

長太　なんのこつたな。さう叱る事はねえ。ちつと位る遲い事もあらうわな。

まつ　何を返答がへしをしやァがる。

十右　ハテ、もういゝわな。

まつ　癖になるわな。

長太　エ、、猫ぢやァあるまいし。

まつ　又たわ事を。

ト矢張り時の鐘。長太向うへ走り入る。

十右　時に、お松殿、十右衛門が今日こゝへ來たは、外の事でもねえが、こなさんの知る通り、福島屋のお園殿、大工の六三とわけあつて、家出したのは、こりやハヤ、世間にまゝある習ひ。只氣の毒なは屋敷から、宿下りに來て返留のうち、出來た此駈落ち。一家の手前は濟まさうが、濟まぬは屋敷の役所の手前、いひわけないとてわしへの頼み、よんどころなく渡りに來たが、お松殿、

六三がこなたに預けたといふ、其お園殿を

まつ　オヤ、そりやァ大きなあべこべだね。此方から又福島屋へ、お前を頼んで、案じなさるな、娘御のお園さんは、わつちが方で預かつたと、お前を頼みに、弟の六三が先刻行きやしたよ。

十右　ハテ、そりやァどこで道が違つたか。

まつ　十右衛門さん、聞きなさい。所詮釣合ひのわるい夫婦だもの、ナニ向うで直ぐ素直にくれるものか。併し、こけ込んで來たせうがにやァ、韋駄天が革羽織を着て、鬼鹿毛に乘つて來ようが……

……とさ、こんな通りをいふでもない。どんな勇みが來ようとまた、挨拶もしまいと思つたが、日頃からお前ならばと、思つてゐる船越さん、鬼のやうなわつちでも、どうかこいつはこッ恥かしくなつて來たやつさ。

ト いやらしき思ひ入れ、此時門口へ、七郎助出て、内を窺ひ、氣を揉む思ひ入れ。

十右　コレ、お松坊、てめえいゝ機嫌らしい。何の眞似だ。此十右衛門も獨り身でもなし、女房のあるを知つてゐながら、まだ仲町で藝者をしてゐる時分から、心意氣は憎くなし、男と生れちやァいくつになつても、まんざらでもねえが……何をいふにも、女出入りの渡りに來て、味な話しになつちやァ、あんまり浮氣らしい、世間體がわるいぢやァないか。

まつ　ナニ、打つちやつておきねえな。

十右　イヤ、さうでねえの。わけ道の解らぬ事は嫌ひな生れだ。そりやア、マア、さうと、わざ〳〵お馬を乘り出したお園殿の事、どう方を附けてくれるつもりだ。

まつ　そりやモウ、外の人の來た話しぢやアなし、わつちが方に心意氣のあるお前。あの子をどうするものかな。梶川さんの方からも、賴んでは來たれども、お前あの子を連れてお歸り。

ト聞いて、門口にて七郎助思ひ入れ。二階よりお園窺ひゐる。

十右　さうこなさんが、いつてくれゝば、賴まれた男も立つといふもの。そんなら、今直ぐに連れて行かうか。（ト立上る）。

まつ　アヽコレ、待ちなさいな。わつちも六三からは預り、梶川さんからは賴まれ、二方三方から言ひ込んであるあの子の道行き、今更斯うとも。モシ、斯うしてくんな。

ト囁く。十右衞門呑み込み、思ひ入れあつて

十右　エヽ、そんなら後まで待つてくれろといふのか。そりやどうなりとしまいものでもない。必ずともに、間違ひなく賴みます。

まつ　氣遣ひしなさるな。其代りにはお前も又、わつちが心意氣を間違はしてくんなさるなよ。

十右　承知さ。お松坊

まつ　十右衞門さん

十右　慥かに螢の

ト鏡臺の引出しへ目を附ける。お松ちやつと引出しを閉す。十右衞門思ひ入れ。お園二階より窺ふ。

まつ　蚊がくはうによ。

十右　イヤ、うつたうしい蚊だ。

ト唄。お園は二階の障子を閉す。思ひ入れあつて、十右衞門奥へ入る。あと合ひ方。表に窺ふ七郎助ツカ〳〵と入り、お松が胸づくしを取つて

七郎　コレ、もし、何もかも、聞いたぞ〳〵。

まつ　コレ〳〵、七郎助さん、何をお前聞いたといふのさ。

七郎　ハテ、知れた事。内外を貢ぐ我らを先きにして、あの船越に氣のある樣子。其上、梶川殿が惚れてござるお園を、コリヤ福島屋へ、返す氣ぢやな〳〵。

まつ　コレサ、靜かに言ひなさいな。梶川樣とあれ程まで、對談したお園が事、今更なんと變替へるものか。併し、外の男と違ひ、道理の解つた十右衞門さん、やる事はならぬと言つたが最後、どんな氣紛れを起さうも知れぬから、やはらを言つてやらかしたのさ。

七郎　エヽ、そんならありや誠ではないな。

まつ　モシ、斯うだわな。

ト嚥く。七郎助呑み込む。

七郎　そりやまんざらでもない話しだ。よし〳〵、承知々々、そんなら身共は、初夜を打つのを合ひ圖にして、迎ひにくるから、其時必ず

まつ　否とぬかせば、ふんじばつておめえに渡すわ。よしかえ。

七郎　コレ、それに違ひはないのか。併し、おれを歸してあとには船越。エヽ、氣が揉めるわ〳〵。

まつ　さう思はゞ行かずといゝわな。其代りには梶川樣へ、皆言つてしまはにやアならぬよ。

ト此うちお松、藥をかけし七輪の下をあふいでゐる。

七郎　アヽ、コレ〳〵、それを言はれては、われら面目次第もないわえ。コレ〳〵、それはさうと、あの藥の事は、よしか〳〵。

まつ　七郎助さん

七郎　エヽ、あとが案じられるわえ。

ト七郎助心を殘す思ひ入れにて、向うへ行かうとして、合ひ方になり、引返して路次へ入る。お松あと見送り

まつ　エヽ、いゝきな唐變木だ。うぬがやうな間抜けと、十右衛門さんと、一口にいへるものか。エヽ、だりもく野郎め。

ト藥を煎じゐる。二階よりお園、以前の一腰を持つて來り、拔き足して表の方へ行かうとする。

まつ　お園さん、お待ちよ。

その　アイ。

まつ　こりやアお前、どこへ行きなさるのだ。

その　サア、わたしや、（ト思ひ入れして）モシ、ほしさん、わたしやお前を疑ふぢやござんせぬが、あの二階から窺へば、十右衛門さんへ渡さうといひなさんすは、六三さんの顏も立たず、わたしを内へ歸しなさんすお前のお心。それもあるまいとは申されませぬが、其上に、あの七郎助殿に、今宵の初夜にわたしを渡さうと、今の約束。さういふお前の心の變つた此内に、うか〳〵してもをられませぬ。六三さんにたづねあひ、ぬしと相談せにやなりませぬ。ほしさん、只今までは何かときついお前のお世話、有り難うござりまするが、もうわたしや此内には

ト行かうとするを引廻して、門口をシャンとさし

まつ　いゝえ、弟が前から預つたお前、引渡すまでは、五分でも外へ出されないよ。

その　サア、さう言ひなさんすは尤もぢやが、わたしやどうもお前の心が

まつ　どうしたとえ。

その　知れぬ事ぢやと思ふから、どうもお世話になつてゐては

まつ　コレ、何か、わつちの心が知れねえ。

その　アイ、外でもござんせぬ。先刻お前の鏡臺に入れてあつたる古金襴、模樣も慥かに雛鶴の、印子の鯉魚に添へたる帛紗、よう覺えてをりまする。アノマア帛紗は、どうしてお前が持つてゐなさんす。

まつ　サア、あの帛紗は

その　どうして此内にはござりまする。

まつ　アイ、買ひやした。

その　エ。

まつ　柳原の古着屋見世に、吊してあつたあの帛紗、わづか五十か八十で、値段が出來たから、ありやうは精靈棚の打敷きにと、買つて戻つた雛鶴の、此帛紗ならコレこゝに

ト鬢籠の帛紗を出して見せる。お園、よく〳〵目を附け

その　さてこそ違はぬ、印子の置き物へ、添へてあつたる此帛紗、此出所を詮議せば、鯉魚の行くへも知れる道理。ほしさん、どうぞ此品を

まつ　欲しくばお前に上げるわな。

その　嬉しうござんす。これさへあれば、六三さんと相談して、鯉魚の行くへを、

ト帛紗を持ち、行かうとする。

まつ　アヽコレ、お園さん、お待ちな。お前其帛紗を、弟六三に渡さぬうち、待つておいでよ。（ト跳への合ひ方、一つ鉦）此マア藥を飲んでおいで。

ト茶碗へついで差出す。お園こなしあつて

その　ほしさん、こりやマア、何の藥ぢやえ。

まつ　月よどみの墮胎藥さ。

その　エヽ。（ト惘りする）。

まつ　わつちが帛紗を持つてゐるを、見附け出したるお園さん、どうで六三に話すは必定。それぢやアこちら方の目論見も、元の鞘へは納まらぬ、それぢやア所詮お陀佛と、往生きはめてこなさんを、梶川樣へ連れて行く、其前に腹の子を、むかはり月の質同前、流したあとで連れて行く。利上げをしてももう叶はぬ。覺悟きはめてお園さん、墮胎藥を飲んでおくれ。

その　そりや、アノ、わたしを梶川へ、渡さう爲にお腹のやゝ、

まつ　水に流してしまふのさ。

その　そりや又、あんまり

まつ　藥を飲むか。

そのサア、それは、
まつ但し、六三を思ひ切るのか。
そのサア、それは、
まつ墮してしまふか。
そのサア、
まつサア、
兩人サア〳〵〳〵、
まつきり〳〵飲んでしまはんせ。

ト差し附ける。お園思ひ入れあつて

そのエヽ、胴慾な。此あらましを六三さんへ

ト行かうとするを引附け

まつエヽ、聞分けのない。くらつてしまへ。

ト お園が襟髪を掴み、藥を飲まさうとする。お園飲むまいと爭ふうち、思はず茶碗の藥をお松の顏へぶつかける。お松「ワツ」というて顏を抱へ、苦しんで倒れる。お園駈寄つて介抱して

そのコレ、ねしさん。コレ、堪忍して下さんせ。こりや誠に怪我でござんす。アヽ、どうぞよい藥が

欲しいものぢや。

ト いろ〳〵介抱するうち、門口に七郎助窺ひゐて、此時、ツカ〳〵と入る。

七郎ヤヽヽヽヽ、こりやアねし、どうした〳〵。

そのサア、わたしへ飲めと差し附けさんした此藥、思はず怪我に、ねしさんの顏へかゝつたわいな。

七郎ヤヽヽヽヽ、こりや先刻に渡した墮胎藥に違ひない。アヽコレ、顏に火傷させたな。痕が附いてはならぬ。コレ〳〵、こゝによい藥がある。

ト紙入れより火傷の藥を出し、お松の顏へ附ける。此うちお園、帛紗と一腰を持ち出て、表の方へ行かうとする。七郎助見附け

ドツコイ〳〵、われを逃がしてよいものか。殊にわれが持つてゐるは、そりや梶川樣の手にあつた、印子の鯉魚に添へたる帛紗。

ト思はずいふ。お園「さては」とこなしあつて

そのさてこそ鯉魚は梶川を詮議したなら行くへも知れる。此よし早う、六三さんへ。

七郎南無三、それを聞かれたか。こりやもうやけぢや。お園はこゝから

ト引附ける。お園振り拂つて、突き倒し、そのまゝ表へ出て、一散に向うへ入る。七郎助跡を追はうとするところへ、奥より十右衞門出て引附け、立ち廻りのうち兩人あやまつてお松をしたゝかに踏む。

これにてお松心附き、起き上る。此時お松が顔、墮胎藥に火傷せし上に藥を塗られ、見苦しき顔にて、よろしくよろめきあがり

まつ　お園さん〳〵。……そんならお園は

十右　此船越が預かつた。

その　ヤ、、、、。そんならお前が

七郎　もしは顔が

まつ　今の火傷で、もし見苦しく（ト鏡を取り、顔を見ることあつて）ヤ、、、、。墮胎藥に思はず怪我を

七郎　お園は中木場。追ッかけて

まつ　逃がしはせぬぞ。

ト行かうとする。十右衛門引き附ける。此手を振切り向うへかゝる。十右衛門は七郎助を引附ける。お松花道へ行き、振返る。時の鐘の送り、雷の音きびしく、雨車にて、お松はお園のあとを追うて向うへ入る。此仕組み。道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う土手、うしろ一面の藪疊。よき所に樋の口、松柳しげりたる吊り枝。一體、此道具に誂へあり、すべて中木場のあたり。雨車、雷の音、よろしく道具とまる、ト左右より、夕立ちにあひし釣師の仕出し四五人、捨ぜりふをいひながら出て來り、東西へ別れて入ると、パタ〳〵に

てお園、一腰を抱へ、帛紗を持ち、一散に走り出で來り

その　アヽコレ、折わるい此夕立ち。早う六三さんに逢うて、此一腰を渡し、其上で鯉魚の手がゝり、此帛紗、早う渡して

ト思ひ入れ。雷きびしく鳴るゆゑ、耳を押へて俯向いてゐる。此時向うよりお松、よろめき〳〵、顔を抱へ、走り出て來り、苦痛の思ひ入れ。

まつ　アイタヽヽヽヽ、エヽ、心は急けど、思ひがけない此怪我で、氣を失つた其うちに、お園めを見失うた。アヽコレ、どうぞつらまへて、證據の帛紗を取返したいものだ。

ト言ひ〳〵舞臺へくる。お園は雷に恐れ、目を閉ぢ、耳をふさぎ、口の中にて雷除けのお經をよみゐる。お松、喘きゆゑ、何心なくお園に行きあたる。お園惚りして

その　桑原々々。

ト慄へゐる。お松も惚りして

まつ　エヽ、誰れだな。くらがりに何をしてゐるのだ。いけ馬鹿々々しい、惚りさせたよ。

その　ハイ、桑原々々。（ト耳を押へ、慄うてゐる）。

まつ　オヤ、何の事だな、桑原々々と、雷どころぢやァない。此方は火傷の面が、ぴり〳〵と、痛くつてなるものぢやァねえ。……そりや、又光つたわ。

その　ア、、桑原々々。

ト蹲まる。お松は、稲妻の光りにて、お園が姿をちよつと見て

まつ　どうやらこなたは

ト探りより、お園を見附け

まつ　ヤ、お園殿か。

その　ゝしさんか。

ト逃げんとする。お松追ひかけ、立廻りあつて、キツト引附ける。

まつ　エ、、逢ひたかつたわいの。コレ、お園殿、よくもこなさん、折角仕込んだ堕胎薬を、わつちが面へ。コレ、手盛りをくつた此ゝし、醜い火傷の此怪我も、みなこなさんのさせる業。其上、梶川さんが渡しなすつた雛鶴の帛紗も、こなたが揚げて、六三野郎に渡す氣か。思へば腹の立つ女め、證據の帛紗を寄越しやァがれ。

ト お園を酷く捻ぢ附け、打ち打擲する。

その　ア、コレ、ゝしさん、腹の立つのは尤もぢやが、六三さんが尋ねてゐさんす印子の鯉魚の、其手がゝりの此帛紗、どうもお前に渡しては

まつ　渡されぬからは、此わしを訴人する氣か。コレ、以前は乳母の娘でも、今ぢやァ六三がおらァ姉

のゝしを、うぬらは寄つて訴人をするか。

その　どうしてお前を

まつ　其氣が無くば、帛紗を寄越すか。

その　サア、どうもそれでは

まつ　寄越しやァがらねば、六三が所持の

ト持つてゐる一腰をひツたくる。

その　ア、コレ、それを

まつ　（寄るを突き退け）寄りやァがるな。たつてといふに渡さぬと、見たか、六三が親の形見の一腰で

これでうぬをぶッた切つても、取らにやァならぬ。寄越しやァがらぬと、此一腰で

ト白刃をスラリと抜き放す。

その　ア、コレ、滅多な事を、

まつ　命が惜しくば、キリ〳〵其品を。

その　サア、どうもこれは

まつ　渡さにや、うぬも酷い目見せて、（ト切り附ける）。

その　ア、コレ、危ない、滅多な事を。

ト立ち廻り、振り袖にてキツと留める。

まつ　エヽ、離しやァがらぬか。

その　どうぞ助けて

ト兩人捨ぜりふにて白刃を爭ふ。此うち雨車の音、鋼の聲、時の鐘。兩人拔き身をばひ合ふうち、思はずあたりへ投げるはずみに、正面の藪垣へ打ち附け、竹の垣にあたつて、誂への場所へ白刃しやん と立つてゐる。兩人これを知らず、立ち廻りあつて、お園帛紗を持ち逃げるを、お松捕へて

まつ　うぬをやつてたまるものか。逃がしはせぬぞ。待ちやァがれ。

ト襟髮を捕へて引き戻す。お園逃げる。お松引き戻すはずみに、よろ〳〵と藪垣にこけかゝり、急所をしたゝかに白刃にて切り裂き、「アツ」と苦しみ、思ひ入れあつて

ヤヽヽヽヽ、こりやァおれを、切つたな〳〵。

まつ　アヽコレ、どうしてお前を。

まつ　イヽヤ、切つた〳〵。コレエヽ、お園が、姉のゝしを、切つた〳〵。

その　イエ〳〵、わたしや切りやせぬ。切りやせぬぞえ。

ト おろ〳〵するを引ッ捕へ、藪の際へ引き附け

まつ　お園が、姉のゝしを切つた〳〵。

トよろぼひ〳〵こけかゝる。此時藪のうちより件の白刃を取つて、お松をしたゝかに切る。

ヤア〳〵〳〵、切つた〳〵。藪のうちから、わしを切つたは

六三　こなたの弟の、六三でござる。

まつ　ヤ、其六三が假りにも姉を

ト立ちかゝるを、藪の中より又切り附ける。これにてお松。土手より、コロ〳〵と落ちる事あつて、よう〳〵這ひ上る仕組みよろしく、時の鐘の頭、忍び三重、雨車烈しく、藪垣を押し分け、六三（お松と早替り）白刃を振り上げ、下を見おろす。舞臺にまろびしお園、これを見て

その　ヤア、六三さん。

六三　コレ。

トつか〳〵と土手を下り、お松のむしやぶり附くを又切り下げ、立廻りにて引き附けて、膝に敷き南無阿彌陀佛。

ト止めを刺す。始終右の合ひ方。お園、六三に縋つて

その　申し、六三さん。こりやお前、ゝしさんを

六三　以前は乳母が娘のゝし、家來ながらも世につれて、今は假りにも姉なれど、人の知つたる惡黨も弟の六三が手に、これも宿世の因果づく。

その　印子（いんす）の鯉魚の手がゝりたる、雛鶴織つたる古金襴
六三　帛紗を所持する上からは、疑ひもなき實の盗賊
その　心懼きは梶川長兵衛
六三　捕へて詮議と思へども、人殺しといひ、とりわけて、姉といふ字がのがれぬ大罪。
その　わたしも二世と定まる夫、それを嫌うて大それた、お前の胤を身に宿し、
六三　所詮長らへ果てぬ身は、
その　尋ね寄るべは庵崎の、
六三　實の伯父たる福清殿、
その　せめてわたしが暇乞ひ。
六三　こゝからすぐに
その　死ぬる覺悟の
　　ト思ひ入れ。よき時分、梶川の下郎八内窺ひ出て
八内　姉のかたきを殺した六三。そのマア品を
　　トかゝるを、立廻つて六三引敷く。お園あはてゝ
その　アヽコレ。

六三　毒くはば皿。
　　トぐつと突ッ込む。八内苦しむ。
その　ヤ、こなさんは
六三　コレ。
　　ト、チョンと木の頭、兩人見合つて思ひ入れ。時の鐘の送りにて、ひやうし　幕

三幕目　向島福清の場

登場人物　大工、六三、實は小柴六三郎。福島屋娘、お園。中村少長。市川露鶴。市川團車。福島屋清兵衛。

本舞臺、三間の間、正面奇麗なる大和葺きの屋體、茶壁、小袖算筒を取付け、上の方に精靈棚を吊り門口は風雅なる枝折戸、萩垣の間より朝顔這ひかゝりゐる。上の方に建仁寺垣、梧桐、杉などの庭木、石燈籠、手水鉢、四つ目垣、萩桔梗紫苑など秋草の盛り。軒に誂への奇麗なる切り子燈籠を吊し、これに釟菊と菊蝶の紋を付け、「循定院環春光阿禪昇居士、申の霜月廿九日」、「善覺院奉譽了玄居士、申の極月八日」右の通りの戒名を書き、尤も盆棚にも二人の位牌を並べ、すべて向島福清別莊の庭先き三味線入り、弘福寺禪のつとめ、施餓鬼の打鳴らし。此模樣にて幕明く。

ト清兵衛、着流し、庭下駄にて、迎ひ火を焚きゐる。下男一人、丁稚一人手傳ひゐる。盆棚には所化一人回向してゐる。供の男、門口に待つてゐる。清兵衛、水向けして回向の體。

清兵　願我心淨如香爐。願我心淨如智慧。火念焚燒皆常香。供養十方三世佛。一切敬。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

ト水向けして香をくべ、鈴を鳴らし、回向する。丁稚と下男は道具を方附ける。所化は回向を終り

所化　さて〳〵、こゝもとは、きつい蚊でござります。

清兵　御苦勞にござりまする。コリヤ、お茶をあげいよ。

丁稚　ハイ〳〵。お茶上がりませ。（ト出す）。

所化　イヤ〳〵。おかまひなされまするな。方々でござれば、もうお暇致しませう。

清兵　これはあまりお麁末。お夜食をまゐつてござりませ。

所化　イエ〳〵。只今下さりました。

清兵　お住持へよろしく賴みまする。

所化　申し聞かすでござりませう。……コリヤ、伴助よ、穿き物を。

ト供男穿き物を直す、所化は捨ぜりふにて、歸り、うろたへて取つて返し、ツカ〳〵と内へ入り、盆棚の方へ行く。

清兵　これはお所化には、何ぞお忘れなされましたか。

所化　ハイ〳〵。ちと失念仕つた物がござるて。（ト盆棚の上へ置いた紙包みのお布施を見付け）これにござりました〳〵。

清兵　お煙草入れかな。

所化　イエ〳〵。何より大切なお布施を忘れました。ハ、、、、、。

清兵　ようござりました。

ト合ひ方になり、所化は網代笠を持ち、供男附いて、スタ〳〵と向うへ入る。門口に蟲に聲する。

丁稚　モシ、旦那樣、お庭の蟲めが、一倍今夜はよう鳴きまするわえ。

清兵　成る程、昨夜よりは蟲めが餘計に鳴くやうぢや。ちと蟲の音でも聽きませうか。

丁稚　左樣がよろしうござりませう。

清兵　イヤ、先方臺所へ見えたは、ありや誰れぢや。

丁稚　ハイ、本家の福島屋からお人が參りましたが、今にお園樣のお行くへが知れぬさうにござります。

清兵　ア、、まだ知れぬか。所詮約束した男があつての駈落ち、案じる事はあるまいが、其うちにひよつと不料簡な心が出ては、（ト思ひ入れあつて）案じぬでもなし。

丁稚　左樣でござります。今朝ほども大川橋での噂には、昨夜深川の中木場で、ちしおばアといふ女が

切られて、其詮議最中だといふ評判でござりまする。

清兵　すりやアノ、ほしといふ女が切られたといふ噂があるか。其ほしといふは、慥か大工の六三が姉、六三はお園がわけある男。もしや其事で、（ト思ひ入れ）ドリヤ、抹香の切れぬやうに、香盛つてやりませう。

ト唄になり、香爐を取出し、盆棚の前にて香を盛る。丁稚は門口の朝顔へ水を打ちゐる。此唄を借りて、向うより送りの男二人、三つ鱗甲の紋附いたる留守居提灯、一張は紅葉鶴の紋を附け、持つて出る。あとより中村少長、市川露鶴、役者の外行きのなりにて出て來り、門口へ來て

少長　コレ若い衆、福島屋の寮はこゝだの。

丁稚　左樣でござりまする。

少長　親方はお内か。

丁稚　ハイ、宿にゐられまする。マア、お入りなされませ。

少長　さうせう。サア、露鶴さん、お入りなされ。

露鶴　マア〳〵、少長さんお前から。

丁稚　モシ、旦那、堺町から、少長さんと露鶴さんがお出でなされました。

清兵　アヽ、これは珍らしい。サア、此方へお通し申しやれ。

二人　ハイ、親方、御免なされませ。（ト内へ入る）。

清兵　これは珍らしい、よう來なさつたの。暑いが、芝居は評判がようて、いつもながらおめでたうございます。今夜はどこへ行かれたのぢや。

露鶴　ハイ、武藏屋へお客人がお出でなされまして、暮れ方から屋根船で參りましたが、久しくお目にかゝりませず、殊にはお馴染の佛樣の新盆でもあり

少長　アイ、水向けながら、盆棚も拜みたう、序でながら參りましたが、まことに光陰矢の如し、御夫婦ながら、思ひ合うた新盆とは、これも變つた御緣づくでござります。

清兵　（ホロリとして）アヽ、お二人ながら若いに、ようマア寄つて下さりました。よもやと思ふと、夫婦の者が新盆に、月こそ變れ、日數は十日も經たず、あの世の旅へ二人連れ、今夜も娑婆へ夫婦の者、手に手を取つて、（ト思ひ入れあり）コレ、盆棚に菓子折がある。こゝへ持つて來い。ドリヤ薄茶でもたてゝ進ませう。

ト唄になり、清兵衛は臺子を取出し、茶をたてにかゝる。此唄へかぶせ、捨て鉦、蟲の音しきりに聞え、向うより六三、頬冠り一本差しにて、お園が手を曳き、出て來り、花道にて

六三　コレ、お園殿、こなたの實の伯父御福清殿の、別莊はこゝらか。

その　アイ、向うの軒に燈籠のかゝつた内が、わたしが伯父さん福清さんの寮でござんすわいな。

六三　アヽ、あの燈籠の、（ト遠目に見るこなしあつて）あの燈籠に附いたる紋は、釣菊に、たしか菊蝶。

その　（いろ〳〵見る事あつて）「循定院環春光阿禪昇居士、霜月廿九日」。

六三　アヽ、そりやこなたの兄御の連れ添ふ女中の戒名だの。

その　アイ、あの此方の「善春院達譽了玄居士、極月八日」あれがわたしの

六三　兄貴の戒名

その　ハイ。

六三　南無阿彌陀佛々々々々々。……アヽ、常から多病といふものゝ、よもや今年が新盆にならとは、うろたへた神樣も御存じあるまいに、その回向するわれとても

その　人をあやめて、明日知れぬ。殊に他人である事か、親身でなけれど姉といふ、一字の付いたばし

さん。

六三　殺して立退く身の罪科、今度あの世へ歸りには、わしら二人も道連れに、最期の場所は隅田堤、

手がゝりそれと知れながら、詮議のならぬ日蔭の身、あつて益なき此帛紗、其いひわけは二人が

書置き、福清殿へ届けた上（ト書置きを出す）。

その　二人一しよに死ぬる身の、せめて此世にあるうちに、回向致すは去年の冬、實の兄さん、又外に

いひかはしたる女中さん、いはゞわたしが姉さん同前、定めて伯父御の盆棚へ、二人仲よう睦まじ

う、蓮の臺の手枕も

六三　年に一度の魂祭り、今日は日蔭の二人づれ、敷居の峠越ゆるとも、せめて今宵の精靈へ、心ばか

りの

その　手向けとなるや生垣の、蔭ながら、御回向を、六三さん

六三　コレ。

ト思ひ入れ。時の鐘、唄になり、兩人は、窺ひ〳〵門口へ入る。矢張り蟲の音しきりにする。此うち清兵衛、薄茶をたてる事あつて

清兵　ほんに、二人に聞かうと思つた。今度の狂言は、世話事であらうの。

露鶴　ハイ、「お千代半兵衛」でござります。

清兵　アヽ、こりやよからう。慥かあの半兵衛は、人殺しであつたの。

少長　左樣でござります。半兵衛の人殺しは、此前、助高屋が致されました。

清兵　ほんに、さうであつたの。敵役を殺したあと、二人死なうと心中に、其道行きも、こゝらあたり

の地名の文句。どうでも派手な心中には、隅田川が色氣があつて、いつちよいて。

ト これにて門口の兩人思ひ入れ。蟲の音やむ。清兵衛思ひ入れ。

少長　モシ、親方へ、今まで鳴いたあの蟲が、一度に鳴きやみましたぞえ。

露鶴　ほんに、わたしも左様に存じます。なぜマア、あの蟲の音が
清兵　イカサマ、門火のあたりが映つたせゐか、どうしてマア。（ト思ひ入れ）。
丁稚　モシ、親方、忘れてをりました。先き程貸本屋が持つて參りました淨瑠璃本。
ト出す。清兵衛取つて
清兵　オヽ、こりや一八重霞浪花濱荻」婀娜なおしの新屋敷。おしと異名のある女、慥かに切られた
少長　ハイ、噂でござりまするて。
門口の兩人思ひ入れ。唄になり、向うより市川團車、頭取にて、羽織のなりにて、息せきと出て來り、
これにて門口の兩人顔を外けゐる。團車、胡亂らしく見て
團車　誰れだ。若い女のやうでもあり、二人連れで（ト目を附けながら、ズッと入り）　ハイ、御免なされ
ませ、頭取でござります。
露鶴　アヽ、團車さん、お出でか。
清兵　これは珍らしい。サア、此方へござりませ。
團車　これは旦那、此間は御無沙汰仕りました。モシ、お二人、お前方のあとを追うて、柳橋へ來て聞
いたところが、とうに行きなさつたとの事。それから三挺で急がせたところ、生憎汐時がわるく
て、ようくと今着けやした。武藏屋へ行つて聞いたら、此方へとの事。あとを追うて參りまし

た。モシくと、いつも中戸屋へござる御隱居が、二人のところへ、劍菱を片馬寄越しなさりやし
た。コレくと、此進上札を、明日お部屋へお貼りなされまし。
ト名代役觸れを出す。
少長　そりやアお氣の毒な、よくお禮申して下さりませ。ドレ、其札を見せなさい。（ト取つて開き見て、想
ひ入れ）。アヽコレ、頭取さん、こりやア二番目の役觸れだよ。
團車　ドレくと、お見せなされませ。（ト見て）成る程、こりやア淨瑠璃の名題役觸れ。ハテ、龜相し
たわえ。さぞあとで合役が尋ねてゐやう。ハテ、氣の毒な
露鶴　ハテ、お前も久しいものだよ。
團車　モシくと、旦那へ、お氣を附けなされませ。只今門口に、若い男と、慥か女と二人づれ。今頃は
えてあるやつでござりまする。油斷なされますな。
清兵　エヽ、そんなら門口へ、若い男が女を連れて、此家のまはりを。（ト思ひ入れあり）道理で庭に鳴
きつるゝ、千草の蟲の鳴く音さへ、一度にやむは、さては身寄りの兩人が、回向ながらによそな
がら、こゝへ便つて（ト思ひ入れ）。
丁稚　不用心なら、見て參りませう。
清兵　アヽコレ、言ひ附けもせぬに、何を差出た。客もあるに

丁稚　でも、お前

清兵　ハテ、捨てゝおきやいの。

ト これにて門口の兩人、嗤き、窺ふ。

圖車　モシ、旦那へ。ほんに此盆は、あなたの甥御樣の新盆でござりまする。

清兵　さうさ、若死をしようはしか、それは〳〵夫婦ながら、伯父の福清を、實の親より大切に、殊にとりわけ、夫婦仲が、よいが上に睦まじう。八百年も添ふやうに、コレ〳〵

ト 小袖箪笥の引出しより、誂への派手なる、銚菊と菊蝶の紋付いたる、男女二つの小袖を出し

春になつたら江の島參り、夏は湯治に、斯う〳〵と、役者衆の衣裳のやうな、對のなりなる派手小袖。ア、、若い時といふものは、後は噂も眞實に、女夫連れ立つ定業は、生れ附いたる誠の心中。……それに引きかへ、情けない、わしが爲には眞實の姪、言ひかはしたる男こそ、人をあやめて明日知れぬ。（トうか〳〵とせりふあつて、キッと氣を變へ）こりやア、折角遊びにござつたお前方に、不馳走な亭主振りだ。お話しの「お千代半兵衛」。此淨瑠璃の「お園六三」も、仕組みは同じ心中の、合へば異見を島の内、袖に涙を福島屋、島太夫の節附けは、ア、、又格別なものだなア。

ト 本を出し、表の方へ聞えるやうに、思ひ入れ。此時五つの鐘鳴る。皆々思ひ入れ。

少長　アゝ、あれは初夜でござりまする。もうお暇しませうかえ。

露鶴　お客は船でお待ちなされてゞあらう。もう參りませうわい。

清兵　これはしたり、馳走もなうて氣の毒な、とはいふものゝ、留められもせぬ客人と同道。そんなら又其うちにござりませ。よう回向に來て下さつた。

圖車　左樣なら、私しもお暇いたしませう。併し、お前方は船であらうが、わたしは山の宿に寄る所があれば、モシ、旦那、提灯をお貸し下されまし。

清兵　オヽ、お易い御用ぢや、コレ、其提灯を貸して進ぜうよ。

丁稚　ハイ〳〵。畏りました。

ト「五百崎福清」と書いたる小田原提灯を出し、渡す。

圖車　これは有り難い。明日早速お屆け申しまする。

清兵　これは頭取、今夜は假り宅かな。

圖車　イエ〳〵、眞面目な用でござります。ハヽヽヽヽ。

少長　左樣なら親方、其うちお目にかゝりませう。

露鶴　ちとお話しにお出でなされませ。

清兵　近いうちにたづねませう。氣を附けてござりませ。

屬車　サア、土手までは御一しよに參りませう。

清兵　ようござりました。

ト唄になり、めい〳〵提灯を持ち、送りの男先きに立ち、少長露鶴、あとより圍車は小田原提灯をともし、捨ぜりふ言うて入る。丁稚奥へ入る。此うち門口の兩人、ちよつと小隱れする。あと合ひ方。

清兵衛殘つて

清兵　ヤレ〳〵、若い衆といふものは、向島から堺町へ、隣り歩きをするやうに、ハテ、元氣のよい。

（トこなしあつて）オヽ、燈籠が暗うなつた。ドレ、油をつぎませうか。

ト誘への合ひ方になり、清兵衛は油つぎを出し、切り子燈籠へ油をつがうとする時、小さき差し金の蝶二疋、燈籠の灯を取りにくる。尤も此うち、そろ〳〵と兩人窺ひ出で來る。

清兵　オヽ、又小蝶めが火を取りに來をつたか。わが身を知らぬ蟲けらめ、飛んで火に入る夏の蟲。こらあたりを、まよ〳〵と、見附けられては科人の。心がらとはいふものゝ、可哀や二人は、アイヤ、二つの蝶も遂には命を……ナ、飛んで火に入る夏の蟲けらの、コレ、のがるゝだけは高飛びして、親類縁者へ、必ず悲しい……アイヤ、誠に人には命が物種。（ト二つの小袖を取つて）今は此世になき二人、せめてはおれが實のほど。ならう事なら生き殘り、先祖のあとを立てるが孝行。親にはとうに死に別れ、あとに殘つた此伯父が、便りといふはお園ばかり……

アイヤ、よそ事とのみ思うたが、お前方の若盛り、浮氣盛りの死ね死なう、其時辛抱したればこそ、若い二人があとを吊ふ。其逆さまに上乘りして、氣強い伯父を泣かすなよ。

ト表の方へ思ひ入れ。此時門口の二人、たまりかねて「ヨッ」と泣き落す。清兵衛恟りして

さてこそお園は

六三　モシ、よしなき六三に連れ添うて

その　兄の回向と二つには、お暇ごひを

清兵　ヤ。

六三　委細はこれに。

ト二人が書置きと、帛紗を添へて内へ投げ込む。清兵衛取つて

清兵　ヤレ待て二人。ソレ。

ト小袖二つを投げてやる。兩人外にて、めい〳〵取る。清兵衛書き物を取つて、短檠にかざす。

その　こりや兄さんの

六三　夫婦の曦れ着。

清兵　それも形見ぢや。

兩人　エヽ。

清兵「書置きの事」。……ヤ。

トどうとこける。木の頭。

両人　モシ。

ト手を合す。此仕組みよろしく、ひやうし

幕のうち、禪のつとめにてツナギ、引返し。

幕

大切　道行浮名の散書　常磐津連中

登場人物　大工、六三、實は小柴六三郎。福島屋娘、お園。梶川長兵衛。若林七郎助。般若の彌五。山姥の權。大工、猪之助。子分、長太。在所娘、おわた。

本舞臺、三間の間、一面の黒幕、下座の方へ少し橋の袂を見せ、手輕き飾り附け。すべて源兵衛橋の體。こゝに長太、權、彌五、夜鷹蕎麥を食つてゐる。蕎麥屋、箸や皿を方附けてゐる。靜かなる禪のつとめにて幕明く。

長太　こゝへ湯を一杯くれ。

蕎麥　ハイ〳〵。

權　コレ、蕎麥を食つても死にはしまいか。

蕎麥　なんのお前、そんな噂がござりますが、みんな嘘でござります。

長太　コレ、蕎麥屋、此道で、十七八な娘と、若い野郎を見かけやしなんだか。

蕎麥　イエ〳〵、そんな衆は

彌五　どつちへうせた知らん。

ト此うち蕎麥屋は道具を方附け

蕎麥　ハイ、これは有り難う。……蕎麥イ、〳〵。

ト呼びながら荷を擔ぎ、下座へ入る。

長太　サア、强勢腹がよくなつた。

彌五　大方あいつらは、お園が伯父の福淸の寮とやらに、うしやァがるだらう。

權　そりやァあの三圍りのか。（トいひながら下座を見て）コレ〳〵、あそこへ「福淸」といふ提灯がくるぞ。

彌五　ほんに、大方内の男だらう。とツつかまへてお園が事を

ト又靜〻なる禪のつとめになり、下座より圍車、前幕のなりにて、尻をはしより、「福淸」といふ提灯

を下げて、何心なく出てくる。

三人　待ちやァがれ。

團車　ハイ、、、、。

三人　べら坊め、何も怖い者ぢやない。

長太　コレ、わりやァ福清がところの男だらう。其方の内に、お園と六三がゐるであらうな。

團車　ア、、モシ〳〵。……成る程、提灯が提灯ゆゑ、さう仰しやらうが、私しは福清樣へ用があて歸り道、夜に入つたゆゑ、こりやァお借り申して參つたのでございます。内方の事は存じませぬ。御免なされませ〳〵。

三人　ナニ、嘘をつきやァがる。

團車　イエ〳〵。嘘ぢやござりませぬ。私しは堺町の頭取でござりまする。

三人　なんだ、頭取だ。

ト提灯のあかりにて顔を見て

權　ほんに、頭取の團車だ。

長太　おきやァがれ。（ト突き放す。此はずみに以前の役觸れを落す）何かおつこちた。

團車　ハイ、それは役觸れでござります。頭取座で急がしいまぎれに……モシ〳〵、どうぞこれへ

下さりませ。

長太　これがァノ、芝居で讀む口上か。

團車　左樣でござりまする。

三人　讀んで聞かせろ〳〵。

團車　とんだ事を、道中で

長太　讀みやァがらぬと、ぶッ挫くぞ。

團車　ハイ〳〵、讀みます〳〵。（ト觸れ書を受取り）「淨瑠璃名題、お園六三、道行淨名の散書、太夫常磐津兼太夫、三味線、岸澤式佐、相勤めまする役人、尾上松助、瀨川多門、澤村田之助、右の役人罷り出で相勤めまする。いよ〳〵此所淨瑠璃始まり、其爲口上左樣に……」。

ト、いひながら、いろ〳〵身支度して、雪駄を持つて、提灯を吹き消し、一散に向うへ逃げて入る。

三人　ハ、、、、、。

長太　併し、お園六三が道行きとは氣ざはりだ。眞崎の埼玉屋に、親方が待つてゐるであらう。

權　なんでもこれから手分けをして

彌五　おらァ、福清の内から、梅若の方を尋ねべい。

長太　そんならおいら二人は、小梅の方から錦絲堀

露光量違いの為重複撮影

權　見當り次第にお園めを
彌五　引つそびいて眞崎へ。
三人　後に逢ふべい。

ト矢張り時の鐘、禪のつとめにて、彌五は下座へ、權と長太は向うへ入る。ト、ゴンと時の鐘の頭。チョンと黑幕切つて落す。

本舞臺、三間の間、すッと前へ突き出して高き草土手。上の方に、大師堂道としるせし石の榜示杭、日覆ひより柳の吊り枝、うしろは浪の張り物。土手に添うて誂への屋根船。奥深に向う河岸を遠目に見せ、すべて向島土手の飾り附け、此道具に納まる。
ト矢張り時の鐘だらりにて前彈きにかゝると、チョン〳〵にて屋根船の簾を捲き上げる。
こゝに太夫三味線、羽織袴にて居並び、淨瑠璃になる。

〽昨日まで、かへすがへすも折柄を、御いとはせの文月も、今宵命を散らし書、それも誰れゆゑ秋鹿の、戀ひゆゑ身をも沈むらん。

ト合ひ方かすめ、時の鐘にて、花道より六三先きに、鈌菊の紋附いたる形見衣裳、一本差しにて、手拭ひの端を持ち、お園菊蝶の紋附いたる同じ衣裳にて、六三が手拭ひの端をとらへ、連れ立つて出てくる。すぐに淨瑠璃

露光量違いの為重複撮影

權　見當り次第にお園めを
彌五　引つそびいて眞崎へ。
三人　後に逢ふべい。

ト矢張り時の鐘、禪のつとめにて、彌五は下座へ、權と長太は向うへ入る。ト、ゴンと時の鐘の頭。チョンと黒幕切つて落す。

本舞臺、三間の間、ずッと前へ突き出して高き草土手。上の方に大師堂道としるせし石の榜示杭、日覆ひより柳の吊り枝、うしろは浪の張り物。土手に添うて誂への屋根船。奥深に向う河岸を遠目に見せ、すべて向島土手の飾り附け、此道具に納まる。

ト矢張り時の鐘だらりにて前彈きにかゝると、チョン〳〵にて屋根船の簾を捲き上げる。

こゝに太夫三味線、羽織袴にて居並び、淨瑠璃になる。

〽昨日まで、かへすゞ〳〵も折柄を、御いとはせの文月も、今宵命を散らし書、それも誰れゆゑ秋鹿の、戀ひゆゑ身をも沈むらん。

ト合ひ方かすめ、時の鐘にて、花道より六三先きに、銚菊の紋附いたる形見衣裳、一本差しにて、手拭ひの端を持ち、お園菊蝶の紋附いたる同じ衣裳にて、六三が手拭ひの端をとらへ、連れ立つて出てくる。すぐに淨瑠璃

〽お園六三は亡き人の、これも形見の曙れ衣裳、孤は釟菊の果敢なくも、枯れて空しき菊蝶は、法の花へはうつりゆく、其人事も明日は又、わが身に同じ死出の旅ところも西へ向島、草に浮き名を殘すとは、露白髭の森越えて

トよろしく舞臺へ來り

その　モシ、六三さん、仲のよかつたお二人の、此お形見にあやかつて、未來でお前と睦まじう添はうと思や、もう〳〵、こんな嬉しい事はござんせぬわいなア。

六三　言やればそれもそんなもの。去年の冬は、世上へバッと噂のあつた二人の衆、此新盆にならうとは

その　知らぬが佛のお國から

六三　今宵はゆかりの魂棚へ

その　お二人さんの連れ立つて

ト浮瑠璃になる。

〽手を引き合うて道行きも、去年の錦繪見るやうに、誰が浮瑠璃でしつぽりと、誠の床の假り枕、うらやましいぢやないかいな、思や此方も早うあの未來へ行つたら兄さんの、蓮の臺のお隣りへ、越していつまでも寢よとまゝ、叱り手のない

樂しみな、國で暮らすが何よりな、併し其時よそ〳〵に、面白い事出來ようかと、死なぬうちから女氣の、それが迷ひとかこつにぞ〳〵アヽじやら〳〵と何をマア、まだ行かぬ先き、氣を廻し、冥土の事をもう爰で、愚痴にも程のあるものを、さりとては又恪氣ぼう、そんな事では二世の世で、夫婦喧嘩の絶え間なく、ハレ盆體も内證で、兄貴が異見いはれうと、笑ふが泣くの盂蘭盆會〳〵折に勸化の小娘が

ト摺り鉦入りの唄、合ひ方になり、向うよりおわた、田舍娘、高端折り、手甲脚絆草鞋のなり、御先組の通りのこしらへにて、「木母寺念佛堂建立」と染めたる幟を持つて出て來り、花道にとまる

〳〵歸命長兵衞の、お方殿、麥搗き杵の數取りに、南無阿彌陀々々々々々、南無阿彌陀佛、仲を、とうゝそ柳腰、品やり、味やり、文をやり、南無阿彌陀佛何と鳴海の浴衣染め、手振り、袖振り、踊り振り、南無阿彌陀々々々々々、南無阿彌陀佛〳〵連れにはぐれて只一人　心關屋のおのが在所へ。

ト此文句にて、よろしくあつて舞臺へ來り、二人を見て

わた　モシ〳〵、ちと物が問ひたうござんす。今方こゝを、婆さん達の四五人連れ、關屋の方へは行かなんだかえ。

六三　イヤ、そんな衆たちは……ムウ、見れば勸化の幟を持つて、アヽ、こりや、盆だによつて、アノ江戸へ

わた　アイ。木母寺の念佛堂、江戸勸化に出た歸り、村の衆にはぐれたゆゑ

その　ほんに、年端もゆかぬ身で、ようマア殊勝に

わた　サア、わたしや去年の冬、大事な人に別れたゆゑ、菩提を弔らふ其爲に

その　わたしも別れた兄さんの

六三　又、二人がなきあとの

その　せめて追善供養にも、（ト思ひ入れあつて、簪を拔き）モシ、志し、上げませう。（トおわたへやる）。

わた　ヤア、アノ手の内にこれをかえ。……ほんに團扇にあるやうな、姉さんとよい男、こりやお前方、てつきりと

〳〵心中とやらで死ぬのかえ、コレ、ナア、モシ、そんな病ひにこちらが村の、酒の寒竹樣たんべ、所名うての生き藥師、かゝらしやるなら、ツイわしが、戻りについでにいひ附くべい〳〵畑の南瓜に女郎は人がの、いつか色づきやしめたがるえ、そこらでせな子が張り番だ、おや〳〵〳〵、なんとしよかの、唄を友なる夜の道、ちよこ〳〵歩み急ぎ行く。

ト よろしくあつて、おわた下座へ入る。兩人あと見送り

六三　まだわきまへなき小娘の、今の詞を聞くにつけ、福清殿のよそながら、先刻の御異見思ひ出し、こりやどうも一しよには

その　エヽ。（ト思ひ入れ）。

六三　サア、此六三は紛失の鯉魚の在所は知れながら、姉殺しの日蔭の身の上。詮議もならず、捨てねばならぬ此命。其方はあとに生き殘つて、兄貴に代り親御の家。……コレ、古いせりふと思やらうが、聞き分けてくれ、お園、さらばだ。

ト 立ち上る。お園驚き

その　アヽマア、待つて……コレイナ。

ト 引据ゑる。浄瑠璃

〽なせそんな事を今さらに、言はれるやうな仲かいな、朋輩がたの一所へ、よると役者や御家中の男の噂たびごとに、いつも小柴の御子息は、御器量よしと奥中の其評判にいとゞ猶、縁を結ぶの神さんよりも、無理な御願を堀の内、押し繪の額も御利益で、叶うた時の有り難さ、いはれぬ程の嬉しさを、お腹に宿すあひもなう。お身の難儀に町ずまひ、めぐり逢ふ瀬も憂き事の、つもりで死ぬる際とな

り、一人殘れとようもよう、むごい事をと取縋り、恨み涙の雨やさめ、〽流石男は目に泣かで、心で泣いて此上は、膝も叩かず、指さゝず、義理の數々打捨てゝ、一しよに死なん、こなたへと、聞くにも心も、いそ〳〵と

ト 蟲の音、一つ鉦になり、六三はお園の手を引き、立ち上がる。これより向うの遠見引き、道具を廻す。浄瑠璃

〽しかも此春、宿さがり、梅若さんの開帳へ、參りし折も此道に、散るとは知らぬ花ざかり、今宵は蟲に鳴かれ行く、哀れはなんと木母寺の、こなたに二人身を寄せて

ト 此文句のうち、靜かに舞臺を廻すと、遠見の飾り附け、眞崎の模樣になる。

六三　サア、こゝが命の捨て所。

その　覺悟はとうから

六三　お園

その　六三さん。

ト 手を取りかはす。浄瑠璃

〽見合す顏が名殘りかと、互ひに抱きつ抱きしめ、男女の仲々は、わりなき契りな

りけらし。

ト、チョンと黒幕にて浮瑠璃を消す。此時、下座より猪之助出て來り、兩人を見て

猪之　見附けた。六三、お園はおれが

ト お園へかゝるを、六三突き廻して猪之助を引き附け

六三　ムウ、うぬは猪之助めだな。われがこゝらにうせるからは、長兵衛や七郎助も、大方そこらにうせるであらう。鯉魚の詮議も科ある身ゆゑ、よんどころなく捨ておいたが、見かけたからは破れかぶれ。サア、二人の奴らはどこにうせる。（ト締め上げる）。

猪之　アイタ、、、、、。コレサ〳〵、七郎助は知らないが、長兵衛殿は眞崎に

ト六三の手を叩き落す。六三又引ッ捕へ

六三　待ちやアがれ。其長兵衛が眞崎の、うせる所へ、うぬは猿曳き。

その　そんならお前は

六三　命のついでに印子の鯉魚。おぬしはしばし福清殿へ。

その　必ず死ぬ事は

六三　二人一しよ。（ト猪之助振切るを、襟髮とつて）サア、行きやれ。

ト時の鐘の送りにて、お園、先きに、六三は猪之助を引摺り、向うへ走り入る。ト佃節になり、チョ

ン〳〵と草土手を跡へ引き附けると、舞臺一面の水船になり、チョンときつかけに、黒幕切つて落す。

一面玉椿の垣、上の方に石の鳥居、よき所に文塚。今の遠見の道具に納まる。トすぐに佃節にて、向うより七郎助を先きに、權と彌五出てくる。

七郎　コレ、親方はマアどこにぢやぞい。

彌五　サア、埼玉屋に飲みながら、わしらが吉左右を待つとの事ゆえ、あそこへ仕掛けて聞いたところが

權　船頭や若い者を連れて、飲みながら、稻荷の方へ出たとの事。

彌五　いかに月夜だといつて

七郎　サア、そんなら稻荷の方を尋ねて見よう。

と又佃節になり、三人舞臺へくると、鳥居の中より、長兵衛、楊枝をくはへながら、船頭若い者、銚子盃鉢肴なぞを持つて出てくる。

ヤア、長兵衛樣ぢやござりませぬか。

長兵　さういふは七郎助、何をマア今時分。

七郎　今時分どころかいの。お前から預つた品、聞けば聞くほど寐覺めのわるい代物ゆゑ、是非受け戻してもらはうと、精靈棚もほつたらかして、急がしいのに今日一日。

露光量違いの為重複撮影

長兵　サア、そりやア合點。大金にする代物ゆゑ、是非此方へ受け戻すが、何をいうても今はちつとも。サア、こりやアお前に戻しまする。

七郎　モシ〳〵、大金になつた時に受取りませう。此奴をわしが持つてゐては、まさかの折に縄が抜けぬ。

ト懐より鯉魚を出して長兵衛に渡す。

長兵　ハテ、氣の弱い。そんならこりやア、マア受取つて、大金にした其時に、（ト鯉魚を懐中する）。

七郎　われらへ屹度、利に利を添へて

長兵　そりやア、合點。……シテ、わいらはアノお園を

彌五　サア、手分けをして尋ねても

樽　さつぱり行くへが

二人　知れませぬ〳〵。

長兵　太方どこぞで六三めと。エヽ、いま〳〵しい。ついでくれ。

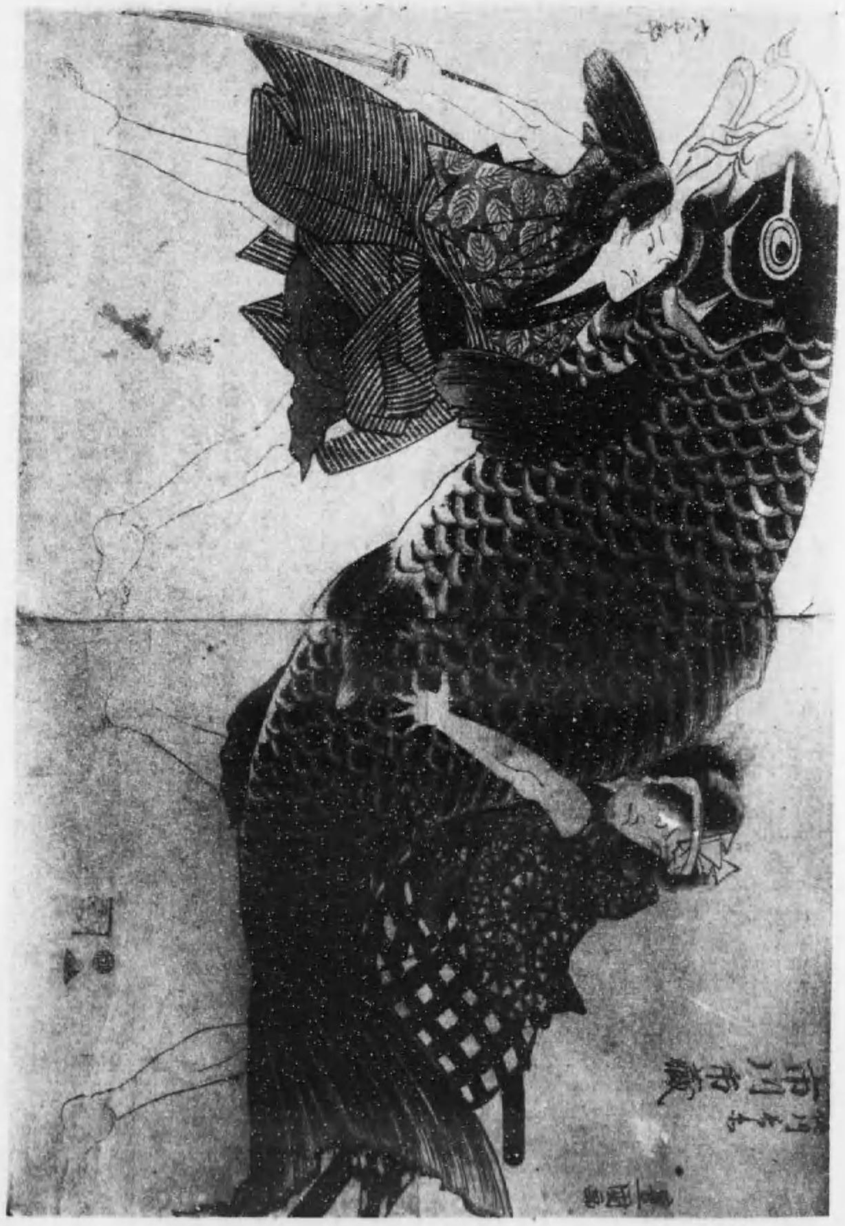
ト盃を取り上げる。側なりつゞ、ト又佃節になり、向うより六三、矢張り猪之助を引摺つて出てくる。

七郎助見附け

七郎　アレ、六三めが〳〵（ト思ひ入れ）。

長兵　ヤ〻

露光量違いの為重複撮影



長兵　サア、そりやァ合點。大金にする代物ゆゑ、是非此方へ受け戻すが、何をいうても今はちつと

七郎　モシ〳〵、大金になつた時に受取りませう。此奴をわしが持つてゐては、まさかの折に繩が抜けぬ。サア、こりやァお前に戻しまする。

ト懐より鯉魚を出して長兵衛に渡す。

長兵　ハテ、氣の弱い。そんならこりやァ、マァ受取つて、大金にした其時に、（ト鯉魚を懐中する）。

七郎　われらへ屹度、利に利を添へて

長兵　そりやァ、合點。……シテ、わいらはアノお園を

彌五　サア、手分けをして尋ねても

權　さつぱり行くへが

二人　知れませぬ〳〵。

長兵　大方どこぞで六三めと。エヽ、いま〳〵しい。ついでくれ。

ト盃を取り上げる。側よりつぐ、ト又佃節になり、向うより六三、矢張り猪之助を引摺つて出てくる。

七郎助見附け

七郎　アレ、六三めが〳〵（ト思ひ入れ）。

長兵　ヤ〻

ト思ひ入れ。六三は花道より皆々を見て

六三　長兵衛そこにか、七郎助、（ト猪之助を投げのけ、ッカ〳〵と來て）　ハテ、よくこゝにうしやアがつたな。（トキッとなる）。

長兵　姉のかたきを殺した六三

七郎　何しにこゝへ

皆々　うしやアがつた。

六三　オゝ、其わけは改めて、言ふに及ばぬ鯉魚の置き物、二人のうちにある事は、手紙で知れた寶の行くへ。サア、おれに、キリ〳〵渡してくりやれ。

長兵　ハヽヽヽヽ。押しの重たい二才野郎め。言ひ號けのあのお園、よんどころなく手を切つた、其意趣返しと思つたところ、うぬが方からうせたは幸ひ、こゝで方附け、お園は女房、さう思つてうしやアがれ。

六三　イヤ、印子の鯉魚をおれに渡せ。

長兵　疊んでしまへ。

皆々　合點だ。

ト矢張り佃節になり、花々しき色々のタテの道具にて、六三に打つてかゝる。立ち廻り、よいキッカケ

に「どつこい」ト詰への鳴り物になり、これより六三皆々を相手に、面白き水のタテ、いろ〳〵とあつて、水船へ一々切り倒し、七郎助を切り下げる。うしろより長兵衛「ムウ」と切つてかゝると、又鳴り物變つて、見事なタテ樣々あつて　トゞ長兵衛の懐より鯉魚を引き出し

六三　こりやコレ、尋ぬる

長兵　何を小癪な。

ト爭ふはずみに鯉を水船へ落す。

六三　ヤヽ、大切な印子の鯉

長兵　水の深みへ。

ト兩人思ひ入れ。此時大ドロ〳〵　早笛になり、今の鯉、丈あ　鯉　り　水中に現はれる

兩人これをキッと見て

六三　ヤヽヽヽ、印子の鯉の忽ちに

長兵　丈餘の鯉魚と變ぜし不思議。

六三　何はともあれ、ソレ。（ト水船へ飛び込まうとする）。

長兵　イヤ、われには

ト引き留める。ちよつと立廻り、長兵衛をポンと當て、六三「ソレ」と水船へ飛び込み、此鯉魚と立廻

り、鯉は舞臺へ刎ね上る。六三續いて飛び上り、鯉を取らうとして刎ね返される事あつて、よう〳〵に鯉を抱きとめ、其儘白刃を鯉の眼に突き立てる。大ドロ〳〵、此時長兵衛起き上つて

南無三、それを。

トかゝるを突きのけ

兩人　どつこい。

トしやんと見得。

まづ今日はこれぎり。

めでたく

打出し

四天王寺縁起

くきやうだいあやめかたびら

句兄弟菖蒲帷子

發端　夢の場

登場人物　木幡屋丁稚、長吉。木幡屋娘、お君。木幡屋手代、伴七。男達、梅の由兵衛。

本舞臺、三間の間、三圍り堤。うしろ、稲荷の鳥居の笠木を見せ、向う黒幕、所々に立ち樹、舞臺前浪板、しがらみ、枯れ葭、右の道具へ一面に雪つもり、雪颯し、本釣り鐘にて、しめやかに幕明く。トすぐに唄浮瑠璃。

〽花も雪も、拂へば清き振り袖ち、嫁入姿と白妙の、道踏み分けて木幡屋を

トヤ張り本釣り鐘、右の合ひ方、バタ〳〵にて、向うよりお君、白振り袖、丸綿、祝言のなり、バタ〳〵に駈けて出て來り、花道にて爪づき、振り返り、こなしあつて

きみ　アヽ、嬉しや、誰れも追ッ手は來なんださうな。ほんに恨めしいは母さん。此身に得心もさせず、いやな男と今宵の祝言。變替へせうにも、父さんはお心よし、無理往生の盃いやさ、裏の切り戸から忍び出て、こゝまで走つて來たが、折わるう雪は降る。こゝはマアどこぢややら。それにつ

けても、此長吉は何してゐやるやら。宵にちやつと逢うて、斯う〳〵しやと耳打ちも、人目の關のあとやさき、大概推して來てくれたがよい。死ぬる覺悟はきはめてゐても、どうやら怖い事ではある。逢ふは否なり、思ふはならず、まゝならぬ浮き世とは、よう言うたものぢやなア。

〽忍び出雲の依怙贔員、結びの神も胴慾と、怨みかこちて娘氣の、つもれば消ゆる心根と、跡おふ風も雪あかり。

ト お君本舞臺へ來て、少し振あつて、又本釣り鐘、バタ〳〵にて、向うより長吉、誘へ丁稚のなり、紺の中風呂敷をかむり、走り出て、花道にて思ひ入れあつて、すぐに本舞臺へ來り、行きあたり、兩人惚りして顔見合せ

長吉　お前はお君樣。

きみ　待つてゐた、待つてゐたわいのう。（ト取附き泣く）。

長吉　モシ、お前もお嗜なみなされまし。どこの國にか、今宵聟の甚太郎樣と祝言の間際。ソレ、白の形、丸綿で、斷落ちするといふやうな、滅相な事がありませうか。もう何もかも手番ひ揃うて、お前が見えぬと内は亂騷ぎ。聟樣も上下のなりで、太鼓に出るところ。てつきり此道と存じますから、跡追うて參りました。サア〳〵、早うお歸りなされませ〳〵。

きみ　アレ、長吉、そりや何言やるぞいの。歸る位ゐなら、走つては出ぬわいのう。

長吉　そんならどうあつても

きみ　これもみんな、わが身ゆゑぢやわいのう。

長吉　エヽ。（ト思ひ入れ）。

きみ　エヽとは聞えぬ。忘れもせぬ此秋の、月見の夜、内は祝儀の酒盛も、わしと其方は下戸ゆゑに、二人端居の蟲の音に、誰が松蟲と言やつたを、わしや其方をと言うたが緣。あのゝものゝと、ッイ其時。

長吉　アモシ、ありやついした時のはずみ。それをマア滅相な

きみ　イヤ〳〵、それぢやによつて、外の男を持つ氣はない。

長吉　ぢやと申して、それではわたしがわる智慧を

きみ　惡名とつて死んでも

長吉　すりや、どうあつても

きみ　祝言の夜の白無垢が、冥土へわしが曠れ小袖。

長吉　アヽ、不拙かなわたしでも、それほどまでに

きみ　女子の操。長吉

長吉　お君樣

きみ　悪縁ぢやわいのう。（ト取附き、思ひ入れ）。

〽丁度調子も三昧線の、いとしお前の前髪の、長き契りもわしがこの、直さぬ額に

此まゝに、見たり見せたり離れじと、互ひに手に手とりの聲。

ト兩人振あつて

長吉　成る程、さういふお心なら、所詮留めても留まるまい。いかにもわしも死にませうが、一しよに死んでは主殺し、此長吉は所を隔て、お目にかゝるも冥土の道。

きみ　いや〳〵、疑ふではなけれども、こゝを退きやるとひよつと又。

長吉　逃げでもしようと思うてか。

きみ　さうではなけれど。

長吉　此長吉も男のはし。

きみ　男なら、コレ、（ト懐より剃刀を出して）持つて來た此剃刀で、わしを殺してたも。

長吉　（留めて）ハテサテ、それでは。

きみ　イヤ、一しよでなけりや（ト振り切るを）

長吉　ハテ、疑ひ深い。（ト抓る、いろ〳〵ある）。

〽ないてゆうべの仇枕、戀ぞつもりて淵と瀬に、變る浮き世のまゝならぬ。

ト此うち向うより由兵衛、鷺と烏の形、錠をおろせし頭巾をかむり、傘を持ち、足駄にて出て來り、花道にて此體を見るより、ツカ〳〵と舞臺へ來り、兩人を突きのけ

由兵　待つた。こりや何をするのだ。

長吉　ヤア。

と由兵衛を見て、逃げようとするを引きとめ

由兵　雪あかりで見りやア、一人は若衆、こちらは又白い着物を着た娘、臆病者が見たならば、雪女とも夜更けの此體。ハゝア、こなた衆は心中だな。

長吉　アゝモシ、なんのわたしらは

由兵　イヤ、隱すまい。思ひ中にあれば、色現はるゝこなたの着物。言はずと知れた否な婚禮。夫を嫌うて駈落ちの、つまらぬ事の無分別とは、看板打つて知れてある。

長吉　サア、それは

由兵　なんと違ひはあるまいがの。

長吉　サア、さう推量の上からは、隱しやうはございませぬ。成る程、そこにござるのは、旦那の娘御、今宵の祝言を嫌うて駈落ち。

きみ　まゝならぬ浮き世を恨み、浮き世に秋の二人が身の上、どうぞ見のがして

由兵　殺してくれろか、そりやならぬ。

きみ　エヽ。

由兵　サア、夜目遠目にも苔みの花。ハテ、高が色事、添ふ、添はれぬのいきさつぢやごんせぬか。

きみ　サア、それぢやけれど

由兵　それに死ぬとは、心の狭い無分別。たとへ添はれる義理づくでも、二人に誠さへあつたなら、白い黒いは神が見通し。（ト二人の姿を見て）白い黒いといへば、娘御の形は白し、お若衆の風呂敷を着た所は、とりも直さず鷺と烏。

長吉　エヽ、

由兵　なんと、いゝ見立てぢやアごんせぬか。

ト謎への合ひ方。両人も由兵衛の形を透し見て

長吉　成る程、さう仰しやれば、ソレ、お前も

きみ　鷺と烏の其着物。

由兵　ほんに、これについちやア、お前方にいゝ異見話しがある。わしも小二才の時分、ちつとした意氣張りで、死なうと覺悟きわめたを、のがれぬお人にとゞめられ、異見交りに其人の狂歌。「烏羽玉の、髪も老いては白鷺の、何か浮き世をあらそひの杉」と言はれた。成る程、朝顔の日蔭を

待たず、夏の蟬の春秋を知らぬ。はかない浮き世に、立つ立たぬとの爭ひの心をやめいと諫められ、思ひとまつたばつかりに、これまで生き長らへしも、其お人のお庇と、今に其狂歌は頭巾に縫ひ入れ、忘れぬ爲の心の錠前。又、鷺と烏のたとへの御恩に、着る物の模樣に附けるも、忘れぬ心……こなさん方もその通り、親兄弟衆もあらうが、コレ、此烏は反哺の孝というて、養はれた事を養ひかへす此烏。また、此鷺は、禁裏樣の御意に隨ひ、五位の位ゐを得たとやら。さすれば烏ですら、親兄弟目上の人には隨ふ習ひ。今宵の仕儀も、どういふわけか知らねども、古いやつだが、死んで花實は咲かぬぞえ。命が物種、生きてゐたなら又やがて、添はるゝ事もあらうわさ。ハテ、井の頭も、玉川も、流れの末は大川で、一つになるぢやごんせぬか。

ト思ひ入れ。両人もこなしあつて

長吉　成る程、見ず知らずの私しどもに、御深切に其御異見。其お詞に任せ

きみ　アヽコレ、そんなら

長吉　ハテ、御異見に附いて、一旦こゝを、ナ、（トいろ〳〵仕形にてのみこませ）マア、お歸りなされませ。

きみ　成る程、死ぬる思ひをとゞまつて、お詞に隨ひ、歸りませう。

由兵　すりや、わしが異見を聞き分けて

きみ　サア、あと／＼で一遍の回向……イヤ、一遍のお禮の爲

長吉　どうぞあなたの名所を

由兵　アイヤ、そりや言はぬ。又其方も聞ぬが、此場の花。

長吉　そんなら此儘

由兵　早うござれ。

長吉　ハイ。

ト行かうとするところへ、地廻りの若い者四人ズッと出て

○　ヤア、斷落ちした不義者めら

△　内から頼まれ、捕へに來た。

四人　動きやアがるな。

長吉　すりや、二人のわけが、もう旦那樣へ知れて

×　知れた事だ。動きやアがるな、サア、うしやアがれ。

ト引ッ立てるを、由兵衛兩方へ投げのける。四人悔り、由兵衛を見て

四人　ヤア、邪魔するうぬは

由兵　オヽ、道通りの出合ひ頭、無禮な事を、見てゐぬ氣性。

四人　さう言や、うぬから

ト かゝる。立ち廻りのうち

長吉　お君樣、

きみ　長吉。（ト手を引き合ひ）南無阿彌陀佛。

ト川の流れへ飛び込む。水煙り、浪の音。由兵衛見て

由兵　ヤヽヽヽヽ、すりや、どうあつても、二人は心中

四人　くたばるからは、邪魔したうぬから

由兵　エヽ、コレ、うぬらがうせたばつかりに、眼前二人を見殺しに……何爭ひて、異見の狂歌も

四人　破れかぶれとぬかすのか。

由兵　二人は連れ立つ冥土の旅。（ト又立ち廻り）。

四人　其道連れに、うぬも一しよに

由兵　オヽ、今を始めの旅ごろも

四人　何を

ト又立ち廻り、双方へ投げのけ、頭巾を引ッたくり

由兵　ヨイヤマカショトナ。

ト尻をりんとからげる。曲撥になり、四人よろしく見得にて、此道具ぶん廻す。

本舞臺、九尺の圍ひ、こゝに蚊帳吊つて、屏風を立て廻し、短檠を前に置き、すべて橋場の寮、夏景色の庭、よろしく合ひ方、時の鐘にて道具とまる。

ト日覆ひより本魂ぬ、薄ドロ〳〵にて引き下すと、蚊帳の中より、バタ〳〵にて、長吉寢卷きのなりにて走り出る。あとよりお君、寢卷き姿にて走り出てくる、尤も夏衣裳。

きみ　長吉や〳〵。（ト尋ねる心）。

長吉　ヤ、お前はお君樣。

きみ　長吉、無事でゐやつたかいのう。（ト縋り附く）。

長吉　モシ、お前、おそはれなされましたな。

きみ　サア、所はたしか三圍りの、殊に雪の夜、いやな男に祝言がいやさに、駈落ちしたら、其方も來て

長吉　二人一しよに死ぬ覺悟。ところへよその人が見え、鷺と烏の異見の引き事。

きみ　嫁入り衣裳を見立て、目上の人の詞を聞けと、わしへの異見。

長吉　烏に反哺の孝とやら、わたしへ敎へは一人の姉、孝をつくせといふところへ、心は附けど死神の

きみ　誘はるゝ身か、手に手を取り

長吉　隅田川へ身を投げしと、

きみ　恟り、目覺めて見れば、こゝは、

長吉　矢ッ張り内の橋場の寮。

きみ　長吉、

長吉　お君樣、

きみ　そんなら今のは

長吉　夢であつたか。

きみ　アヽ、怖い事であつたのう。

伴七　お君さん〳〵。どこへ行きなさつた。

ト奥で聲する。これにて長吉、短檠のあかりを吹き消す。時の鐘、合ひ方にて、手代伴七、帶ほどけ、枕紙を頭へつけ、探り出て

これさ、お君さん、もうわるい事はしないわな。コレ〳〵。（トいろ〳〵思ひ入れあつて）アヽ、お君さんを此橋場の寮へ連れて來て泊めたのも、夜更けて日頃の本望とげようばつかり。來て見れば、寢所にはゐぬ。ハテ、合點のゆかぬ。（ト下帶の間より鼻紙袋を出し、中より紐の附いた鍵を取出し）ほんに、思ひ出した。此間烏越の鍛冶屋に誂へ、こしらへさせた金簞笥の合ひ鍵。折を見合せ、

内の金を……併し、邪魔な物を持つて來た。それはさうと、お君さんはどこへ行つた。

トだん〳〵庭へ下りる。此うち、上手より犬這ひ出てくる。伴七犬の頭を踏む。犬はワンと飛び附く。

エヽ、べら棒め、内の者を吠えやアがる。シッ〳〵。

ト氣味わるがる。長吉うしろより鍵を引ッたくる。伴七悔りし、飛びのく。チョンと木の頭。お君は長吉を抱く。

人のやうな畜生めぢや。

ト鍵を尋れる。双方よろしく、ひやうし

幕のうち、ゴン〳〵にてつなぎ、すぐに引ッ返す。

幕

序幕　兩國の場

登場人物　男達、梅の由兵衛。船頭、金神長五郎。若黨、加川和源次。木幡屋手代、伴七。源兵衛堀の源兵衛。木幡屋丁稚、長吉。辻八卦新柳、實は三島隼人。山伏、奇妙院。藪醫者、久庵。芳村屋伊八。研屋、佐助。木幡屋聟、甚太郎。曾根段五郎。鍛冶屋、鐵右衛門。由兵衛女房、小梅。木幡屋娘、お君。奥女中、妻木。藝者、芳村屋お

辰。青柳女房、おさみ。藝者　芳村屋お兼。青柳下女、おみち。

本舞臺、兩國の體。正面水茶屋、此上の方に髪結ひ床、暖簾かけ、此前に辻八卦の臺、傘をさし、新柳占ひしてゐる。茶見世の床几に、芳村屋伊八、藝者屋の親方にて、腰をかけ、莫のんでゐる。茶見世の女、茶を汲んでゐる。仕出し、占ひの店の側と、床几に腰をかけてゐる。力持ちの鳴り物の中へ、飯離れての唄にて、賑やかに幕明く。

ト東西より仕出し大勢出て行き違ふ。此中へ向うより妻木、屋敷女中のこしらへ、日傘をさし、和源次、若黨のこしらへにて附き添ひ、中間一人連れて出て、花道にて

妻木　なんとマア和源次、お國元とは格別、賑はしい事ではないか。

和源　左樣でござります。此度奥樣の御用向きにて、妻木樣の御出府。お供にさゝれまして此和源次も、目の正月を致しまする。

妻木　幸ひなあの茶見世。休息して行きませう。

和源　マア〳〵、お出でなされませ。

ト右の鳴り物にて、本舞臺へ來て、腰をかける。娘は茶を汲んで出す。

伊八　あねえ、おらがところの子供はまだ見えなんだか。

娘　イエ、お辰さんはまだお見えなされませぬ。

伊八　青柳から迎ひが來た筈だが、莨入れを忘れて行つたから、こゝへ寄つたら屆けてくんな。

娘　おッつけお出でなされませう。

伊八　其うちざつと髭を剃つてもらはうか。オーイ、龜公はゐるか。

ト髪結ひ床の前へ來ていふ。中より髪結ひ出て

髪結　こりやァ伊八さん、

伊八　今すいてゐるか。

髪結　丁度いゝ間だ。

伊八　そんなら一つ賴まう。

髪結　サア、來なさい。

ト兩人床の中へ入る。

○　あの天眼鏡は水晶ではあるまい。

×　イヤ、本玉でなければあのやうにはうつらぬ。

△　占ひ者も、いろ〳〵な道具がいるものだ。

ト十二銅置いて、捨ぜりふにて仕出し下座へ入る。

新柳　ヤレ〳〵、今日は大變人があつてホッとした。ドレ、茶見世で一服致さうか。

ト編笠を取る。妻木と顔見合せ

妻木　ヤ、、お前は、

新柳　奥女中妻木殿。和源次も同道めされたか。

和源　三島隼人樣、一別以來、お久しうござりました。

新柳　さて〳〵、思ひもよらぬ所でお逢ひ申した事でござる。シテ、妻木殿には、何用あつて此江戸表へ

妻木　されば、此度、奥樣の御秘藏遊ばされまする幣田のお膳、香具屋方へ磨きを申し附け、猶又隼人樣へ、奥樣よりの御内意。

新柳　ナニ、拙者に御内意の儀とは。

妻木　イヤ、折入つて申さねばならぬ事。ノウ、和源次

和源　ナニサマ、こゝはかけ離しの往還なれば

妻木　幸ひ今日は、私しが伯父、木幡屋佐二兵衛と申す、並木の道具屋より私しをもてなし。

和源　向う兩國の青柳と申す茶見世に、終日お出でなされば、まづ御同道申したく。

新柳　併し、拙者も、今は御覽の通り辻八掛の占屋、此姿で御同伴も。

妻木　ナニ、苦しうない。人も知らねば、矢張り其儘。

新柳　さりながら、ちと待ち合す仁もあれば……マ、、それは後刻、すぐにこれより

妻木　隼人樣、

和源　御一しよに

新柳　御同伴致しませう。

ト力持ちの鳴り物、大阪離れての唄になり、三人下座へ入る。向うよりお辰、お兼、藝者のなり、お
さみは青柳の女房のなり、びん助、萠黄の風呂敷に三味線を包み脊負ひ、久庵、撫で附け、藪醫者のこ
しらへ、あとより源兵衛堀の源兵衛、庭造り、股引きなはき、木鋏と辨當箱を三尺帶にてからげ、肩
にかけ出て來て

源兵　久庵様、どこへござりました。嬶郷な道連れでござりまするな。

久庵　オヽ、源兵衛堀の源兵衛、仕事に行つたのか。

源兵　今日は靈岸島へ、庭をこしらへに行きやした。お前には話したい事もあり。よい所で逢ひました。

たつ　お兼さん、わたしはあそこで、少し待ち合して、此びん助を、ちよつと遣りたい所がござんすが

かれ　そりや、わたしが一しよにゐるによつて、あそこの茶見世へ行て、どこへなと遣りなさんせ。

びん　お辰さん、今の返事を聞いて來まするのかえ。

たつ　あそこにゐるうち、ちやつと行つて來ておくれ。

さみ　そんなら、久庵様も、マア、あの茶見世で

久庵　源兵衛先生、貴様も一しよに

源兵　一服のんで行きませうか。

ト右の鳴り物にて、皆々本舞臺へくる。お辰お兼久庵源兵衛、床几へかける。揚弓の音。娘は茶を持
つて出て

娘　お辰さん、此間はお目にかゝりませぬ。

たつ　おさがさん、最前こゝへ、彼のお人は見えなんだかえ。

娘　イエ〳〵。まだでござりますわいなア。

たつ　そんなら、びん助、今いうた所へ、ちやつと行つて來ておくれ。

かれ　大方、代地の内にゐてゞあらうぞえ。

びん　そりやア、わつちが承知してゐるよ。

さみ　早う行て來なさんせ。

びん　アイ〳〵。

ト下座へ入る。久庵こなしあつて

久庵　源公、見さつし、こゝにゐるのが芳村のお辰、此邊での藝者の本玉、綺麗ではないか。

源兵　ハヽア、そんならお前が芳村のお辰さんかえ。わしは源兵衛堀の植木屋、源兵衛といひますが、
久庵様とは、日頃懇ろ合ひ、よいところで近附きになりました。

たつ　お前さんのお名も、とうから聞いてをりまする。お心安うなされて下さいまし。

源兵　久庵様、お辰さんと連れ立つてござりましたは、曾根段五郎様の

久庵　貴様に話したいといふは、段五郎様が、頼みたいといはれた事があるゆゑに。

源兵　段五郎様とは、此間から間違つてお目にかゝりませぬが、お前も知つてござります通り、植木屋でも、まんざら御縁日に擔ぎ出すといふやうな、面倒な事が嫌ひで、たま〳〵屋敷方へでも手入れに行くばかり、いはゞ、無職同前、商賣向きの外なら、何でも頼まれて進ぜまする。

久庵　イヤモウ、商賣の外用なら頼まれるとは、此久庵なぞも、病人なれば餘所へお見せ下されぢや。さういふ氣なら、何でも頼み甲斐があるてや。

源兵　わしも段五郎様には、ちつと話したい事もあるし、込み入つたわけなら、ツィこゝでも

久庵　成る程。愚老もちつと元柳橋に用もあり、そこまで一しよに行く氣はないか。

源兵　どうでもようござります。

久庵　コレ〳〵、おさみ、段五郎様のござるまで、こゝに待つてゐてやつたがよい。愚老もちやつと行てくるというて下され。

さみ　アイ〳〵、承知でござります。

久庵　ヨシ〳〵、源公、サア、歩ばッし。

ト辻打ちになり、久庵、源兵衛連れ立つて下座へ入る。お辰思ひ入れあつて

たつ　お兼さん、いま久庵が源兵衛にいうた事、ありやわたしが事と思ふわいなァ。

かね　大方さうでござんせう。あの源兵衛といふは、人の知つたわる者づきあひ。油斷はならぬぞえ。

たつ　それに附けても、あの長五郎さんは、あれほど言うて上げたのに、何してゐなさんすやら。

さみ　あのぴん助どんも、又道草をしてゐるかいの。

娘　長五郎さんは、いつも米澤町の船宿にゐなさんすが、ちやつと見て來て上げうかいな。

たつ　そんならどうぞお世話ながら、お前ちよつと

娘　ツィ行て來て上げませう。おさみ様、見世をお頼み申しますぞえ。

ト辻打ちにて下座へ入る。と向う揚げ幕にて法螺貝を吹く。

大勢　なアまいだんぶ。

ト始終辻打ちになり、向うより鐵右衛門、職人の形にて、青竹に御幣を澤山附けたる梵天をかたげ、若い者大勢御幣を持ち、鈴を振り、あとより大勢附添ひ、塗樽をさしになひ、あとより奇妙院、法印にて、篠懸をさげ、法螺の貝を持ち出て來て、花道にて

大勢　オイ、鐵や、しつかりだぜ〳〵。

鐵右　一人で此位ゐな物はおかつたるいわえ。橋臺までおれが持つわえ。

奇妙　今日は町内の新禱で來ましたが、わしも近いうちに妙義へ立つので、若い衆を頼んで、何やかやの御新禱、どなたも御苦勞でございます。

鐵右　なんでも、天氣はよし、町内の衆も世話甲斐があつて、おいらまで心持ちがよいわい。

大勢　サア〳〵、早く、やりませう〳〵。

鐵右　南無阿彌陀ンぶ。

大勢　なアまいだんぶ。

ト矢張り辻打ちに法螺の貝にて、本舞臺へくる。奇妙院、髮結ひ床の側へ來て

奇妙　龜公、急がしいか。新禱垢離だ〳〵。

大勢　龜公々々。

髮結　（出て）アイ〳〵、垢離か。どなたも一服のんでござりまし

鐵右　これからもう一遍向う河岸へ行くのだ。龜公、一しよに行かないか。

髮結　際なうち、一しよに行きませうか。

大勢　さうしやれな〳〵。

鐵右　イヤ、ちつとも早く垢離場へ、やッつけろ〳〵。

奇妙　それがようござる。御苦勞ながらやりませう。

髮結　鐵や、何だかいゝ匂ひがするわえ。

鐵右　頭を見や、此梵天よりたんと挿してゐるぜ。

ト お辰を見て、仇口を言ふ。

髮結　鐵や、しつかり持つて。ころんぢやア、うまらねえ。

鐵右　ナニ、駒下駄をはいても轉びはしない。サア〳〵、やらかさう。

ト奇妙院法螺を吹く。お辰皆々こなし。

大勢　なアまいだんぶ。

ト始終辻打ちにて、わや〳〵言ひながら皆々下座へ入る。あとにお辰こなしあり。

たつ　お衆さん、今のうちそこらに長さんはゐてか、見て來ようではあるまいか。

かれ　ほんにそれがようござんす。（ト向うを見て）アレ〳〵、向うへくるのは、段五郎さんぢやないかいな。

たつ　ほんに、見附けられぬうち、柳橋の方へ。

かれ　サア、ござんせいなア。

ト辻打ちにて、皆々下座へ入る。ト向うより段五郎、着流し大小、中間を一人連れ、あとより伴七、手代にて、甚太郎、人柄のよき息子のこしらへにて、連れ立ち出て

伴七　段五郎様、又青柳でござりまするか。

段五　木幡屋の伴七、おぬしが連れ立つたのは

伴七　即ちこれが、私し方の聟養子、甚太郎と申しまする。

甚太　かね〳〵伴七がお噂申しました、曾根段五郎様でござりまするか。

段五　伴七とは毎度入懇に致す。以後は貴様も心やすく

甚太　御用向きもござりますなら、何事によりませず、お願ひ申し上げまする。

段五　イヤ、彼れ是れと頼む事もあらう。伴七、幸ひなところ、話しもあれば、あの茶屋へ

伴七　マア〳〵、お出でなされませ。

ト三人本舞臺へくる。下座より研屋の佐助出て

佐助　オヽ、これは段五郎様、よい所でお目にかゝりました。

段五　研屋の佐助、道々噂して参つたところぢや。

佐助　此間、伴七様のお頼みゆゑ、承りました、しのき藤四郎の守り刀。

段五　これサ……靜かに言やれ。（ト揚弓の音）。

伴七　イヤ、誰れも外に遠慮はなし、此甚太郎も、仲人は外にあれど、佐助の世話で聟の橋渡し、何を

お話しなされてもお氣遣ひはござりませぬ。

甚太　佐助殿、わしは誰れかと思ひました。生れ附いて遠目がきかぬゆゑ、挨拶もしませぬ。イヤモシ、

段五郎様、私しに少しも御遠慮なされまするな。

段五　それなれば氣遣ひはなけれど、有りやうは國許から、仔細あつてひそかに持ち参つた、しのき藤四

郎、なるたけ穏便に取計らふ氣。シテ、買ひ手の相談は出來たか。

佐助　さればでござります。どこへ見せましても同じ値打。トヾ二百兩と相場が立ちました。

伴七　佐助殿、急に賣拂ひたい代物なれば、二百兩でも大事ないが、貴様も骨折代を取る氣であらうし

此伴七も、口入れした口錢、あのゝもののゝで、賣り主の手取りは僅か。ナア、モシ、段五郎様。

段五　イヤ、相場の極つた事ならせう事がない。少々の謝禮は、此方でも承知でをるが、買ひ手によつ

て、此方も料簡がある。

佐助　成る程、其買ひ手は、さるお大盡、持ち主のお名はと尋ねられましたゆゑ、いゝ加減に商ひ口を

言つておきました。

段五　然らば急々に賣拂うてもらひたい。

佐助　イヤモウ、御承知の上は、明日にも金子を受取つて差上げます。即ち今日も此通り、腰に差し

て参りました。（ト腰より出して見せる）。

段五　出來れば其金でお辰が身受け、手附けは先達て五十兩渡しておいた。（ト懐より手附け證文を出し）

此通り、親方の受取りを取りおいた。後金さへ遣はせば、すぐに身共が引取る。萬事の骨折りは
きつと禮に及ぶであらう。

伴七　わしも其分け口をもらひまして、内のお娘に……イヤ、内のお娘御は、近々に御婚禮。ナア
申し、甚太郎樣。

甚太　イヤモウ、おれは其婚禮を待ち兼ねてゐるて。

佐助　兎角色の世界。木幡屋の婚禮が調へば、口をきいた此佐助も悦びといふもの。

甚太　なんでも急に、取急いでもらはねばならぬ。

段五　急といへば、久庵めは何をしてゐる事か、堅く兩國に待合してゐると申したが。

伴七　お前樣の思惑をうけて、こゝに待合す筈。尋ねがてら、そこらをブラ附いて見ようではござりま
せぬか。

段五　どうで青柳で落合ふ筈。佐助も一しよに。

佐助　わしも代地へ參つて、此一件を方附けて參りませう。

甚太　伴七、おぬしには話しもある。

伴七　ハテマア、段五郎樣とそこまで御一しよに。

甚太　左樣なら段五郎樣、

段五　サ、、來やれ〳〵。

ト辻打ちになり、此人數下座へ入る。トすぐにお辰、お兼、おさみ出で來り

かれ　お辰さん、お前は長さんに逢うて此間の話し、とつくりと言ひなさんせいなア。

たつ　サア、それでわたしも、こゝに待つてゐるわいなア。それに附けても日頃から、わたしの身の上
の世話して下さんす、梅の由兵衛さんに、身の上の事も話さうと思うてゐるのぢやわいなア。

さみ　昨日もこゝへ見えてゞござんす。

たつ　マア、こゝでちつとの間、待合さうわいなア。

トこなしある。輕業の鳴り物になり、向うより小梅、世話女房のこしらへ、日傘をさし、供男風呂敷
包みを下げ、附いて出て、舞臺へ來り

小梅　オヽ、お辰さん、どこへござんすのぢや。

たつ　小梅さん、今お前の噂を言うてゐたところで、お目にかゝりましたわいな。

小梅　わたしも今日は、こちの人が此間、梅澤まで旅がけにござんして、今日あたり戻らるゝ筈ゆゑ、
迎ひがてらに參りました。お前には聞きたい事もあり

たつ　さいなア、いろ〳〵と話しもあり。さうして由兵衛さんは、今日あたり戻つてかいなア。

小梅　大概戻つてくるつもりでござんす。コレ、千助殿、お前共包みを持つて、青柳に待合して下さん

せ。

供男　ハイ〳〵、畏りました。

ト楊弓の音になり、下座へ入る。髪結ひ床より伊八出て.

伊八　ヤレ〳〵。さつぱりとした。オヽ、お辰、大分手間がとれたの。（ト小梅を見て）ヤア、小梅さん此間はおそう〳〵でござりました。

小梅　伊八さん、此間ちやつと聞きましたが、お辰さんの身の上、愈々其談合でござりますかいな。

伊八　成る程、曾根段五郎様から、五十兩預かつた手附けの事。お辰、おぬしも其心でゐたがいゝ。

たつ　サア、其事は、小梅さんはじめ、梅堀の由兵衛さんとも談合の上、又あの長五郎さんに話し合うて、身の方附きは、ナア、小梅さん

小梅　其事は、こちの人由兵衛殿が、梅澤から戻られてから、兎もかうも談合して御返事せうほどに、伊八さん、マア、お辰さんを外へやる事は

伊八　そりやアわしも承知でござるが、何をいふにも、お待ひから取つてある五十兩の手附けで、先きからもやかましく言つて参りまする。わしも芳村の伊八、抱へへの藝者を、いやなところへやる氣はごんしない。又、長五郎殿の事も、承知の事なりや、其方の話しが早く解れば、わしが方はどうでもなります。

小梅　さう仰しやれば、お話し申しますが、あの長五郎さんは、わしが父さんが、長五郎さんの親御に、恩を受けて、世話をせにやならぬわけ、申さばお主筋同前。どの道夫も戻つてなら、お話しも、解るやうに致すでござりませうわいなア。

たつ　どうぞよいやうにお頼み申しますわいなア。

ト下座より出て

びん　モシ、お辰さん、彼の人に今逢ひましたが、青柳へ行かずに、こゝに待つてゐろといひましたよ。

伊八　併し、青柳へちやつと顔を出して來たがよからう。

小梅　わたしはこゝで、こちの人を待合はすあひだ、お前方はそんならマア、青柳へ行つての上

かれ　内の場合は、よいやうにいひますわいなア。

きみ　おれもそこまで一しよにぶらつかう。小梅さん、今の話しを由兵衛殿に

伊八　とつくりと、話しまするでござりませう。

小梅　合點ぢやわいなア。

たつ　由兵衛さんへ、よいやうに

かれ　サア、ござんせ。

ト辻打ちになり、皆々下座へ入る。小梅殘り、こなし、合ひ方。

小梅　アヽ、長五郎さんは大事のお主筋、其縁で、あのお辰殿の事まで、一方ならず身の上の世話。身受けの沙汰があれば、金のいる事、少しの事では埒も明くまい。何にしても、早うこちの人が戻つてなりやよいが、大方今日あたりは戻つてありさうなものぢやが、アヽ、待兼ねる事ではある。

ト此前より、源兵衛出かけゐて、うしろより抱き附く。

源兵　イヤ、おれも待兼ねてゐる。

小梅　（恟りして）ヤ、源兵衛堀の源兵衛さん。

源兵　此間は逢ひませぬ。御亭主の戻りを待兼ねるとは、眞實な小梅殿。さうして、たつた一人かえ。

小梅　アイ、こちの人を迎ひがてら、お前も待兼ねるとは、由兵衛殿に用があつてかえ。

源兵　イヤ、小梅どん、こなさんを待兼ねてゐた。

小梅　アノ、わたしを。

源兵　いつぞやから、此源兵衛が、こなさんにいうた事を

小梅　そりや、何をえ。

源兵　時代なやうだが、色よい返事を

小梅　エヽ、（トむつとして、ちやつとこなしあつて）ホヽヽヽヽ。源兵衛さんとした事が、相も變らぬ其

やうな事。わたしや前の身の上とは違ひますぞえ。四年あとに女夫となつて、今では梅の由兵衛が女房の小梅、てんがう言うて下さんすな。

源兵　てんがうとは、六月でなければお出なさらぬ。おれがいふのは實、誠。おれも源兵衛堀では、人に知られた源兵衛。ハテ、主のある小梅と知りつゝ、口に酢のたまるほどに口説くのも、商賣が植木屋だけ、木折りに行かぬはおれも合點。應とさへいや、談合づくで、又どうなりと、コレ、小梅どん、イヤ、由兵衛のおかみさん、おれが顔を立てゝくれる氣はないか。どうだ〳〵。

小梅　（取る手を振り放し）アヽ、これはしたり。何しなさんす。今にもこちの人が戻つてなら、わるいほどに、あぢやらにもそんな事をいうて下さんすな。わたしはちつと

源兵　（立上るを留めて）コレ、男にこんな事言はせて。そんなら、どうでも

小梅　ハテ、誰れも聞いてゐた事ぢやなし、源兵衛さんが、斯う〳〵いふ事いはしやんしたと、告げ口するやうな小梅でもないわいな。

源兵　サア、さういふ氣なら、おれがいふ事

ト又抱き附きにかゝるを

小梅　アヽコレ、マアこゝを

源兵　イヤ、返事を聞かにや、滅多に放さぬ。

小梅　アヽ、コレ〳〵、あそこへこちの人が

源兵　ドレ、どこへ。

ト思はず飛びのき、恟りして、うろ〳〵する。

小梅　おッつけ戻るであらうわいなア。

源兵　ヤア。

小梅　エヽ、阿呆らしい顔わいなア。ホヽヽヽ。

ト唄になり、日傘を持つて、ツイと下座へ入る。あとに源兵衛、うつかりして

源兵　いま〳〵しい。一杯くはしやアがつた。日頃から、いろ〳〵と口説いても、得心せぬあの小梅、由兵衛めがくッついてゐるうちは、心に隨はぬは尤も。こりやア一番、手を組んで、由兵衛めを方附けた上、彼奴をしめる魂膽をせにやならぬわえ。

ト思ひ入れ。下座にて

大勢　サア〳〵、法印殿、ござりませう〳〵。

トこれにて源兵衛思ひ入れあつて、髪結ひ床へ入ると、辻打ちになり、奇妙院、鐵右衛門外に以前の若い者梵天を持ち、わや〳〵いうて出てくる。伴七久庵も出る。

鐵右　木幡屋やの番頭さん、わしはお前に逢ひたうござりました。

伴七　オヽ、鍛冶屋の鐵右衛門、おれに用とは此間の

鐵右　お前に内證で頼まれたゆゑ、仕事の間を見合せて、そつとこしらへたあの合ひ鍵

伴七　アヽコレ、其金の事も、おれが呑み込んでゐるてや。

鐵右　（呑み込み）成る程、そんならマア、みんな先きへ行つて下さい。わしは此人に話しがあるから、あとから

大勢　法印様、お前もござりませう。

奇妙　イヤ、わしも又こゝに用もあり、みんな先きへ行つて下さりまし。

大勢　そんならあとからござりまし。……なアまいだんぶ。

ト辻打ちになり、若い者一同、鈴を振り鳴らし、念佛を唱へながら向うへ入る。

奇妙　ヤレ〳〵、騒がしいやつらではある。時に伴七殿、此法印に、衣を借りたいといはれたは、どういふわけで。

久庵　イヤ、そりや此久庵が、今夜茶番の趣向にちつと入用ゆゑ、無心をいひました。

奇妙　今日はもう内へ歸るばかり。ついでに錫杖も貸して進ぜませう。（ト衣を脱ぎ、錫杖を渡す）。

伴七　損料は此伴七が、衣に添へてお初穂を進ぜまする。

奇妙　ナニ、それには及びませぬ。そんなら、久庵様

久庵　慥かに借りた。忝い。
奇妙　晩にはしつかり當てさつしやりまし。
ト辻打ちになり、奇妙院向うへ入る。
伴七　鐵公、貴樣も氣のきかぬ、人の聞く所で今のやうに
鐵右　サア、此間わしがところへ、手紙で此通り、（ト煙草入れから手紙を出し）「此間内々にてお頼み申候ふ金簞笥の合ひ鍵、寸法の通り違ひなく御こしらへ頼み入候ふ、鍛冶屋鐵右衛門殿、木幡屋伴七」。外の人なら斷りもいへど、心やすいお前なりやこそ、拵へて進ぜましたが、どうぞ手間賃を其氣でやつて下さりまし。
伴七　オヽ、合點ぢや、骨は盜まぬ。（ト紙入れより金を出し）これを取つておいて下んせ。
鐵右　こりやァたつた二分。あんまり廉いではないかえ。
伴七　イヤ、もつとやりたいが、折角骨を折つて拵へてもらつたあの合ひ鍵。此間橋場の寮で、お娘の所へ行くくらまぎれに、犬が吠えつく、其時おッことしてしまつた。
鐵右　そりや、とんだ事をさつしやりました。
久庵　折角拵へた鍵を失ふとは、伴七にも似合ぬ。
伴七　サア、そこが戀の闇だて。此やうな事を目論むも、惚れてゐるあのお君ゆゑ。お娘も氣があるか

して、ひそかにおれに言うた事がある。
鐵右　イヤ、とんだ所で受けさせるの。
伴七　イヤ、受けさすのぢやない。店の支配する番頭ゆゑ、おれに甘へてねだり事、それ聞いてさへやれば、ハイ、ずる〳〵。これぱつかりは違ひなしぢや。
鐵右　モシ、番頭さん、話しが首尾よくいつたなら、もう二分も貰ひますによ。
伴七　そりやァ承知。其かはり、ちやつと頼みたいは、あそこの講釋場に、馬鹿息子の甚太郎が、講釋を聞いてゐる筈。わしがこゝに待合はすというてくれまいか。
鐵右　さういつて進ぜませう。
伴七　きつと頼んだぜ。
鐵右　よし、合點でござります。
ト辻打ちになり、下座へ入る。
伴七　サテ、これからぢや、久庵。今言ひ合した通り、貴樣が奇妙院といふ法印に化けて、あの馬鹿息子の甚太郎を一杯はめる魂膽。
久庵　先刻こなたに、大概な事は聞いたれど、又側からいゝやうに、合ひ槌を打つてもらはにやならぬ。
伴七　そりや何でもおれが呑み込んでゐる。幸ひ、あそこに占ひ者の見世、あそこの小道具をちやつと

借りてやつたがよい。

久庵　オット承知。そんならまづ衣裳を附けてから、此脇差しは、ちつとの間そこへ置いて、（ト脇差しを床几の上へ置き、捨ぜりふいひながら衣を着て）どうだ、すつぱり法印様であらう。

伴七　きついもの、誠に奇妙院、すつぱりぢや。（ト下座の方を見て）ア、、あれ〳〵、向うへ聟めがうせる。こなたはあの臺の上に乘つて。合點か。

久庵　承知々々。

と始終辻打ちにて、久庵、占ひ者の臺の上へしやにかまへる。伴七床几にかゝる。下座より甚太郎出てくる。揚弓の音。

甚太　ヤレ〳〵、講釋の肝心のところで呼びに寄越した。慥かこゝらにゐるといふ事だが。

ト近眼にて伴七を見附けぬこなし。

伴七　モシ〳〵、甚太郎様々々々々。

甚太　オ、、伴七か。わしを呼びに寄越したは何事。

伴七　何の用とは、昨日ちやつと言うておいた、見通しの奇妙院殿に、今日こゝで逢ひましたゆゑ、幸ひな所、お前の思ふ事、占うてもらはつしやりませ。

甚太　オ、、そんなら法印殿が來てござるか。

伴七　即ちこゝにゐられまする。

甚太　ドレ〳〵。

ト久庵の側へ行き、日をしかめて見る。

伴七　法印様、今お話し申しました。此仁が、即ち私し方の若旦那、甚太郎と申す仁でござります。

甚太　法印様、委細は伴七に承りましたが、何分よろしう御判斷を賴みまする。

久庵　これは〳〵、初めて御意得申すでござる。愚老即ち奇妙院、何事の判斷かは存ぜねど、とくと脉體を伺ひました上……病人ならば餘人にお見せなされ。

甚太　イヤ、少し緣談の事でござるが、よろしくお考へ下されまし。

伴七　（甚太郎をこちらへ連れて來て）モシ〳〵、甚太郎様、何事もこれづく。マア、先きへお初穂を。

甚太　オ、、合點々々。（ト紙入れより一分出して、紙に包み）これは輕少ながらお納め下され。

久庵　これは〳〵御叮嚀。（ト取つて懷へ入れながら）エ、ト。（ト算木を、いろ〳〵取つて、本なぞ繰り返し、いろ〳〵可笑しみの思ひ入れあつて）ムウ、頂中連のトンタクレン、ヘントウチンチクルイ……合つて末合はずといふ卦の表ぢや。

甚太　成る程、末合はずでござります。それをどうぞ、早く合ひますやうに致したうございます。

久庵　隨分合はせぬでもございませぬが、今申す通り、チンカイツウカントンビと申す卦の表、まづ申

して見れば、お前が手に入れようと思ふ女があつても、外が手をさし、足をさすの道理で、物に表しますれば四角な物、人で申さば前髪のある者が障ると見えまする。

甚太　ムウ、前髪のある者とあれば

伴七　モシ、若旦那、もしや内の長吉ではござりませぬか。

甚太　成る程、彼奴も滋皮が剝けてゐるゆゑ、油斷はならぬ。

久庵　其障りを除かねば、大願成就心元ない。

伴七　モシ、甚太郎樣、法印樣の占ひ、ぴし〳〵と當るぢやござりませぬか。こりやお願ひなされて、除けてもらひなされまし。

甚太　成る程、除けて下された上、わしが願ひの叶ふやう、御祈禱を賴みまする。

久庵　そりやモウ、正直を以て邪を除くでござるから、申さば其許の御正道、障りと申しまするは、よこしまでござる。

甚太　よこしまでも、たてしまでも、どうぞ宜しくお賴み申す。

久庵　左樣ござるなら、方除けの祈禱、緣結びのお禮、卽ち今日は十七日なれば、七日が間、丹誠を疑らし、御祈禱料が、（ト伴七が指を七本出して呑み込ますを見て）丁度七十兩かゝりますが、御承知かな。

甚太　よろしうござります。此儀調ひさへ致したら、又別段に、きつとお禮。まづこれはそれまでのお禮。（ト又紙入れより金を出し、包んで出す）。

久庵　これは〳〵、ろくにお見舞ひも致さぬに、御叮嚀なるなされ方、隨分世話をして、たてつけく調合……イヤ、御祈禱致しませう。

伴七　（いろ〳〵思ひ入れあつて）若旦那、なんと奇妙な占ひでござりませう。

甚太　成る程、奇妙院に違ひはない。

伴七　モシ、それで二十三日までに、右の御祈禱料七十兩拵へて、早うお守りを

久庵　そりやわしが直きに受けて參りまする。

甚太　これも日頃信心する、金毘羅樣のお庇、ちやつとお禮に

伴七　藥研堀までござりますか。

甚太　法印樣、よろしくお賴み申します。

ト辻打ちになり、下座へ入る。久庵伴七あと見送り

久庵　伴七、どうだ、法印のせりふ廻しは。

伴七　きついものだ。七日が間の御祈禱料、七十兩取つたら、又分け口はこさにある。（ト胸を叩く）。

久庵　そりや忝い。これから段五郎が言はれたお辰の一件。